
いちばんうしろの大魔王
ACT2
水城正太郎

HJ BUNKO


いちばんうしろの
大魔王
ACT2


学園の秘密に挑む阿九斗の前に
立ちはだかるのは……!?
「だけど、ボクは自分の信じることのために
キミを通すわけにはいかない」


「それなら……」


「傍から見たら
完全な悪役だと
思うんだよね」

いちばんうしろの大魔王
ACT 2

水城正太郎

HJ文庫

口絵・本文イラスト　伊藤宗一

目次

1　独房は楽しい？
2　あの子はだあれ？
3　みっつの鍵
4　生徒会長の逆上
5　陽気な陰謀家
あとがき



登場人物紹介
紗伊阿九斗（さいあくと）
真面目で善良なはずなのに将来「魔王」になると予言されてしまった主人公。
曽我けーな（そが）
落ちこぼれな天然少女。勘違いから阿九斗に懐いてしまう。
ころね
政府から派遣された人造人間。阿九斗の監視と護衛を行なう。
服部絢子（はっとりじゅんこ）
一途で純情なクラス委員長。阿九斗のことが気になっているが、常にすれ違ってしまう。
江藤不二子（えとうふじこ）
学園を裏から操る黒魔術師。阿九斗の力を手に入れようと画策するが……。

彼女の幼い頃の記憶は兄で埋め尽くされていた。

兄妹の年が離れていたため、彼女は兄から溺愛されていたのである。妹の望むことは何でもしてあげる兄だった。出来る限りわがままにつきあい、自分のことよりも妹のことを優先した。

もちろん、それだけで兄の記憶が強烈なものになるはずもない。

彼女がちょうど物事がよくわかりはじめる年齢になった頃に兄が死んだのだ。

なにかにつけて兄のことを思い出すようになった彼女は、やがて過去の楽しかった記憶をすべて兄に関係づけるようになり、自分にとって都合の良い記憶を捏造しはじめさえしていた。ついには記憶の中の兄は彼女の理想の男性像と混同されはじめ、強くて格好良くて優しい兄の像が彼女の脳内に誕生していた。

そのような記憶の捏造は誰にでもあることだし、表面化しなければなんの問題もないものだ。だが、彼女の場合は激しい形で嘘の破綻に見舞われてしまったのだ。しかも、多感な少女時代に。

彼女の家は古い名家であった。そのため彼女は名門『コンスタン魔術学院』に通うことになり、そこで兄についての真実を〝家のしきたり〟という形でしらされることになったのである。

「不二子、あなたは江藤家の家長とならなければなりません。失敗して死んでしまった、あのひどく情けない兄のかわりに！」

母が冷たい口調で告げた言葉は、江藤不二子にとって大きな違和感があるものだった。

――お兄様は家族の宝だったのでしょう？　――お兄様は優秀な成績だったけれど不幸な事故で亡くなったのでしょう？　――お母様たちは悲しかったから、ずっとお兄様の話をしなかったのでしょう？

いくつもの疑問が心に浮かぶ。だが、母は答えのかわりに不二子の手を無言で引いて、邸宅の地下室へと連れて行った。ずっと入ってはいけないと言われていた地下室だ。過去に何度か興味がわいて行ってみたことはあるが、入り口には必ず鍵がかかっていた。

母は用意していた古びた鍵を取り出して、地下室の扉を開いた。ひやりとした空気が漏れてきたが、埃っぽさはみじんもなく、意外にも最近まで頻繁にそこへの出入りがあったことを示していた。

そこには、中学入学を控えた年齢の少女にとっては酷な光景が広がっていた。

ガラスケースの中に、兄の死体が横たわっていた。記憶の中とは違い、兄の身体は貧相で頼りなく感じられた。もちろん兄の死後に不二子が成長したせいもあるが、それよりも彼女の理想化が相当なものであったことも大きい。それでも恐怖こそ感じなかったが、死体は死体である。寝ているだけのようにも見えるが、明らかに生きている人間とは違う表情をした兄に、不二子は近寄ることができなかった。有り体に言えば、潔癖で多感な年齢の少女は、死体に〝汚れた〟ものを感じたのだ。

「これから話すことは、誰にも言ってはいけませんよ。これからもずっと」

不二子の背後に回った母が口を開いた。不二子が振り返って見上げると、母はそれまで見たこともないような、怒りとも悲しみともつかない表情をしていた。母の左手に光の魔法で作り出した球体があり、そ

れが母の表情の陰影を際立たせていた。不二子が恐怖に顔をゆがめると、母は暴力的な強さで不二子の肩に乗せた右手に力を込めた。

「泣いてはいけません！　直視しなくてはいけないのです！」

不二子は何も言えずにただ震えていた。肩に置かれた手の力は弱まったが、母はまったく表情を変えずに、こう続けた。

「江藤家は代々、ムリートの測量士としての要職にありました。測量士とはムリート神に仕える重大な仕事です。あらゆる場所に赴き、その地の状況を神に報告する冒険者であるべき仕事です。しかし、それなのに、彼は――」

母は光の魔法球を持った手をガラスの棺に向けた。母が兄を名ではなく「彼」と呼んでいたのが不二子の幼い心にも無情を感じさせた。

「――学園で遺跡が発掘された際、そこで見た〝何か〟に、彼はあろうことか恐怖を感じ、職場を放棄して逃げ出してしまったのです！　それが何であったかは知りません。しかし、どうせ、半端なモンスターか、幻覚を見せる罠……そんな程度のものでしょう……。情けない……本当に情けない……。結局、遺跡の発掘は失敗……彼は責任をとらされ、公式の裁判で死霊術にかけられました。通常は犯罪者に過去を告白させるために行われることです！　わたくしたちは幸いにして裁判には行かずに済みましたが……どうやら、やはり幻覚を見せる罠にはまったのだとか。彼はずっと気が弱い子だったから……あなたとお人形遊

びばかりするような……。あなたが学園に入るときが、最後の裁判です。この地下室に身体を保管しておくのもそのときで終わりなんですよ……」

母の言葉はそこで途切れた。不二子が見上げると、母は涙を流していた。不二子に大人の微妙な感情が理解できるはずもなかった。不二子の心は、ただただ恐怖と無情と不条理とに満たされた。

——お兄様は情けない男だった。でも、優しい人だった。かっこわるいけど。でも弱いから死んじゃった。学校は怖い場所なんだ。でも負けたらこうなっちゃう。弱いとひどいことになる。でも、そんなつらいことをさせる神様は間違ってる。お兄様は優し……情けないけど、情けなくてなよなよして気持ち悪いからって死んでいいわけない。だったら神様もあたしを裏切るだろう。それにお母様もあたしが弱かったらあたしをこんな風に扱うだろう……。強くならないと。強くならないと……女の子だけど。

不二子はずっとそんな混乱を心の奥底に抱えることになった。

学園に入学した不二子は、決して他人に内心を見せなくなった。表向きは敬虔でおしとやかな顔を見せ（それがお嬢様育ちの彼女にとって〝強い〟女性像だったからだ）、裏では黒魔術を含む魔術の猛勉強に励むことになった。死霊術を学び、兄の死体の一部を盗むことで首の再生に成功した。そこで母の言葉が真実であったことを改めて知ったが、もう落胆しなかった。そして不二子は学園のマドンナ兼、最強の裏番として成長する。何事もなければ、彼女はそのまま測量士兼、黒魔術師たちのスパイとして活躍し、歴史を揺るがす存在になったかもしれなかった。

しかし、あの魔王が学園にやってきたことで、彼女の運命は大きく変わることになる。

1　独房は楽しい？

紗伊阿九斗は、魔術の初歩の実技授業に難渋していた。校庭に二人一組で並び、魔術のあらゆる力の基礎であるマナを球体にしてキャッチボールのように投げ合うという練習である。難渋していたのは、その内容にではない。校庭に立っている彼の周囲に誰も近づいてこないのである。

——やはり悪い評判は消えるものじゃないんだなぁ。

阿九斗はこういうときにどういう顔をしたものか迷い、結果として苦々しい表情になっていた。彼は絵に描いたような美形であるが、生まれつき目つきが悪く、切れ者の悪人風顔立ちをしている。そんなわけで、悪評以上に近づき難い状況を自ら無意識のうちに作り出しているのだったが、当人はそこに気づいてはいない。

——魔王になると予言されてから、ずっとこれだからなぁ。まったくいいことは何もないってのか……。

百パーセントの的中率を誇る予言により、将来は魔王になると告げられてしまったのがケチのつきはじめだった。それから阿九斗は全生徒から目の敵にされ、誤解され、政府から監視までつけられている。当然ながらまともな学園生活など送れるはずもない。

それでも阿九斗にも友達はいるにはいた。三輪ヒロシ。いたずらっぽい少年の顔をした小柄なクラスメイトで、同じ年齢であるが阿九斗のことを兄貴と慕っている。ただ、そのヒロシですら今日に限っては「あっ

しには兄貴のお相手なんてとてもとてもとても……」と、逃げ出してしまっている。
——何が〝とてもとても〟なのやら……。しかし、そうそうヒロシに甘えるわけにもいかないし、なんとか新しい友達を見つけろってことなんだろうな。
阿九斗はそう前向きに考えて周囲を見回す。校庭に並ぶクラスメイトの皆が目をそらした。が、視界の端でなにやら話し合っている二人を見つけた。クラス委員長の服部絢子と担任教師の鳥井美津子先生だった。二人とも元気がいいというか、あまり遠慮のない性格なので、会話は阿九斗のところまで響いてくる。
「紗伊阿九斗君が魔術の制御方法を学ぶのは必須なの。だからよろしく頼めるかしら？」
美津子先生は言った。背が高くて癖っ毛で丸眼鏡。気さくな女性だ。
「お断りします」
ぴしゃりと言った絢子は、クールで高潔な雰囲気の美貌の持ち主だが、やや目元がきつくて性格の頑固さがうかがえる。
「でも、あなたしか頼めないの。クラス委員長だし。ほら、あなた強いし」
美津子先生はさらに食い下がるが、絢子も負けていない。
「そんなことを言っても限度というものがあります。誰が好き好んで彼と魔法訓練をしようと思うんですか？」

「でも彼は初体験だから。やっぱり、どうしてももらわないといけないことだし。ねぇ？　ほら、彼の初めての人になれるのって、よくない？」
　美津子先生がいたずらっぽく言うと、絢子は顔を真っ赤にした。
「恥（はじ）を知ってください先生！　まったくそんな破廉恥（はれんち）な台詞（せりふ）を！」
「やぁねぇ、授業のことよ。何を想像したのよ」
「授業のことなのは知っています。どちらにしろ冗談（じょうだん）はやめてくださいませんか……」
　絢子は急に声をひそめて言った。そして、阿九斗の方をちらりと見る。阿九斗は応（こた）えて軽く手をあげた。と、絢子はいきなり怒（おこ）り顔に。
「立ち聞きをするな、紗伊阿九斗！」
　——いや、聞こえるようにしゃべってるじゃないか……。
　内心でそう思ったが、阿九斗は声を出さずに、あげた手をゆっくりと下げた。
　すると、絢子がずんずんと大股（おおまた）で歩いてきた。
　文句を言われる、と身構えた阿九斗だが、絢子はぴたりと阿九斗の顔面を指さし、大声でこう言った。
「貴様！　聞いていたならわかっているだろうが！　何を突（つ）っ立（た）っている？　さっさと準備しろ！」
「え？」
「だから、準備しろと言っている！」

絢子が視線を周囲に彷徨(さまよ)わせながら発した言葉で、阿九斗は彼女が何を言っているのかをようやく理解した。
「あ、ありがとう」
感謝のあまり、阿九斗は両手で絢子の手をとる。友達がいない男が女の子にちょっと優しくされただけでひどく感動してしまったというなさけない光景なのだが、長身の阿九斗がそういう仕草をすると、周囲からは、気取って女性を口説いているようにしか見えない。
密(ひそ)かに阿九斗に注目していた生徒達がざわつく。
「やはりさすがは魔王(まおう)……」
「やっぱり委員長は完全に魔王に籠絡(ろうらく)されてしまっているのか……」
そんなささやきが聞こえたのか、絢子は顔を真っ赤にして阿九斗の手を振(ふ)り払(はら)った。
「だから離(はな)れて準備しろ！」
「わかった。いや、悪かった。そういうつもりじゃなかった」
阿九斗にも周囲の声は聞こえていたので、そう言って魔術(まじゅつ)実技のために距離(きょり)をとろうと歩き出す。
「いや、待った」
と、絢子が阿九斗を呼び止めた。
「どうしたんだい？」

「注意しておこうと思ってな。いいか？　この授業は、マナの球を投げ合って、マナの柔らかなコントロールを学ぶものだ。皆は中学で終えている本当の初歩の初歩だ。とはいえ、ふざけたり集中を切らしたりすると危険なことになる可能性もある。それも自分でなく相手が危険になるわけだ。それだけは理解しておけ」

絢子が念を押す。阿九斗はうなずいた。

「わかった。もちろん君を傷つけたりはしないさ」

真剣な表情で阿九斗は言った。

絢子は顔を真っ赤にした。

「だから、その気障なセリフをやめろと言っている！」

――真面目に言っているだけなんだけどな……。

阿九斗は内心でぼやきながら距離をとる。絢子と十数メートル離れて向かい合った。

「いくぞ」

絢子が合図して、右手をあげた。その手の中にボール大の光球が出現する。

空間に満ちているマナを制御するのが魔術である。帝都中央の発電設備から地球そのものに流し込まれているエネルギーにマナは共振するようにできており、見かけ上はマナがエネルギーそのものとなっている。さらにマナは生物の体内にも蓄積でき、そこからエネルギーを取り出すこともできる。マナの蓄積量は個人によって違うが、体内のマナが多いと、大気中のマナにも大きな影響を与えやすい。人間の意志が脳

内の電気に変わり、その電気によって体内のマナが操作され、外のマナが共振する。つまり魔術に重要なのは、生まれつきのマナ蓄積量と集中力なのである。そして、その集中力を鍛えるのが今回の授業の眼目なのだった。

「受け取れ」

絢子が軽く右手首を返した。マナ球がゆるい放物線を描いて阿九斗の方に飛んで行った。

阿九斗は右手をあげた。絢子はコントロールに慣れているのか、阿九斗は手を動かす必要はなかった。その手の中にマナ球は柔らかく納まった。

「ボールをゆっくりと投げるイメージだ。さぁ返してこい。ゆっくりとだぞ」

絢子が右手をキャッチボールをするときのように差し出した。

「君がやったようにやればいいんだな？」

阿九斗が言うと、絢子はうなずいた。

「それじゃ……」

それなら、と阿九斗は右手を軽く振る。

――手首を返して、ひょいっ……と。

繰り返しになるが、生まれつき体内に蓄積されているマナが多いと、大気中にあるマナに与える影響も大きくなる。

つまり……。

ギュン！

凄（すさ）まじい轟音（ごうおん）をあげてマナ球が大気を切り裂（さ）いた。まるで絢子に向かって放たれたライフル弾（だん）のように。

「ひー！」

短い悲鳴をあげたが、絢子とて学年で最強と呼ばれていた使い手である。凄まじい速度のマナ球を身体の前で両手で受け止めてみせた。だが、マナ球のエネルギーは絢子の身体を後ろに吹（ふ）き飛ばし、あまつさえ腕（うで）をへし折らんばかりの凄まじいものだ。

――危ない！

阿九斗はマナ球が絢子の身体を吹き飛ばす前になんとかしなくては、と思う。

そして、その考えは即座（そくざ）にマナ球に伝わった。

ドン！

マナ球は絢子の手を押し開くように吹き飛ばしながら、爆発（ばくはつ）四散した。

閃光（せんこう）が絢子を包むように拡（ひろ）がった後、絵に描いたようなキノコ雲が校庭に立ち上った。

あまりのことにクラスメイトたちがざわつく。

煙（けむり）が退（ひ）いてみると、校庭に小さなクレーターができていた。

その中央にへたりこんだ絢子の姿がある。

「な……な……」

絢子は怒(いか)りと驚(おどろ)きに目を見開いていた。どうやら無傷のようではある。阿九斗の絢子の身体を傷つけまいという意識が作用したに違いなかった。

「だから嫌(いや)だと言ったのだ！　貴様はまったく加減というものを……」

絢子が立ち上がって阿九斗を非難しようと指さす。

と、その指が止まった。

自らの身体を見て絢子は全身の肌(はだ)を真っ赤にする。

着ていた制服がぱらぱらと崩(くず)れ落ちだしたのだ。

「ひゃ、ひゃああ！」

今や素(す)っ裸(ぱだか)になってしまった絢子が身体に腕を巻き付けてうずくまった。

「おお！」「これは……！」とクラスの男子たちがざわめく。

「可哀想(かわいそう)でしょ！」「男子サイテー」女子は違った意味でざわめく。

「ご、ごめん……」

阿九斗は絢子に駆(か)け寄る。

「馬鹿(ばか)！　馬鹿！　来るな！」

絢子は激しく首を振(ふ)った。

「だけど、放っておくわけにも……」

阿九斗は絢子の側に立ち、制服の上着を脱いで彼女の背中にかけた。サイズの大きな上着は絢子の身体をすっぽり覆い隠した。

「あ、ありがとう……」

驚いた顔で絢子は阿九斗を見上げる。

どこかおぼつかなく絢子は礼を言った。が、すぐに上着の前を手で押さえると、立ち上がって表情を引き締め、阿九斗をにらみつける。

「……いや、よく考えればありがとうとこちらが言うのも何か間違っている！」

「それはそうだ。僕が悪いんだから」

阿九斗が素直に頭を下げる。絢子は悔しがっているのか恥ずかしがっているのか、引き結んだ口の中で歯をがちがちいわせながらも顔をさらに赤らめた。

「なぜ素直に謝る！」

絢子は手を上着から離せないので、殴りかかるかわりに阿九斗に向かって蹴りを放つ。

「すまないとは思っている。それに、うまく制御ができなくて……」

阿九斗はうなだれたまま、絢子の蹴りを素直にその身体に受ける。

そのまま六回ほど蹴った絢子だが、抵抗がないのがカンに障ったらしく、さらに怒りはじめた。

「なぜ素直に蹴りを受ける！」

「何度も言っているけど僕が悪いんだし、それに……」

　阿九斗は絢子の身体を指さした。彼女のかぶっている上着の裾が蹴りを出したことでまくれあがってしまい、形の良い足が露出している。

「それに僕が避けたら、みんなに足が見えてしまうよ」

　阿九斗があくまで優しく言うと、絢子は数秒ほど不意を衝かれた表情になった。それから恥ずかしさに頬を染めたまま、さらに阿九斗を蹴り続ける。

「ふざけるな！　貴様、どこまで私に屈辱を与えるつもりか！」

「だから、暴れない方がいいから……」

　阿九斗と絢子のそんなやり取りを、クラスメイト達は遠巻きに眺めていた。クラスメイト達に二人の会話は詳しくは聞こえていないため、その様子について彼らは憶測で会話を交わす。

「すごいな……さすが魔王。なんという残虐さ。初心者用の魔術教練と安心させておいて洋服を吹き飛ばすとは」

「しかも、わざわざ裸にしておいて自分の上着を着せるなんて……。完全に弄んでいるとしか思えないな」

「さらには委員長に抵抗させて、それを薄笑いを浮かべて見ているなんて！　きっと委員長に無力感を味わわせているんだ。ひどい性癖だぜ……」

「そりゃあ、魔王だものな……」



男子生徒達はつばを飲み込み、女子生徒達は顔を赤らめる。そしてその後、どちらも阿九斗に対して嫌悪の目を向けるのだった。

「ああ、ほら、何か妙な話になっている。服部さんも何か言ってくれよ……」

阿九斗が小さく皆の方を示すと、ようやく絢子はクラスメイト達が何を噂しあっているか気づいたらしい。

「ま……まさか、貴様、私を邪な計略にかけて辱めようと……」

絢子は怯えた表情になり、両手を身体の前で組んで後ずさった。

すぐさま阿九斗は否定する。

「いや、そんなはずないだろ。前にも言ったけれど君のことはとても大切に思っているし、あんな風な妙な噂からも出来る限り守りたいと……」

その言葉が終わる前に、絢子はみるみる顔を歪ませ、涙をその目に浮かべていた。

「馬鹿、馬鹿っ……！　貴様のそういう態度がいかんのだっ！　善人か悪人かはっきりしろっ！　それに大切に思っているなら、私のことを……」

絢子は何事か言いかけたが、すぐさま顔を阿九斗から背け、ものすごい勢いでその場を走り去った。阿九斗には引き留める暇はなかった。

「ま、まいったな……」

　阿九斗が困惑に立ちつくすと、そこに近づいてきたのは一緒に訓練するのを断ったヒロシだった。素直な少年が感心した際にそうするように、うなずきながら阿九斗の側に立つ。
「いや、さすが兄貴です。あっしは感服しました」
「何だよ、感服って」
「あんな風に自分の女をからかうなんてワルですね。その上、初心者向けの授業であってもクラスに自分の魔力を誇示する手段とする。あっしも兄貴がそうするんじゃないかと思い訓練の相手を断らせていただいたわけですが」
　ヒロシはお世辞でなく本当に感服してそう言っているらしかった。その瞳が純粋な色に輝いている。
「……言いたいことはいろいろあるけど、どこから反論していいのかわからない」
　阿九斗はぼやく。と、そこに美津子先生が近づいてきた。腰に手を当てて、苦々しいというよりは面白そうな苦笑を浮かべている。
「ちゃんとマナを制御してよね。ただでさえあなたは馬鹿力なんだから」
　美津子先生は眼鏡の位置を直しながら、絢子が走っていった先を見る。
「彼女、またしばらく授業に来なくなっちゃうじゃない。純情なんだからさ」
「すいません」
　阿九斗は素直に頭を下げる。
「わたしに謝っても仕方ないでしょ。それより精神を鍛えて二度と繰り返さないようにしないと」

「とは言っても、精神を鍛える初歩の授業がこれなんですよね？」
　阿九斗が聞くと、美津子先生は困ったように上を向いた。
「その通りなのよね……。あ！　でも荒寮治ならあったわ！　そうね、少し危険だけど、やってみる価値はあるわ」
　美津子先生はグッドアイデアとばかりに、嬉しそうに阿九斗の肩を叩いた。
「どうしてそんなに喜んでいるんですか？」
　不思議そうに阿九斗が聞くと、美津子先生は目を輝かせた。
「この学園では何年もやった生徒がいない精神鍛錬よ！　なんでも大変なことになってしまった者が多数出たので中止になったとか！」
「ひとつ聞いていいですか？」
「大丈夫よ、身体に危険はないわ。大変なことっていうけど、ただの大変なことだから」
「そこじゃありません。どうして嬉しそうなんですか？」
　阿九斗に指摘され、美津子先生は、はっとして口元のよだれをぬぐった。
「い、いや、なんでもないわ。過去に死んだ人がいるとか、そんなことはないわ」
「それならいいんですが……」
　阿九斗は美津子先生を冷ややかに見返す。先生は自分を合法的に殺したがっているのではないかと阿九斗は疑っている。他の生徒のようにむやみに阿九斗を恐れておらず、阿九斗の性格もある程度理解し

てくれているのはいいが、魔王としての能力には興味を持っていて、死後に死霊術をかけて実験台にしようと思っているらしい。

「それで、どんな修行なんです？」

阿九斗が聞くと、美津子先生はうなずいた。

「精神修養房と言われているわ。そうね、スハラ信者がやる座禅と同じようなものよ」

そう美津子先生が言うと、ヒロシが大げさに驚く。

「ええ！　あのコンスタン魔術学院名物、精神修養房！」

「何かやばいものなのかい？」

阿九斗が不思議に思って聞くと、ヒロシは怪談でも語るような顔になる。

「はい。何年も前にあそこに入って死んだ生徒が居た……むぐっ」

ヒロシの言葉は途中で止まった。美津子先生がヒロシの口を塞いだのだ。

「うふふふふ。大丈夫。問題はないわ。どうってことないのよ」

美津子先生は笑っているが、阿九斗もさすがにそこまで鈍くはない。

「今回は遠慮を……」

しかし、その言葉を遮って美津子先生が声をあげる。

「あ、ほら、スハラ信者の座禅みたいなものだって言ったじゃない？　その訓練をやり遂(と)げたと知ったら、服部さんも許してくれるかもよ」

　取り繕(つくろ)うような言葉だったが、阿九斗の心を揺(ゆ)さぶるには十分だった。

　──そうか、そうかもな……。

「そういうことなら……」

○

　放課後になって寮(りょう)の自分の部屋に戻(もど)った阿九斗は、ベッドの上で転がっている女の子の姿を見て不満そうな顔になった。

　柔(やわ)らかい緑色の髪(かみ)。人形のような完璧(かんぺき)な美しさの顔立ち。芸術家が作った理想の少女の彫刻(ちょうこく)といった姿の美少女である。が、彼女はだらしなく寝転(ねころ)がって漫画(まんが)雑誌を読みながら、傍(かたわ)らに置いた袋(ふくろ)から人形焼きを取り出しては口に運んでいた。美しい姿に似合わず、中年の主婦か無職の若者しかしないような態度である。

　彼女は『リラダン』と呼ばれる人造人間である。名をころね。これでも政府から派遣(はけん)された監視員(かんしいん)である。魔王になると判断された阿九斗を始終監視(かんし)するために寮に同居しているのだ。

「帰ってきましたか。特に異常はなかったようですね」

　ころねは阿九斗の顔も見ずに言う。さすがに阿九斗は呆(あき)れる。かつては四六時中はりついているころねだったが、最近は姿を見せないこともある。そして何をしているかというと、基本的にはこうしてさぼっているのだ。疲(つか)れを知らない人造人間であるというのに。

「ちゃんと監視してた？　授業で異常はあったと思うけど……」

「大丈夫です。誰も怪我(けが)はしていませんし」

　ころねは断言した。

「見てたのかい？」

　阿九斗はいぶかしむが、ころねはやはり断言する。

「はい。遠隔地(えんかくち)からでもモニターできるようになりました。それに、どこにいても自分は瞬時(しゅんじ)に駆(か)けつけることができますので」

　ころねはそう言いながらも人形焼きを口に運ぶ。それが妙(みょう)に阿九斗には気になった。

「それ、人形焼きだよね？　帝都(ていと)は浅草名物の」

「そうです。食べますか？」

「いや、いらない。それより、人造人間ってものを食べるの？」

「食べることもできます。内部で化学変化を起こしてエネルギーに変換(へんかん)します。微々(びび)たるものですが」

「基本的には、そんなことしなくていいんだよね？　どうして食べるの？」

「いえ、おいしいですから」

「それだけ？」
「はい。それと自分は食べても太りませんし」
「そりゃ人造人間だしね。でも太ることを気にしてるの？」
「していないから太らないと言っているんです」
「え？　え？」
ころねと話をしているとわけがわからなくなる。常に無表情で他人をからかうようなことを口にするのが彼女の特徴なのだ。ともかく阿九斗はころねを無視して修行に必要な荷物を探しはじめた。
「何をしているんです？」
ころねに聞かれて、仕方なく阿九斗は美津子先生の言っていた精神修養房のことを告げた。すると、ころねは思わぬことに人形焼きを口に運ぶ手を止めてこう言った。
「自分も一緒に行きましょう」
「え？」
「監視員として一緒に行くと言っているんです」
「どうして？」
「面白そうですから」
「……普段さぼってるのに？」
「それがどうしましたか？」

「…………いや、なんでもない」

阿九斗は荷物をまとめた。荷物とは言っても金属の水筒がひとつと防水の布袋だ。必ずそれだけを持っていけと美津子先生に言われたのだ。

ともあれ、防水袋に入れた水筒を提げて美津子先生に言われた場所に向かう。ころねは後ろをひょこひょこついてきた。

「あまり使われていない場所ですね」

ころねの言葉通りだった。指定の場所は校舎近くの池を回り込んだあたり。生徒がくつろぐための庭として作られたのだろうが、周囲の濃すぎる茂みと池の湿度に阻まれて人が寄りつかず、寂れた田舎邸宅の手入れの悪い庭園のごとき雰囲気をたたえている。

「確かに人は入ってないな」

茂みを手で分けて無秩序に伸びている草を踏み、阿九斗は漆喰壁で作られた真四角の建物にたどり着いた。大きさは一辺の長さが人一人が手を広げたくらいしかない。かがまないと通れない小さな扉があるが、中に入ったら座っているくらいしかできないだろう。

「なるほど。こりゃ精神修養にしか使えない」

阿九斗は妙に感心して言った。腰をかがめて扉に手をかける。その扉のノブがキラリと光った。合成された声が響く。

《この扉は一度中に入ると、鍵がかけられ十二時間は中から開かないことになっています。緊急時の連絡方法を確保し、すべて自己責任でお入りください》

「そういう仕組みなんですね」

ころねが言った。

「そうらしい。じゃあ、十二時間後に。あと生徒手帳のマナ通信で連絡したら緊急事態だからよろしく」

阿九斗はころねに向かってうなずいて扉を開けた。漆喰壁で囲まれた空間に畳が敷かれているだけ。ひやりとしてよどんだ空気の中に入る。扉を閉めた。

「よろしくとはどんなことですか?」

「助けを呼ぶなり開けるなりしてくれってことさ」

阿九斗はそう言ってから、何かおかしいと気づいて横を見た。ころねがいた。扉は完全に閉まっていた。

「入ってどうするんだよ!」

「監視員として一緒に行くと言いましたが?」

ころねは平然としている。

阿九斗はため息をついた。二人でいるには狭い空間である。これでは精神修養にはならないだろう。

――せっかく一人でいるにはいい空間だったのに。

外からの光が遮断されており、天井全体が薄くマナで光っているだけの薄暗い空間だ。周囲を見回すと、扉とは反対側の壁になにやら小さな文字がびっしりと刻まれていることがわかった。顔を近づけてみ

るとどうやらかなりの長文が刻まれているらしい。薄暗いので読むのは骨だ。それでも指先にマナを集中させて明かりにし、なんとか少し読み進めて見ると、それは帝国憲法の一部だった。

——壁一面で憲法の前文か。これを暗い中で読むためにはマナの明かりを制御して照らしながら読まなくちゃならない。それで精神を鍛えろってことか。

「まさかとは思っていたけれど、やっぱりこれで死ぬってことはないな。疲れるけど」

　阿九斗は安心して畳に座り込んだ。

「そうですね。なにやら妙な噂があったようですが、すべて根拠のないものだったのでしょう。それに、こんな古風な精神集中法、今時スハラ信者でもしません。ここはいつしか使われなくなったので、伝説化してしまったのでしょう」

　ころねもそう言って座り込む。狭い空間なので、当然、阿九斗の膝ところねの膝とがぶつかった。ころねは座る位置を直したが、どうしても阿九斗とはぴったりと寄り添う形になってしまう。

「あのな」

「はい」

「狭いよ」

「そうですね」

「……現状確認の意味で言ったんじゃなくて、文句なんだけど」

「文句を言ってもここは広くなりませんし、こちらも小さくはなれません」

「…………」

「黙らないでください。それより、修行でしょう？　どうぞ、壁の憲法をお読み下さい。退屈でしょうが、修行ですから」

ころねがそう嫌味ったらしくうながす。もちろん無表情のまま。

阿九斗はしぶしぶ壁に目をやり、マナ光を操るべく集中しようとしたが、そこでころねがじりじりと身体を寄せてきたことに気づいた。

「あのな」

「はい」

「離れてくれないか？」

「修行を手伝っているのです。このような状況でも集中しなくてはなりません」

ころねがぴったりと身体を押しつけてきた。人造人間だが、その感触の柔らかさは人間とまったく同じだ。これにはさすがに阿九斗も困る。ころねに目をやるが、ころねはまっすぐに目を見返してきて、気詰まりなことこの上ない。それで目を下にやると、狭いところでごそごそしていたので、ころねのスカートが乱れて下着がわずかに覗いている。こうなるともうどうしていいのかわからない。

「手伝わなくていい！」

阿九斗はころねから身体を離そうと膝をつかって畳の上を這う。狭い部屋ながら、さすがに身体をずらすだけの隙間はある。が、逃げた先にも女の子の身体の感触があった。

「回り込むやつがあるか」
　阿九斗が文句を言って動いた先を見た。が、そこには何もない。
「？」
　疑問に思って振り返る。先ほどまでの位置にころねがいる。
「回り込んでなんかいませんが」
「え？」
　阿九斗は不安に思って空間に手を伸ばす。水を一杯に満たした革袋のような柔らかいが張りのある感触が手に触れる。
「きゃん！」
　という悲鳴が虚空から響いてきた。
　――ああ、やっぱり。
　阿九斗は何が起こっているのかを覚り、虚空をにらんだ。
「けーな。まさか入ってくるなんてどういうつもりだ？」
　すると、間延びした声がこう答える。
「だって、あーちゃんがなんか一人で部屋にこもるって聞いたんだもん。おべんとうがいると思って」
　阿九斗が少し上に目をやると、空中にぷかりぷかりと浮かんでいるものが見えた。弁当の包みだ。
「だからって入ってくるやつがあるか」

阿九斗はぼやく。

誰もいない空間から話しかけてくるのは、曽我(そが)けーな。彼女は魔術(まじゅつ)が苦手な落ちこぼれ生徒で、魔術実習の授業は必ずさぼるが、どういうわけか凡人(ぼんじん)にはかなりの精神集中を必要とする姿を消す魔法と飛翔(ひしょう)魔法だけは得意なのだった。そんなわけで、その透明化(とうめいか)の魔法を使ってはふらふらとあちこち回っているのだった。

「だって、扉(とびら)が閉まっちゃったんだもん」

けーなが文句を言いながらその姿を現した。

燃えるような赤毛が印象的だ。頭頂部にまとまった毛が何房(ふさ)かアンテナみたいにぴんと立っているのも目を引く。顔立ちはよく言えば柔和(にゅうわ)、悪く言えばぼんやりとしている。見ているだけで眠(ねむ)くなってくるような顔だ。

ただ、今、この瞬間(しゅんかん)に印象的なのは、彼女の顔立ちでなく、彼女が服を着ていないことだった。阿九斗の眼前にけーなの小さめの乳房(ちぶさ)が堂々と浮いている。

「ちょ、ちょっと……！」

阿九斗が慌(あわ)てると、けーなもそこで事態を覚ったらしい。

「きゃああ！」

と、足と腕(うで)を折りたたむ。

けーなは身体しか透明になれないのだ。裸になってから姿を消すのだが、元に戻る際に裸であることを忘れることがある。

「薄暗いからはっきりとは見ていないよ」

阿九斗はそう言って周囲を見回す。けーなにかけてやるような布はない。仕方なく自分のシャツを脱いでけーなに押しつける。

「いずれ僕の服が全部無くなる気がする」

阿九斗はぼやいた。

「自分の制服はサイズが小さいですから」

ころねがそう言って、阿九斗とけーなを交互に見てから、こう言った。

「それにしてもかなり狭いですね」

「冷静に言わないでくれ。大変な事態だぞ。この狭い空間で十二時間だ」

阿九斗は頭を抱えた。入った当初から本当は三人だったのだが、改めて姿が見えてみると狭さをひしひしと感じる。

ころねはそれでも冷静だ。

「自分は困りませんが」

「そりゃ君はそうだろうさ」

阿九斗の語気にも苛立ちが混じる。

「まぁまぁ」
　と、そこになだめるようにけーな。
「あーちゃんも怒(おこ)っちゃ駄目(だめ)だよ。ほら、お腹が減るといらいらするんだよ」
　シャツを着たけーなが弁当の包みを差し出してきた。
「今回ばかりはあまり空腹とは関係ないと思う」
　阿九斗は反論したが、けーなは少しもこたえていない。
「大丈夫(だいじょうぶ)、お腹いっぱいになったら全部忘れるよ」
　けーなは微笑(ほほえ)む。阿九斗はそう答えられて言葉に詰(つ)まった。けーなに説得されたわけではない。素肌(すはだ)に男物のシャツだけのけーなの格好が薄暗い中でやたらと浮き上がって見えてきて戸惑(とまど)ったのだ。
「いや……その……食べるのは後でいい」
　阿九斗はけーなから目をそらした。
「修行です。精神集中です」
　ころねがわざわざこのタイミングで阿九斗に言う。
「うるさい!」
　阿九斗は声を荒(あら)らげた。が、すぐに冷静に考えを改める。
　——しかし、まぁ、精神を集中させるには良い機会だ。修行修行……。

確かに左右から挟んでくる二人の身体を気にしていたら何もできない。阿九斗は細かい文字の憲法に集中することにした。指にマナの光を光らせて、顔をぐい、と壁に押しつけるようにする。

――さて、腰を据えて読むか。これを読むしか逃げ場がないのはいいかもな……。

数分もせずに阿九斗は文章に集中することができた。しかし、その集中も数分のことで、すぐに脇腹をつんつんと突かれる。

「もう……なんだよ」

もちろん突いていたのはけーなだ。

「ねぇ？　お腹すかない？」

「すかないよ」

「……お腹すかない？」

「すかないってば」

「…………お腹すかない？」

けーなは小首をかしげるようにして言った。

「わかったよ。君が弁当を食べたいんだな」

阿九斗はため息とともに言い、壁から顔を離した。彼は、どういうわけかけーなには弱い。他の女の子に強いかはともかくとして、けーなには抵抗できないというか、彼女の行動はどんなものであってもすべて許してしまうところがある。というのも、どうやら孤児院時代にけーなとは会っているらしく、その時からど

こか気になる存在だったのではないか、と阿九斗は思っている。あやふやな言い方だが、ともかくけーなには阿九斗を平服させてしまうような何かがあるのだった。

　けーなは弁当を開いた。白米のおにぎりがいくつも入っている。

「これは？」

　阿九斗は端（はし）のひとつを指さして聞いた。

「おにぎりだよ！」

　けーなは元気よく答えた。

「そうじゃなくて、何のおにぎりなの？」

「よくぞ聞いてくれました！　これは千年以上の伝統を誇（ほこ）る銘柄（めいがら）、アキタコマチだよ！」

　けーなは力を込めて言った。

「お米の銘柄はわかったよ。中の具は何かな」

「だからアキタコマチ」

「へ？」

「アキタコマチが具。コシヒカリがおにぎり」

「ふうん……そうなんだ」

　阿九斗は抵抗する気力を無くして、そのおにぎりを口に運んだ。単なる塩むすびと思えば当然ながらまずいものではない。

「お米はブレンドがポイントなんだよ！　配合の割合を変えるとそれはもう別の食べ物と言えるんだよ！　例えば……」

　内容はなんだかわからないが、けーなは白米の素晴らしさを力説しはじめた。いつものことなので、阿九斗は話半分に聞きながら、また憲法に戻った。不思議なもので、けーなが騒ぐとそれがBGMになってより集中しやすい。

　――なるほど。魔術的な集中というのは、貧乏時代のアルバイトと同じタイプの集中でいいわけか。これまでは魔術だというので気張っていたけど、どうやら難しく考える必要はないらしい……。

　そんなことを考えていると、背後から米粒が飛んできて読もうとしていた文字に貼りついたことに気づいた。振り返ると、熱弁していたけーなが阿九斗が話を聞いていないことに気づいたらしく、おにぎりを食べながら大声をあげていた。

「そこまで言うなら、お米を大切にしなさいな」

　阿九斗はそう言いながら、壁についた米粒を指でつまんだ。糊みたいになった米粒は、壁にぴったりと貼りついていたが、剥がすにはそれほど困難はないはずだった。が、阿九斗は違和感に気づいていた。壁の一部が米粒につられて剥がれるような感じがする。

「あれ？」

　壁のその部分をよく見てみた。どうやら壁に紙が貼り付けてあり、その上からまるで紙の存在を隠すかのように壁に書いてあるのと同じ憲法が書いてあるようだ。

紙を剥がしてみる。羊皮紙だ。普通の紙が当たり前のようにあるのだから、そうそう使われるものではない。

羊皮紙には地図と文字が書かれている。線はすべて羊皮紙を焦がして書かれていた。魔術によるものだ。手で書く方が早いから、わざわざそんなことをするのは、その方が後年まで保つからだろう。この文書が後々まで消えないように願っていた誰かがここに貼り付けたということだろう。

「いたずらにしては手が込んでるね」

阿九斗は言った。けーなは目を輝かせて阿九斗の持つ羊皮紙を覗き込んでいる。

「ねぇ、これって宝の地図だよ、あーちゃん！」

けーなは興奮して言った。

「何を子供みたいなことを……あれ？」

阿九斗は文字を読んで驚く。どうやら、本当に宝の地図のようだ。しっかりとした地図か書かれているし、その下の文面はこうなっている。

《この地図を見ている勇気ある者に告げる。封印された秘宝は地図に印した三箇所に隠した三種の鍵を集めることによってその姿を現す。だが忘れることなかれ、秘宝が何かを知る者は常に秘宝を探している。無私の志を持つ者、死を賭す者だけ秘宝を探せ。資格なき者は死あるのみ。これは脅迫にあらず、死にゆく私の願いなり。K》

最後のKというのは署名だろう。そのイニシャルの彼が書いた文面は、ふざけているとも思えないが、それにしては核心部分も書かれていない。

「なんだろうね、こりゃ」

阿九斗が小首をかしげると、けーなが「あ」と声をあげた。

「この地図、学校のだよ！」

「え、そうなの？」

阿九斗は地図を確認した。この学園に慣れていない阿九斗にはすぐにはわからなかったが、言われてみると学園の敷地に印がしてあるようだ。

「学園の敷地が広すぎるからわかりにくいけど、ほら、この建物が校舎とすると、こっちが裏の森で、屋上から見える山がこれ」

けーなが地図を指し示す。が、学園の敷地を巡ったことのない阿九斗にはやはり実感がない。するとそれまで黙っていたころねが説明してくれた。

「この地図の縮尺は適当ですが、敷地の端から端で約四十キロメートルありますね。飛翔魔法なら熟練者で二時間。歩けば半日というところです」

「なるほどね。羊皮紙の古さは？」

阿九斗が聞く。

「羊皮紙の製造年という意味なら古いです。五十年近くは。書かれた年代という意味なら、魔術で変質させられているのでわかりません」

　ころねが瞬時（しゅんじ）に分析（ぶんせき）した。

「少なくとも五十年以内ではあるんだ。逆に言えばその程度しかわからないわけか」

「昨日書かれていても、五十年前に書かれていてもわかりません」

「ふうん。じゃあ、それなりには面白（おもしろ）かったけど、僕にとってはどうでもいいな。長いこと使われていなかった場所ってことだから、ずっと前から貼られていたのかもしれないし、いたずらなら僕を狙（ねら）って今日仕掛（しか）けたのかもしれないという二種類考えられるしね」

　阿九斗はクールに言い、地図を元の位置に貼ろうとした。が、それを横からけーながかすめ取る。

「宝の地図だよ、あーちゃん！」

　けーなの目は夢見るようだ。

「知ってるよ」

　阿九斗はぶっきらぼうに言った。

「宝には夢があるの。ねぇ、想像してみて。きっと古代の海賊（かいぞく）が生涯（しょうがい）をかけて集めた秘宝を隠したのよ」

　けーなは手を胸の前で組んであらぬ空間を見つめている。

「ここは四千年以上も前から陸地だよ」

　阿九斗の突っ込みもけーなは聞いていていない。

「ああ、あたしが男の子だったらなぁ！　どんな危険があっても向かっていくのに！　それぞれの鍵を守護するモンスターと戦って、次々と倒すの！　ううん、殺さないわ。殺すと宝を手に入れる資格を失ってしまうの！　それで強いだけの冒険者達はこれまで失敗してきたんだわ！」

けーなが妄想をはじめると止まらないのを阿九斗は忘れていた。付き合っているときりがない。そもそも出会ったときは彼女の妄想を信じてひどい目に遭ったのだった。

「そうだといいね」

適当に言って、阿九斗はまた修行に戻ろうとした。が、そこに返ってきたのは意外な反応だった。

「あーちゃん……」

けーなが急にしおらしくなって、もじもじとしはじめた。さすがに不思議に思った阿九斗は問い返す。

「どうした？」

すると、身体を震わせたけーなが耐えきれないように声を上げる。

「おしっこ！」

「おいおいおい……」

阿九斗はさすがに困る。思わず周囲を見回す。目に入ったのは、持って入るように言われた水筒と防水袋。

「まさか……そういうことか！」

水筒は水だ。十二時間も水なしだと危険だ。そして、十二時間監禁では当然ながら……。

「おい、これで……」
　阿九斗は防水袋を差し出した。
「ええーー！　嫌だよ！　恥ずかしいよ！」
　けーなが抵抗した。
「漏らすよりはいい！　あっち向いてるから！」
「いやーー！」
「恥ずかしいのは僕も同じだ！　どうせ僕だって我慢できなくなる可能性はある！」
「それもやだぁ！　あーちゃんのも見たくない！」
　阿九斗とけーながぎゃんぎゃんやっていると、いきなりころねがぽつりと口を開いた。
「排泄物の処理に困っているのなら、自分が飲みましょうか？」
　さすがにその言葉に阿九斗もけーなも凍り付いた。
「え？」



「ちょ、ちょっと……」
　が、ころねは平然としている。
「大丈夫（だいじょうぶ）です。内部で化学変化を起こしてエネルギーに変換（へんかん）します。微々（びび）たるものですが」
「そういう問題じゃない！」
「うわぁあああん！　嫌だよぅ！　出してよぅ！」
　けーなは泣き出した。
　ころねはそれを見て、無表情のままで肩（かた）をすくめた。
「冗談（じょうだん）です。第一おいしくないですし」
「どっちにしろ解決になってない！　それにどうして味を知って……」
　それから何があったかは阿九斗も覚えていない。魔術（まじゅつ）でなんとかした、と後で納得しておいた。

○

　翌日、阿九斗は目覚め、天井（てんじょう）近くにある蓋（ふた）付きの棚（たな）で横になっているころねから、昨日預けていた地図を受け取った。放置しておくとけーなが持っていきかねないので、ともかくころねに預けておいたのだ。もちろんどうこうするつもりはない。面倒（めんどう）なので今日、生徒会長に相談してみるつもりだった。

登校しての始業前、阿九斗は生徒会室に行ってみる。生徒会長は始業前にいつも役員を集めて会合を持っているのだ。生徒会長は訪ねてきた阿九斗を気軽に迎え入れた。阿九斗は一応は風紀委員長であり、生徒会とは密接に連携をとらなければならない立場にはいるのだ。

「どうした、紗伊くん」

気さくに生徒会長は言った。いつも小粋な帽子をかぶっており、それがトレードマークだ。背が小さくて、顔も幼い。まるで少年のように見えるが、彼女は立派な三年生なのだった。妙なことにその顔立ちにもかかわらず妙な威圧感がある。やたらと魔術による喧嘩の強さにこだわるこの学園にあって生徒会長をしているのだから、彼女が強いの強くないのといった評判は聞かないが、おそらくはかなりの使い手には違いない。

阿九斗は地図を見せた。経緯をざっと説明すると、生徒会長は目を少し見開いた。が、面白くなさそうに阿九斗と地図を見比べる。

「子供っぽい奴の冗談じゃないかね？」

「そう思います。ですが広まると間抜けが出かけて行きかねない」

阿九斗の言葉に生徒会長は笑った。

「違いないなぁ。それじゃ、これは預かる。他言無用に願うよ」

生徒会長はそう言ってから、生徒会役員の三人に目配せした。三人が生徒会長のデスクに集まってくる。

「それじゃ悪いね。朝は忙しい」
生徒会長が手を振った。阿九斗は頭を下げて生徒会室を辞去した。去り際、三役の騒ぐ声が聞こえてきた。
「会長、これは学園の地図じゃないかぎゃ？」
「ぐが」
「前の大戦時に放棄された場所に印がありんすねぇ」
口調からするに三人は妙に個性的な連中らしい、と阿九斗は思ったが、すぐに声は聞こえなくなった。どうも声が外に聞こえないように魔術的な処置をしたらしかったが、阿九斗がそれを気にとめることはなかった。

○

授業に絢子は来ていなかった。毎度のことだがけーなもさぼっている。
――けーなはともかく、服部さんはどうしよう。
最初の授業が終わった後、気に病んだ阿九斗は頭を抱えていたのだが、すぐに廊下がざわつきはじめたことに気づいた。自分ががらんでいないことでざわめきが起こるのはとても珍しい。ついつられて外に出る。教室の壁の前に人だかりがある。

――なんだろう？　って、まさか……！
阿九斗が壁に近寄ると、その場に固まっていた生徒達が、ざっ、と凄まじい勢いで左右に分かれて道をあけた。そんな風に怖がられていることに落ち込む暇はなかった。壁にはあの地図のコピーが貼られていたからだ。
――けーな！
それ以外は考えられなかった。阿九斗が呆然としていると、そこに素早くヒロシが近寄ってきた。
「兄貴！　この宝の地図って何です？　けーなちゃんがそこら中に貼りまくってるんですよ。これ、まさか兄貴の悪戯じゃないですよね？」
ヒロシが言う。けーなの仕業という裏付けはとれた。透明になれるけーなのことだ。どこかのタイミングで地図を盗んでコピーして元に戻すくらいのことはする。
「悪戯なものか」
阿九斗はわざと大声をあげた。周囲の者に聞こえるようにだ。すると、ヒロシは何を思ったのかやはり大声をあげる。
「悪戯じゃない！　じゃあ、これは兄貴の仕掛けたゲームなんですね！　そうか、兄貴が宝を隠し、各地にモンスターを配置したんですね！　そしてそれをクリアした者を配下にするつもりなんだ！」
ヒロシの言葉に周囲の生徒達はざわめく。阿九斗は慌てた。妙な噂を流されても困る。
「そんなことはしていない」

阿九斗は否定の声をあげた。するとさらにヒロシは声を大きくする。
「じゃあ、兄貴の見つけた本物の地図ってことじゃないっすか！」
「そうじゃない。本物かどうかなんて知らないさ」
そう言って否定したが、自分でも何かわかっていない以上はうまく言えない。
「まいったな……」
阿九斗は小さくつぶやいたが、広まってしまったものは仕方ない。それから授業がはじまってもクラスメイトたちが妙に騒いでいることで嫌な予感はするが、どうすることもできなかった。
——まぁ、悪戯ならいいんだがな。
しかし、それからさらに事態は妙な方に転がっていく。
昼休みが終わる頃、ヒロシと昼食をとって教室に戻る阿九斗の前を人を乗せたタンカが飛んでいったのだ。保健室が怪我人移送用に使っている飛翔器具だった。怪我人が多めのこの学園においては自分で移動できない重傷者にのみ使われる。タンカに横たわっているのは男子生徒だ。意識はあるらしいが、ひどく青い顔で「化け物にやられた……」とつぶやいている。
「これはまさか」
阿九斗が言うと、ヒロシが答える。
「宝探しに行ったんじゃないっすかね？」

そしてヒロシは駆け出し、タンカを追いかけていった野次馬の中から怪我をしていた男子生徒の知り合いを見つけ出すと、話を聞き出して帰ってきた。このあたりヒロシの対応は早い。

「やっぱり飛翔魔法の得意な生徒が宝探しに飛んでいってあんな姿で帰ってきたらしいっす！　こりゃホンモノっすよぉ……！」

ヒロシは興奮していた。

――いや、これはまともじゃないぞ。

阿九斗は言葉に出さずに腕を組んで考え込んだ。どうも深刻な表情になっていたらしく、周囲の生徒は怯えて逃げ出し、ヒロシは何か阿九斗が決意したものと喜んでいたが、当人はそんなことに気づいてもいなかった。

○

阿九斗と同じようにこの宝の地図にひっかかるものを感じていた者がもう一人いた。

江藤不二子である。

表の顔は学園一の美女にして成績トップの女子寮長、男女問わずあこがれの君である彼女だが、裏の顔は支配欲の強い黒魔術師である。先日も阿九斗を自分のモノにすべく奸計をめぐらせていたが、逆に妙な形で返り討ちにあっている。

その不二子は人目を避（さ）けて地下に潜（もぐ）っていた。学園で以前の大戦の際に使用されていた地下迷宮の一部屋を自分の黒魔術研究用に改造しているのである。いつもであれば一人になるときに使っているのだが、今日の目的は違（ちが）っていた。部屋では常にガラス瓶詰（びんづ）めの生首が不二子を待っている。『禁呪』である死霊（しりょう）術を使って不二子がよみがえらせた兄である。いつもなら他愛（たわい）ない話し相手でしかない兄だが、その兄こそが目的なのだった。

ベルベット張りで陰気（いんき）な印象のその部屋で、不二子は宝の地図のコピーをガラス瓶（びん）の中の生首となった兄に見せる。

「これ、お兄様が書いたものでしょう？」

「いや。見たことがないよ」

兄は即座（そくざ）に答えた。

「そんなはずがありませんわ」

不二子は思わず否定したが、すぐに口をつぐんだ。理性ではわかっていたのだ。死霊術は本当の意味で死者を復活させるものではない。保存されている過去の記録を再生し、そこから推測される応答をさせる仕組みに過ぎないのだ。すなわち死霊は嘘（うそ）をつくことはできない。

「確かにお兄様の書いた文字なのに……」

身近な者の書いた文字は間違（まちが）えようがない。だが、死霊が嘘をつくことができないという法則も絶対のものだった。

この国においては、ほぼ全員が何らかの宗教的洗礼をされる。洗礼とは神から管理されることを意味する。そこでは「神が見ている」というのは比喩ではない。マナを通じて神は人間の行動のすべてを保存しているのだ。

「そうなると、お兄様、この地図の場所についての記憶もございませんの？」

不二子は質問を変えた。

兄はやはり記憶はないと言った。

――お兄様が学園卒業者だったのは間違いないはず。そうなると、そこについての記憶が完全にないというのはありえませんわ……。

誰かが記録を消したということがあり得るのだろうか？　神は誰にでも平等である。そのため神の恩恵を受ける（つまり魔術を使う）こと自体は誰にでも開かれている。だが、あり得ないのは神そのものに手を加えることだ。神に手を加えることを神そのものが拒否する仕組みにはなっているはずなのだ。

「ねぇ、お兄様。頭が痛くなってきたので失礼いたしますわ」

不二子は不穏なものを感じたので、再び秘密の地下通路を通って地上へ戻る。頭痛がしてきたのも事実だった。心の奥底から蘇ってきたあの矛盾が彼女をさいなんでいるのだ。

表に出れば不二子の表情は、完璧なお嬢様のそれへと変わる。昼休みのおしゃべりを楽しんでいる生徒達が、彼女にあこがれの目を向けている。不二子が頭をさげて挨拶をすると、皆は歓声のような挨拶を返してくる。

　習慣のようになったその挨拶だったが、その女子生徒を見つけたとき、不二子の動きが止まった。女子寮長であるから、すべての女子生徒の顔は記憶している。名前をすぐには思い出せずとも、顔だけは把握（はあく）している不二子である。が、その彼女の顔にだけは見覚えがないのだった。

　その女子生徒は長い髪（かみ）をポニーテールにしていた。制服は微妙（びみょう）に着崩（きくず）されていて、ややだらしない印象。目鼻立ちのはっきりした少女で、美少女と呼べなくもないが、どこかバランスの悪い雰囲気（ふんいき）を感じるのは、目つきや表情が直接に感情を表しすぎているからだとは、不二子も反射的に彼女に挨拶をしてから気づいたことだった。

「ごきげんよう」

　そう頭を下げた不二子に、その少女は目を見開いて、心底から興味深そうな顔になった。

「ごきげんよう？　おもしろいね、あんた！」

「あら？　そうでしょうか？」

　にこやかに答えながらも不二子は内心で不穏なものを感じていた。不躾（ぶしつけ）という以上に人を不安にさせる何かが彼女には存在するらしい。

　その少女は大声でカラカラと笑う。

「そうだよ！　だってあんた、そんなタマじゃないじゃないさ！　見ればわかるよ、底意地の悪さ。あたいにはわかるね、あんたみたいの、救われないよ」

「し、失礼でしてよ、あなた」

不二子はかろうじて体面を保ったが、それでもその少女に気圧(けお)されていた。
「あははははっ！　嘘ってのはバレたときに狼狽(ろうばい)しない嘘じゃなきゃ駄目(だめ)なんだよ！　そうでないと楽しめないよ、江藤不二子！」
少女はあくまで天真爛漫(てんしんらんまん)に言い、両手をひろげて楽しそうにその場で回った。
「あなた、ここの生徒じゃありませんわね！」
不二子はもはや確信を持って言い、右手からマナ球を放とうと素早く身構えたが、それよりも早く彼女は後ろに跳(と)んでいた。
「あたいは生徒じゃないけど、学園に入る許可はもらってるよ！　ねぇ、江藤不二子、そんな風にホントのことを避(さ)けてると敵を作るよ？　例えばあたいとかさっ！」
そんな風に言われると、さすがに不二子も外面を取り繕(つくろ)うのに苦労した。攻撃(こうげき)を踏(ふ)みとどまり、あくまで微笑(ほほえ)んだままでその少女を見送る。彼女はかなりの速度で走り去ってしまったのだ。
「お姉様、いったい、何ですの、あの娘(こ)」
騒(さわ)ぎを聞きつけた生徒達が心配して周囲に集まってくる。不二子はあくまでお嬢様を装って頬(ほお)に手をあて、被害者(ひがいしゃ)らしい言葉を選んだ。
「わかりませんわ。どういうことなんでしょう？　きっとおかしな人が入り込んだんでしょう。先生方に報告いたしますわ」
それからは表情を作るのに、不二子はかなりの労力を必要とした。

○

同じ頃、阿九斗に服を吹き飛ばされて逃げ出した絢子はといえば、一人で寮の自室にこもって悶々としていた。もちろん皆の前で服を剥がされて恥ずかしかったこともあるが、すでに一晩が経過しているし、前の晩の食事の際に友達にもなぐさめてもらっており、そのことについては落ち着いている。ただ、一人になると自分ではわけのわからない感情に支配されて、どうにもならなくなっているのだ。

「あの馬鹿！　あの馬鹿！　あの馬鹿！」

一日、布団に寝て過ごしていたのだが、その布団の上にかけた阿九斗の上着を見るたびに、じたばたと暴れたくて仕方なくなってくる。ならば近くに置いておかなければいいのだが、そこにしか置く場所がない、と絢子は自己を正当化していた。

——それに返すときのことを考えなくてはならないしな。一応は感謝をしなければならないのだが、その言葉が間抜けなものになってしまっては、これからも舐められそうだ。そもそもどうやって返せばいいんだろうか？　洗って返すべきなのか？　だが上着が汚れていなければ問題ないだろうしな……。

絢子は上着を持ち上げてみて、裏地の汚れを探した。自分の素肌が触れたのだから、何か汚れがあったなら相当に恥ずかしい。

——いや、問題は臭いなんじゃないだろうか？

ふと気になって、絢子は上着の裏地に顔を押しつけてみた。

――これはあいつの……。

そう気づいた絢子は、爆発したみたいに顔を赤くして上着から顔を離す。しばらく呼吸を整えると布団から立ち上がった。そして、部屋をものすごい勢いで隅々までうろつきまわり、そこかしこを叩いて回った。

「曽我！　曽我けーな！　いないな！　覗いていないな？」

以前、透明になったけーなが部屋を覗いていたことを思い出していたのだ。絢子は、そのまま十分ほども念入りに人の気配を確かめた後、ようやく落ち着くと、完璧に戸締まりをしてから布団の上に正座した。

それから震える手で阿九斗の上着を持ち上げ、目を閉じ、腕を何かを抱きしめるように自らの身体にからめ、裏地にゆっくりと顔を押しつけた。

――あ……この感じ……。

と、そこにいきなり生徒手帳のベルが鳴った。

「ひゃああああ！」

悲鳴をあげてきっちり一メートルは垂直に飛び上がる。慌てて周囲に人目がないか確かめたが、どうやらそんなことはない。生徒手帳を見ると、通信機能に実家からメール連絡が入っていたのだった。絢子は「ふう」と息を吐き出し、落ち着いて文面を見る。

一瞬にして冷静になった。一見するとなんということはない文面だが、服部の一族だけに伝わる暗号文で、こう書かれていたのだ。

《照屋家の者が活動を開始した。所定の場所で会合を持ちたい》

――あいつが？

絢子の目が厳しくなった。それは長年の因縁のある家の名だった。

2　あの子はだあれ？

嫌(いや)な予感が阿九斗(あくと)にはしていた。いや、予感というよりは単なる推測だ。そして当然のようにその嫌な推測は的中した。夜になって寮で休んでいると、次々に怪我人(けがにん)が食堂に運ばれてきたのだ。どうやら夜だったため保健室には当直の者しかおらず人手が足りなくなったらしい。

阿九斗は、ヒロシところねと食後のお茶をすすっていたのだが、食堂のテーブルが次々と端(はし)にずらされていき、そこの上にごろごろと魚市場のマグロよろしく男子生徒たちが並べられていく。ここが魚市場だとしたらかなりの大漁だろう。生徒の数は増えるばかりだ。医者志望のコ＝ロ信者の生徒が忙(いそが)しく応急処置に当たっている。

「こりゃ、やっぱり宝探しの結果だろうね」

阿九斗が言うと、ヒロシもうなずいた。

「そうですね、兄貴」

「宝探しなんて子供っぽいことでわざわざ怪我(けが)をしなくても……」

阿九斗がそう言ったとたん、食堂の空気が一気に悪くなった。悪口だと思われたらしい。怒(いか)りと憎(にく)しみの混じった目が阿九斗に注がれている。何しろ、ここの生徒達は無理無茶無謀(むぼう)を尊び、馬鹿騒(ばかさわ)ぎを美徳としているのだ。

――しまった。

意外なことにそういう空気を阿九斗は敏感に感じることができる。立ち上がって、一人の一年生が怪我をした二年生を治療中のところに歩み寄ると、精一杯の笑顔で笑いかけた。

「僕も実はコ=ロ信者なんだ。治療魔法のやり方さえ教えてくれれば、いや、教えてくれなくても何か手伝うよ」

阿九斗が言うと、二人は、かかると確実に死ぬという藪医者がやってきたところでそこまで怯えまいというほど顔面を真っ青にして、ただ小刻みに首を左右に振り続けた。

「そこまで怖がらなくても、何もしませんよ」

阿九斗がかがみ込むと、「ぎゃあああ！」と治療担当の一年生は飛び退き、重傷と思われた二年生は「治った！　治った！　俺は治ったぞ！」と叫んでテーブルの上から降り、ぴょんぴょんと片足で飛び跳ねてみせた。

「い、いや、申し訳なかったです。とりあえず僕はなにもしませんので」

阿九斗は引き下がり、座っていた席に戻ると、ころねに指示をした。

「治療を手伝ってあげてくれないか？」

「いいですよ。監視対象の意に沿うように行動するように指示されていますので」

ころねはひょこひょこと怪我人の方に歩いていく。こちらは大人気だった。怪我人の誰もが、吊したポシェットから治療道具を出したころねを自分の方に引き寄せようとして激しく手を振りまくっている。

阿九斗は、ころねが次々と生徒を治療していくのを見て、これで自分も少しは怪我人と話しやすくなったろう、と判断する。それで手近な怪我人に近づき、あくまで穏(おだ)やかに抱いていた疑問をぶつけてみる。

「やはり何ものかにやられたんですか？」

話しかけられた方はぎょっとしたようだが、黙(だま)っていることでもない、と拗(す)ねたような顔で答える。一年生の腕(うで)自慢(じまん)であろう大柄(おおがら)な生徒だ。

「ああ。なんだかわけがわからないうちにやられた。あれは相当に強いぜ」

「本当に？」

阿九斗が問い返すと、話しかけられた一年生だけでなく、他の全員が一斉(いっせい)に阿九斗の方を見た。一時は消え去ったはずの微妙(びみょう)な空気が再び食堂を支配する。

――そうか、どうも〝負けた奴(やつ)が弱いだけ〟と言っているようにとられたのか。なんだかわけがわからないうちになんて言うから、本当にそんなものがいたのか、って意味で聞いてみただけなんだけどな。

そう気づいた阿九斗は咳払(せきばら)いをして言葉を選ぶ。

「失礼。そのモンスター自体が本当にいたのか疑ってしまったんです。だって、これだけの人数が怪我をしてしまうなんて。一斉にかかればどんなに強い相手だって少しくらいはなんとかなるでしょう？」

「一斉にかかったわけじゃねぇ。ばらばらだよ」

うっとうしい、とでもいうように一年生は、ぶっきらぼうな口調になった。

「じゃあ、これだけの人数が散発的にかかっていったんですか？」

「かかっていったわけじゃねぇ」
「じゃあ、襲われたんですね。いや、でもこれだけの人数だ。固まっていればよかったんじゃないですか？」
　阿九斗が本当に疑問に思ったのでそう聞くと、一年生は苛立ちながらも答える。
「共同で宝探しに行ったわけじゃねぇんだよ。全員が勝手に向かったんだ。チームだってせいぜいが二人組くらいだ」
「ああ、そうか！」
　阿九斗は、ある事実に気づいて声を大きくする。
「宝探しですもんね！　みんな他人を出し抜こうとしていたわけだ！　失礼、気づかなかった！　そんな利己主義が原因でなければ、ここまでの大人数が怪我をするわけありませんもんね！」
　食堂が凍り付いたように静かになった。
　――な、しまった。また嫌味だと思われるようなことを言ってしまった……。
　阿九斗は取り繕おうと、周囲に聞こえるように声を大きくする。
「いや、協力すれば良い結果があると言いたかっただけです。この学園の生徒は猛者揃いでしょう？　適切な指揮官がいればかなりの力を発揮できるはず」
　そう言うと、一年生は苛立ち過ぎてもはやどうでもよくなったのか、かなり皮肉めいた口調で阿九斗に言い放つ。
「うるせぇや。誰もまとめ役がいねぇんだよ」

「いえ、ランキングがあったでしょうに。それで一番強い人が指揮をとれば……」
　そう言って、阿九斗ははたと気づいた。口に出すまでまるで気づいていなかったのだ。
　――しまった、ランキング上位を倒したのは僕ってことになってる……！
　阿九斗は言葉に詰まった。
　さすがに周囲がざわめきはじめる。
「つまり自分が指揮をとればうまくいくってか？」
「魔王様の軍門に降れってさ」
「おい、それじゃあ、まさかこの騒動自体、魔王様が仕組んだんじゃないのか？　こういう流れにするために……」
「そういえば、地図を見つけたのはあいつだし、配ってるのは、あいつの女じゃないか」
　妙な流れになってきた。白い目とも恐怖ともつかない視線が阿九斗に注がれる。
　阿九斗は首を振って立ち上がった。
「そうじゃない！　そんなことをしても僕にメリットはない！　そもそも僕は皆さんの欠点を指摘したまで！　だが非難する気はありません。これから協力し合えばいいというだけです！　例えば、どのような相手に襲われたのか、全員の情報を今、総合すれば、対策も立てられるはずです」
　こういうときに格好をつけてしまうのが阿九斗の欠点だが、ともかく正論ではあったので、ぼやいていた怪我人たちも、少しずつ近くの者と情報を交換しはじめた。

「霧になって攻撃が効かないんだ」
「それは俺もやられたな。あとは暗くてわからなかったが、大量の虫みたいなのが飛んでいた。どうにも狙いがつけられなくて……」
「そうだった。その虫みたいなのが攻撃で、それを操ってる本体が霧。ありゃあ、どうしょうもないよ」

　そんな声が聞こえてくる。やがてどのようにその相手を倒すかが議論になりはじめた。が、その議論が白熱しはじめたのはいいが、やがて誰がどの役割を演じるかで喧嘩のような雰囲気になりはじめる。

「だから、おとりが虫をひきつければいいだろ？」
「誰がおとりをやるんだよ！」
「逃げ足の速い奴だろ」
「馬鹿、昔からおとりってのは装甲が厚い奴に決まってる」
「なんだよ、俺の意見が間違ってるってのか？　馬鹿とはなんだ馬鹿とは」
「そうじゃねぇよ。だから、誰が指揮をとるかで変わるだろ、そんな考え」
「そうだよ、誰が指揮するんだよ？　それ決めるトーナメントでもやるってのか？」
「んなことしたら、結果的にそいつが宝をどうこうするための喧嘩にしかならねぇ」
「なんだよ、どっちにしろ喧嘩ならやりゃあいいじゃねぇか。誰が強いかやりゃあわかる」

　場が殺気立ちはじめた。阿九斗としても自分で作り出した状況だ。なんとかしなくてはならないと声をあげる。

「いや、皆さん！　そんなことで争う必要はないでしょう？　あるかどうかすらわからない宝です。それにどうやら長い間放置されていたものだ。となると、それを無かったことにした方がいいじゃないですか。それでも以前と何も変わらないわけですから」

　しかし、その言葉は無駄に火に油を注いだ。

「てめぇが見つけた地図じゃねぇか！」

「それに、俺たちはこの怪我の復讐のために化け物と戦うんだ！　宝のためじゃない！」

　怪我人たちが騒ぎはじめた。そんな風に復讐に目的がすり替えられていることが阿九斗にはカチンときた。自分の弱さを誤魔化しているにすぎないように思えたのだ。

「だったら個人で勝手に行って、勝手に負けてくればいい！　自分が弱いということと向かい合いたくない馬鹿者とは話はできない！　何故、互いに協力できないんだ！」

　阿九斗は苛立ちまぎれに叫んでいた。その声のあまりの大きさに、その場の全員が動きを止めた。

　――またやってしまった……。

　内心そうは思うが、こうなってしまったら今更止めるわけにはいかない。この状況を利用して宝探しを止めさせるのが誰の得にもなることだろう。

「無能が粋がって冒険になど行くな！　行きたいなら、せめて自分の力を示してからにするんだな！　その度胸もなくこそこそと自己の利益のためだけに立ち回るな！　僕の言いたいのはそれだけだ！」

阿九斗は、ダン、と机を叩いて演説を打ち切った。恥ずかしさと後悔から内心で冷や汗を流すが、挑発をした以上は、ここで気弱になっては寝首をかかれかねない。背筋を伸ばし、周囲を睥睨し、堂々とした態度で食堂を歩み去る。

　後をついてきたヒロシが感動のために泣いていた。

「さすがあっしの兄貴だ！　かっこいいっす！」

「いや……そうじゃなくて成り行きでね」

「謙虚だ！　そうか！　力で学園を支配するのでなく、自然と学園が兄貴を尊敬するように促しているんですね！　それに加えて彼らが自立した勇気ある判断ができるように教育している！　その深謀遠慮！　あっしも勉強しました！」

「ああ……そりゃ、よかったね……」

　阿九斗が反論する気力もなくしてつぶやくと、ヒロシは力強くうなずいた。

「はい！　兄貴についていって良かった！　もちろん、今回の演説も『スピーカー』で寮内に放送させていただきましたので！」

「……男子寮も、女子寮も？」

「もちろん！」

　ヒロシは満足げに言った。

　――また事態が大きくなりそうだなぁ……。

阿九斗は頭痛を感じたが、結局、悩（なや）んでもどうにもならないので考えるのをやめた。

○

翌日、早朝に阿九斗は呼び出しを受けた。生徒会長からのものだ。朝が早い阿九斗は連絡（れんらく）があったときにはすでに起きていたが、連絡をした当の生徒会長の方はとても眠（ねむ）そうだった。生徒会室に出頭した今も、会長はデスクに肘（ひじ）をついて、うつらうつらしながら阿九斗に言う。

「朝早く悪いね。あの、昨日の演説、聞いたよ。あの痛快なやつさ」

生徒会長は不機嫌（ふきげん）なんだか眠いんだかわからない調子で言うので、阿九斗としては反応に困る。女性なのに、妙（みょう）に威圧（いあつ）感のあるわがまま坊主（ぼうず）という外見の生徒会長であるから、そもそもが表情も読みにくい。

「お恥ずかしい」

阿九斗は頭を下げた。

「いや、いいんじゃない？　ボクも怪我人（けがにん）には心を痛めていたからさ。だから、呼び出したのも他でもなくてさ、今日の朝礼、風紀委員長として、正式に宝探しの禁止令を出して欲しいんだよね」

と、あくびをしながら生徒会長。

「正式に、ですか？」

「うん。風紀委員長としての権限って結構強くて、違反した生徒への処罰もできるんだよね。恐怖政治みたいでやだけどさ。そもそも、昨日のキミの演説だと、強い奴なら行ってもいい、みたいな感じじゃん？　それってやばいってわかるでしょ？」

「それはそうですね。勝手をして失礼しました」

「んー、いいよ、別に。そもそも詫びるんなら、地図のこと他言無用って言ったのに破ったのを詫びてよ」

「それはすいませんでした。僕の管理が悪くて」

「ん、詫びてくれればいいや。実は、こっちから流出したかもしんないからね」

　生徒会長はへらへらと笑った。


会長

言われてみれば、地図はころねに預けたのだ。彼女が油断することはない。そうすると生徒会室からけーなが盗み出したわけだ。だが、それをわざわざ指摘することもない。

「今回の禁止令を出すことで責任をとります」

阿九斗は約束し、ふと生徒会室を見回した。

「三役の皆さんがいらっしゃらないですが」

「ああ。ちょっと野暮用でね。朝礼には帰ってくるってさ」

生徒会長はそう言って、臨時朝礼の放送を行うからと阿九斗を生徒会室から追い出した。

○

それから一時間後、全校生徒が校庭に並んだ。中等部から高等部までのすべての生徒が並ぶと、やはり壮観だ。阿九斗は生徒会長と並んで、彼らの前に立つ。校庭に置かれた演壇の中央に人工生物『スピーカー』が浮遊しており、そこに立つ者の言葉を全校生徒に伝えようと待ちかまえている。

――いないな……。

阿九斗は自分のクラスである1Aの生徒が並んでいる場所に絢子とけーながいないのを確認していた。どちらも阿九斗に顔をあわせにくいのはわかるが、やはりいないとひどく気になる。

が、そんなことを考えていると、すぐに先に演壇にあがっていた生徒会長の挨拶が終わってしまう。阿九斗がそれほどぼんやりしていたわけではない。生徒会長は「おはようございます。じゃ、これから風紀委員長から話があります」だけで話を切り上げていたのだ。

慌てて阿九斗は壇上に。普通、そんな形で全校生徒の前に出れば緊張するものだが、阿九斗はそんな性格をしていない。すぐに頭の中で言葉にまとめ、挨拶をしてから話しはじめようとする。しかし、次の瞬間に起こった事態は、さすがに阿九斗の言葉を止めさせた。

「紗伊阿九斗ぉ！　力があることを証明すればいいんだろう？　させてもらうよっ！」

そう声が聞こえたかと思うと、居並ぶ生徒達の中から一人の女の子が跳び上がった。長いポニーテールの持ち主だ。数メートルも上空で彼女は髪を翻して一回転すると、右足を前に突き出し、その格好のまま阿九斗に向かって一直線に滑空しはじめる。

「行っけーっ！　爆裂空中三角蹴り！」

彼女が叫ぶと、右足の先にマナが集中した。発光した右足の先は阿九斗の顔面を指し示している。

――危なっ。

阿九斗は演壇の上を右に一歩ずれる。それで十分にかわせるだけの時間的余裕があった。が、阿九斗はすぐに読みが甘かったことに気づく。空中で不自然な軌道を描いて滑空してくるということは、彼女はその見かけと違い、落下しているのではなく、高速で飛翔しているのだ。尋常でない速度だが、確実にその飛行を意志で制御している。その証拠に、彼女の足先は再び阿九斗の顔面に向いていた。

——手で受け流すか？　いや、それだとまたマナを暴走させてしまう……！

阿九斗は窮(きゅう)した。この状況(じょうきょう)でまたマナを制御できずに爆発(ばくはつ)させてしまうわけにはいかない。だが、マナを使わず、受け流すことなどできるはずもなかった。

——それなら、直前でかわす！

阿九斗は瞬時に決意した。このまま左右に動いたところで彼女の足先は追尾(ついび)してくるだろう。となれば、命中する寸前に顔をずらすしかない。

「それっ！　どかんと命中！」

少女は直撃(ちょくげき)を確信して叫んだ。

しかし、阿九斗の反射速度は彼女の想定を超(こ)えていた。命中の直前に首をそらし、顔を背(そむ)けるようにして、すんでのところで光る足先をかわしている。

「外れたっ!?」

少女は叫ぶ。

——かわせた！

阿九斗も内心で歓声(かんせい)を上げた。

だが、次の瞬間のことだった。

ぷにん。

間抜(まぬ)けな音と柔(やわ)らかな感触(かんしょく)が阿九斗の頭に直接響(ひび)く。すぐに視界が真っ暗になった。一瞬、何が起こったのか、と戸惑(とまど)う。両頬(りょうほお)がやわらかいもので強く挟(はさ)まれている。頭に何かやわらかい布が被(かぶ)せられているような感触がある。

「きゃああ！　ちょっと！　やだぁ！」

そんな悲鳴が頭上から響いてきて、阿九斗はようやく状況をさとった。

顔面に少女がまたがっているのだ。自分は立ったままであるから、ちょうど肩車(かたぐるま)が前後逆になった格好だ。

「うわっ！　ちょっと！」

阿九斗は少女を振(ふ)り落とすわけにもいかず、その場でたたらを踏(ふ)むしかなかった。

傍(はた)から見たら間抜けな光景である。いや、傍から見たらなどと言うまでもない。要するに、阿九斗は、全校生徒が見ている前で、女の子のスカートの中に頭を突っ込んで股間(こかん)に顔を押(お)しつけ、棒立ちになっているのである。

「なにをするんだよ、紗伊阿九斗！」

少女はマナを操るに十分(じゅうぶん)な集中ができないのか、再び飛翔することはなかった。落ちないように巧(たく)みにバランスをとりながら、阿九斗に文句を言う。

「僕を蹴ろうとしたのはそっちだろうに……！」

「ひゃあ！　しゃべるな！　もぞもぞする！」

「あ、ごめ……」
「だから、しゃべるな！　動くな！」
「動かないから降りてくれ！」
「ひゃ……！　だ、だって、なんかハマっちゃって動けないんだよ！　後ろに倒(たお)れちゃいそうだし！」
「じゃあ、そっちが動かないでくれよ。降ろすから」
阿九斗は手探りで少女の腰(こし)に手を回し、一度上に持ち上げると、自分の肩(かた)から彼女の足をずらして外し、その身体を抱(だ)きかかえるようにして前に降ろそうとした。少女は阿九斗の身体にその両足をからめる格好で、段々とずり落ちてくる。
しかし、少女の身体が降りてきて、彼女の顔と阿九斗の顔が正面から向き合ったとき、彼女は阿九斗の胴(どう)に巻き付かせた脚(あし)を強く締(し)めて降下を止めた。
「早く降りてくれよ」
阿九斗は不思議に思って言った。
目の前にある少女の顔は目鼻立ちがはっきりしており、美少女と呼べなくもないが、感情が表情に出過ぎているのか、どこかバランスの悪い雰囲気(ふんいき)を感じる。彼女は先日、不二子(ふじこ)を挑発(ちょうはつ)した、あの少女だった。
「どうしたんだい？」
阿九斗は戸惑い、再度聞く。

少女の顔は十センチほどしか離れていない。吐息がくすぐったく感じられる。

「あんた、近くで見るといい男だね」

彼女はそう言って、阿九斗の首に腕を回してきた。脚は阿九斗の腰あたりにからめたままだから、ちょうど阿九斗の正面にぶら下がる格好だ。

「そりゃどうも。降りてくれないかな」

阿九斗は平静を装って言った。あまりの異常事態に感覚が麻痺しているだけかもしれないが、本当のところは自分でもわからなかった。あるいは妙に格好をつける性格が人前で取り乱すことを許さなかったのかもしれないが、ともかく阿九斗は少女を身体の前に抱きつかせたまま、背筋をしゃんとしてクールに対応した。

「面白いね、あんた！　ねぇ、どうしてあんな風にあたいの蹴りを避けたのさ？」

少女は新しいおもちゃを見つけた子供のような笑顔になった。

阿九斗は早く降りてもらおうと、顔を背けながら質問に答える。

「受け止めたらマナが暴走してそこら中に爆風をまき散らしちまう。僕は力が有り余ってるんだ。それで君が軌道をコントロールしているのがわかったから寸前で避けることにした。内側に避けたのは、反対側に避けたら君が後ろに突っ込んで自爆するといけないと思ったからだ。わかったら降りてくれ」

阿九斗は言うが、その言葉はさらに彼女を面白がらせたらしい。

「すごいね、あんた！　そんな風に瞬時に判断したんだ！　あたい、あんたみたいな男は二人目だよ！　どっちの女になろうかな？　あんたが望むなら、今ここでやってあげてもいいんだよ？」

少女は腰を阿九斗に押しつけはじめた。正面から阿九斗の腰にぶつかる位置に彼女の股間があるわけで、見ようによっては、というか誤解の余地もないほどに下品な仕草である。

「離れてくれ」

これにはさすがに少し慌てて、阿九斗は少女の腕を自分の首から外しにかかった。だが、少女は足腰の力が強いらしく、腕を外しても脚だけで阿九斗にしがみつき、隙を見つけては首に手を回してくる。

——なんだ、この子は……？

さすがに助けを求めて阿九斗は周囲を見回す。生徒会長は妙な苦笑いを浮かべて、ともかく仕事を早く終えろ、というのか腕をくるくる回しているだけだ。一方、教師達はあっけにとられている。そして生徒達は異様なざわめきの海と化していた。

「おいおい、どうなるんだ、こりゃ……」

「まさか全校生徒の前でやっちまうってんじゃ……」

「いや、もうやってるかもしれん」

「まさか、スカートが被さって見えないが、あの下、はいてないってのか？」

「いや、いくら魔王だからって……。それに妙に冷静な顔だぜ？」

「いや、悪役ってのは、表情も変えずに女とやるものじゃあないか」

「そ、そうだな……。だが実際にそれを見せられると、男として敗北感を感じずにはいられないな……」
「全校生徒の前で……とてもかなわねぇ……」
――ええい、なんだ、この事態は！
阿九斗は困惑したが、こんなときでも女の子に強く出ることができないのが彼である。冷静に咳払いをすると、精一杯の大きな声で叫ぶ。
「静粛に！」
『スピーカー』で増幅されたそれはハウリングを伴って校庭に響き、生徒達は耳をおさえた。阿九斗が再度咳払いをすると、彼の言葉に注目して全校生徒が静まりかえった。
「皆さん！　僕は昨日、宝探しに行くならば自らの力を示せと言いました。彼女はその言葉を信じて僕に挑戦しようとしたらしい。しかし、それはもはや無駄な行動だと考えて欲しい」
阿九斗はもはや少女を引きはがすのをあきらめ、前に彼女をぶら下げたままで声を張り上げた。その言葉に再び生徒がざわめく。
「そうか、ああやって返り討ちにするって言いたいのか……」
「何か魔法で女を落としちまったに違いない……」
「あの時か……股間に顔を突っ込んで……そこで何かを……」
そんな恐怖の声が生徒達の間に拡がっていく。
――誤解だ……。いや、この誤解も仕方ないだろう。この子がおかしすぎる！　わかってくれ！

阿九斗は内心で叫びたくなるが、それが事態を収拾することはあり得まい。ここは要点を述べて義務を果たし、出来る限り早く演壇を降りるしかない。

「僕は風紀委員長の権限を以て、ここに例の宝探しの禁止を改めて宣言する！　違反者には、罰則があることを覚悟して欲しい！　以上、これで僕からの……」

阿九斗が話を切り上げようとすると、さすがに生徒達が騒ぎはじめた。あからさまで一方的な禁止に反発したブーイングである。

——こんな状況でなければ、不満を抑えるような話し方もできたと思うけど、この格好じゃ説得力ないよなぁ……。

阿九斗が困っていると、すぐ近くから声があがった。少女が『スピーカー』に聞こえるように声をあげたのだ。

「あんた、前言を撤回するなんて男らしくないよ。弱いから駄目だってんなら、それこそあんたが行けばいいじゃないか」

すると、生徒達が応えて歓声をあげた。

「そうだ！　お前だけ行って怪我すりゃいいんだ！」

「俺たちのこと弱いってんなら責任とってみろ！」

「宝は独り占めするんじゃねぇぞ！」

敵意ある反応に困り、阿九斗は生徒会長に目をやる。会長は、もういいから好きにしろ、というように、手を「あっち行け」と振っている。

——どちらにしろ、目的は生徒が怪我をしなきゃいいってことだしな。

阿九斗は観念した。

「わかった。僕が行く。ただし、他の生徒は例の地図に印された場所への一キロ以内の接近を禁止する」

そう宣言してから阿九斗は演壇を降りた。少女はそこでようやく自分の足で地面に立った。阿九斗は生徒会長に「彼女は？」と質問の意味で少女を指さしたが、生徒会長は肩をすくめただけだった。

「君は？」

阿九斗が声をかけると、少女はポニーテールを揺らして振り向いた。

「照屋栄子。ちょっとからかうつもりだったのに、長いつきあいになりそうだよ。覚えておいて損はない名前だからね」

○

「ともかく明日からの土日でなんとかしてくれ。なんとかならなかったら誤魔化してもかまわないんで、上手くやって欲しい」

　生徒会長は阿九斗が宝探しに行くというのにはやはり賛成はしない、という態度なのだった。あの演説の後、阿九斗は生徒会室に呼ばれ、こうして小言を受けているというわけだった。

「すいません。ともあれ、化け物とかが何であるかわかればいいわけでしょう？　それだけ見てくるつもりで行ってきます」

　阿九斗は言った。

戻ってきた三役（会計、書記、副会長）が恨みがましく阿九斗を見ているのに気づいていたので、ともかく弁解するつもりだった。

　しかし、三人はそれでも強ばった顔を崩すことはなかった。全員が妙な迫力のある三年生女子である。会計は眉がくっきりとしていてワイルドな印象。書記が女子にしてはかなりの長身で無表情。副会長が細身の美少女だが、肌が白いを通り越して不健康に青白い。

　阿九斗はこの三人にもただ者ではない気配を感じており、不快にさせることはしたくなかったが、ともかく何を言っても三人の機嫌は直らないようだった。

「大丈夫、迷惑はかけませんよ」

　阿九斗は再度言った。すると、生徒会長が「あー」と何か言いたげに声をあげる。

「あー、あのさ。もし、失敗したら、黙っててあげるから、そのまま帰ってきていいから。まぁ、そうだ。うん、それがいい」

　生徒会長ははっきりしない口調で阿九斗にうなずいてみせた。

「失敗することを願っているようにも聞こえますが？」
　阿九斗が小首をかしげると、生徒会長はうなずいた。
「そうとってもらってもかまわない。ともかく、無かったことにしたいんだよね」
「それなら、あのときに止めてくださいよ。あの妙な子を生徒会長も放置したじゃないですか」
　ややカチンときて阿九斗は抗議する。
「いや、まぁ、そうなんだけど。いや、キミが気持ちいいところ邪魔しちゃ悪いかなって思ってね」
　生徒会長は口ごもるように言った。
「そんなわけないでしょう？　何を考えてるんですか？　そもそもあの子は誰です？　あの後にいつの間にかすぐにいなくなってしまったし」
　阿九斗がたたみかける。
　と、生徒会長の頬がぴくりと動いた。かぶっていた帽子の鍔に指をかける。その仕草にどういう意味があるのか阿九斗にはわからなかったが、背後で三役が明らかに怯えた空気を発したのがわかった。
　——え？
　不思議に思うが、すぐに生徒会長は帽子の鍔から手を離した。デスクを指でトントンとやりながら、頬を引きつらせて、こう告げる。
「あの子はウチの生徒じゃない。制服は着てたけどね。それ以上はボクには何も言えない。役職上、言えないこともあるんだよ。だけどね、まぁ忠告というか、お願いというか、ともかく聞いて欲しいんだけどさ。あ

の子の自由にさせないでくれ。あと空気を読んでくれ。掘り起こしちゃならない真実だってあるってことだよ」

　生徒会長のその言葉と態度は、明らかに阿九斗には理解不能のものだった。それでも、そういう言い方をされては、ここは従っておくしかない。

「わかりました」

　阿九斗は生徒会室を去ったが、生徒会長の言葉には不審なものを感じずにはいられなかった。

○

　――準備をしなくちゃならないけど……。

　阿九斗は旅支度のために学校の備品から借りてきたリュックを開いて寮の自室の床に置いたが、そこに何を詰めたものか考えるより前に、リュックの脇に立っている二人を見て困っていた。

　ころねとヒロシである。ついて行くといって聞かない。ころねはいい。監視員だし、いざというときには頼りになる。問題はヒロシだ。

「あっしもお供します！　兄貴の危機には命も投げ出す覚悟で……」

　ヒロシはつらつらと決意を述べるが、阿九斗はその内容を聞かず冷静に考える。

——ついてくるには決まっているだろうから、断っても無駄（むだ）だ。でも、あの照屋栄子のことを含（ふく）め、妙なことがありすぎる……。そうなると彼は役に立ってくれそうだけれど、化け物と戦うことになったら守りきれる自信はないし、下手をすると巻き込んでしまうことになりそうだ……。

阿九斗はぐだぐだと考え、そしてある決断を下した。

「リュックに旅支度を詰めてくれないかな？　僕は別の準備をしなくてはならないから」

阿九斗は言った。頼りにされたヒロシは感激したらしく、半ば泣きながらものすごい勢いで食料調達のため食堂に向かっていった。

——さて……。

少しばかり勇気のいることだったが、阿九斗は生徒手帳を出し、念話をかける。

そして、その三十分後、阿九斗は学園の地下迷宮のとある一室で人を静かに待っていた。以前に一度行ったことのある場所である。昔、作戦会議室として使用されていた部屋だ。不二子の秘密の部屋とは壁（かべ）一枚だけ隔（へだ）てた場所である。

「いい度胸ですわね。どの面（つら）下げてわたくしの前に出てこれるのか」

不二子は不機嫌（ふきげん）な顔で阿九斗の前に現れた。

「来なくても仕方ないと思っていましたが。ともかく来て頂いてありがとうございます」

阿九斗は椅子（いす）から立ち上がって頭を下げた。

あの騒動の後、生徒の皆からは記憶が消えてしまっているため、不二子の正体は阿九斗とけーなくらいしか知らない。もちろん不二子もそのことを知っているからこそ呼び出しに応じたのだ。

「まさか、わたくしを脅そうなんてなさるおつもり？」

「いや、そんなことに屈しないでしょう？　そもそも先輩の正体を暴露しようにも、僕の言葉なんてみんなは信じませんし」

　阿九斗は即答した。

「では、どういうおつもり？　わたくし、まだあなたを屈服させることをあきらめたわけじゃなくってよ」

　ややひきつった表情で不二子が強がる。が、阿九斗は素直にその言葉に答えた。

「知っています。しかし、それよりは普通の関係がいいと僕は考えています。先輩、後輩としての」

「あのですね」

　あきれて不二子は腕を組み、阿九斗を見下ろす。

「わたくしの黒魔術師としての野心を甘く見ないでいただきたいですわ。黒魔術師にとって魔王とは解放の象徴。でもわたくしは魔王を超える存在になりたいんですの」

「ご心配なく。僕は魔王になる気はありませんし」

　阿九斗がきっぱりと言うので、不二子は拍子抜けした様子だった。

「だ、だったらどうだって言うんですの？　あなたわたくしの計画をすべて見破って、わたくしを逆に罠（わな）に落とし……」

あれはけーなの妙（みょう）な行動のおかげだった、とは言わず、阿九斗は不二子の顔をまっすぐに見返した。

「な、なんですの？」

「僕は、先輩に魔術（まじゅつ）での喧嘩（けんか）の方法を教えて欲しいんです。まだ僕はマナを暴走させてしまうし、適切な使い方も知りません。授業では間に合わないんです」

阿九斗が真剣（しんけん）に言うと、不二子は心底から驚（おどろ）いた顔になった。

「それでわたくしに？」

「そうです。一番喧嘩慣れしている人に聞くのがいい」

そう言ってうなずくと、不二子は意地悪く微笑（ほほえ）んだ。

「わたくし、あなたを罠に落とすかもしれなくてよ」

「僕に何かしらの罠を仕掛（しか）けてくるとは思いますが、それでも先輩に習うのが一番いい」

本心からのことだったので真面目な顔で繰（く）り返すと、不二子は狼狽（ろうばい）した。

「と、とんだお人好しですわね。それとも善人であることをアピールするおつもり？」

「いえ、さすがにそこまで善人であるというつもりはありません。僕だって他人に対して苛立（いらだ）ちをぶつけてしまうことはありますし。ですが、先輩のことを信頼（しんらい）していると言ってもいいような気がします」

「それがお人好しだと言っているんですのよ」

「いえ、そうじゃありません。先輩、性格が悪いでしょう。利己主義で力を信奉し、それでいて他人の力を利用しようとする。そこに矛盾があるってことは、他人を信用してないってことです。だから怯えて隠れて行動する羽目になる」

「なっ……」

　不二子は絶句する。

――言い過ぎた……のかな？　でも、きっと事実だしなぁ……。

阿九斗は内心後悔しつつも、フォローしようと言葉を続ける。

「さっきも言ったけれどだからこそ僕は先輩を信用してるんです。ほら、絶対信用できない人間なら、打算でつきあえるじゃないですか。だから、交換条件さえ出せば、取引じゃないですけど、約束ができるんじゃないかなって。魔術を教えてもらうかわりに僕から交換条件を出すとすれば、僕が先輩に対して僕から手を出さないってことを約束するというのでどうでしょうか？　計算高い先輩のことだから、受けてくれると思うんですが」

阿九斗がたたみかけると、不二子は苛立ちとともに、バン、と目の前の机を叩いた。

「人の内心をわかったように言ってくれるものですわね！」

――悪人を自称してるんだから悪人として褒めたつもりだったんだけどな……。そもそも誰だってその程度の分析はした上で人付き合いをしているものじゃなかったかなぁ……。

困った顔で腕を組んだが、そうしていても埒があかないので、阿九斗は頭を下げた。
「不躾なのは謝ります。でも、僕としてもリスクを承知で来ているんです。それに僕を配下にしたかったはずでしょう？　僕があなたの生徒になるってことですから……」
「な、なんですの、その言い方は！」
金切り声を不二子はあげた。さらに机をバンバンと叩いて怒鳴る。
「わかりましたわよ！　教えて差し上げればいいんでしょう、喧嘩の方法！　この場ですぐにやってやりますわ！　そのかわり、寝首をかかれても文句を言わないことね！　この悪魔！　魔王！」
――目的は達したけれど、なんか怒られてるなぁ……。
阿九斗は肩をすくめた。
「その……あとひとつだけ……」
「なんですの!?」
「その……魔王ってのは、やめていただけると……」
「いいえ！　認めたくないけれども、あなたには、その才能がありますわ！」
不二子は三度机を叩いた。

○

それから不二子が生徒手帳を開くように言った。そこにメモをとれということだ。
「魔術とは、体内のマナを大気中のマナと反応させて現象を起こすこと。ここまではよろしい？　それで、体内のマナは脳内電気に反応して動く。これも箇単。では、マナの振る舞い自体がどこで決められるかというと、これは神が決めているの。エネルギーは中央発電所が大地そのものに放出しているから、エネルギーとは別。つまりマナのプログラムという言い方が適切ですわ」
そこまでは阿九斗も知っていた。が、続く言葉はそれまで漠然としか知らなかったことだった。
「神はマナの振る舞いを決める。マナは万能のように見えて、そこで縛られているんですわ。そうなると問題になってくるのは神。神とは人間の脳内を常にマナを通じてモニターし、それをログに記録し続ける存在。箇単に言うとそういうことになりますの。だから、神をコンピュータと考えるのも、信仰の対象となる人格と考えるのも自由ですわ。感情がモニターされていれば、その行いに応じて各個人に与える恩恵を差別化することも可能になる。ログ自体は公開されることはありませんけれど、いわば魔術の利便性を餌に、人々に善良な行動を強制しているということにもなりますわね。コ＝ロ神なら、慈善活動が美徳ですし、スハラ神なら勇猛な行動が美徳ですし、そのための魔術が使いやすくなるということですわ」
一般の人々の間では純粋な神への信仰として行われていることが、上層部ではシステム化されていたわけだ。とはいえ、神がそういうものだという情報は秘匿されていたわけではない。複雑に考えたくない者が多数いるというだけのことだ。アカデミズムに関わる者は全員知っているし、そうでないとしても知性的

な者は〝あえて〟宗教的に振る舞っている。その方が魔術によって生活が便利になり、とても有益だからだ。

「だから、この学園の卒業生が目指しているのは、最終的にはその神の〝仕組み〟そのものに影響を与える司祭という仕事、ということになりますわ。ですが、それに反対するのが黒魔術師。つまりわたくしたちは、これらの〝制度〟に反対して純粋な人間性の復古を訴えているというわけですの。少なくとも組織化された黒魔術師たちはそうしていますわ。もちろん、その一方で単なる犯罪を好む者が多いのも事実ではあるのですけれども」

　そこで阿九斗は口を挟んだ。

「そうすると、魔王というのは？」

「ご自分のことなのに知らないんですのね。いえ、誰も教えようとはしないでしょうね。この国で生まれた子供は洗礼を受けるでしょう？　あれは神からの契約で、それがなければ魔術は使えませんわ。しかし、そこから漏れた者は、もう人間としては生きていけなくなりますの。かつての魔王はそれを疑問に思ったとされていますわ。これも特に秘匿されている情報ではありませんわ。ただ誰も関心がなかっただけ」

「すると、それが魔術の行使とどう結びつくんです？」

「ある種の魔術は資格を必要とし、使用することは犯罪となりますわ。でも、その使用自体が不可能なわけではないということはご存じですわね？　例えば本来は免許が必要な飛翔魔法も学園では皆が練習している。同じことは『禁呪』にも言えますわ。資格がなければ使用できないけれど、資格があると神をあ

ざむけば使用は可能なんですの。あえてそれを行うのが黒魔術師とも言えますわ。ですが『禁呪』の使用自体は神に見られていますの。『禁呪』を使用する資格を持っていると神を欺くことはできても、そこで神によってペナルティを科せられることに違いはない。要するに黒魔術は使えば使うほど弱くなっていくわけですわ」

「それじゃあ黒魔術師でいることに意味はないですよね？」

「そうですわ。だから、黒魔術師は独自の神を持とうとした。自由な神を。何も禁止しない神を」

「その神は？」

「もうありませんわ。前の大戦で破壊されましたの。再度それを作るのが黒魔術師の夢ですのよ。だから、大司祭を堕落させようと頑張っている黒魔術師もいますわ。神を作り出せるほどの知識は大司祭とその周囲しか持っていませんもの」

「なるほど」

　阿九斗はうなずいた。不二子はここまでで一年の授業で習うことの一通りを話したことになる。

――とはいえ、黒魔術師も勝手を言っているだけのようにも思えるな……。そうなると、そこまで考えが違えば、僕も魔王にはならずには済むわけか。

　そして、不二子はここで核心の話に入った。

「それで、喧嘩の話ですわね。これまでのことを説明したのは、どの神の洗礼を受けたのか、と精神の傾向による得意魔術タイプの組み合わせが個性となるからですわ」

不二子は阿九斗の生徒手帳に手を伸ばして図を描く。四本の線を交差させて星形を作る。八つの頂点を持つマトリックスということになる。そして、それぞれの頂点に時計回りに次の順で文字を書いていく。

〝幻覚〟〝治療〟〝念動〟〝爆発〟〝心霊〟〝操具〟〝宗教〟〝変化〟

「これが精神の傾向による得意魔術の八つのタイプですわ。それぞれ図にしている通り、対面にある系統を同時に得意魔術とする人はいませんわ。幻覚が得意な人は心霊を苦手としますのね。それを見極めることが上達のコツですわ」

「先輩の場合だと？」

「わたくしは変化。マナによって物質の組成を変えることですわ。薬品を作ったり、身体そのものを変質させたりするのが得意ということになりますわ。わたくしの場合、薬品製作に特化していますけれど。重要なのは、爆発を苦手だと知っておくこと。授業ではまんべんなく習いますけれど、喧嘩では切り捨ててかかるべきですわね。効率的じゃないですから。あなたの場合ですと、明らかにわたくしとは逆。爆発が得意なのは間違いありませんわね」

「そうすると、それを中心に考えればいいわけですね」

「そういうことですわ。そこまでわかればあとは実際にやってみて覚えていただくしかないわけですけれども、その時間がないですから……」

　不二子は拳銃（けんじゅう）としか見えないものを机の上に置いた。

　阿九斗は不思議そうな顔になる。

「これは？」

「マナを弾丸（だんがん）に込められる詠唱（えいしょう）銃ですわ。弾丸にあらかじめマナが詰（つ）めてあり、射出後にその効果を発揮するんですの。誰でも使える武器ですが、マナをコントロールできる人が事前に弾丸を調整すれば様々な効果を出せますわ」

　不二子は弾丸を阿九斗の前に並べた。

「これ、いつも持ってるんですか？」

「そうですけれども、何か問題でも？」

「いや、違法（いほう）だと思うんですが」

「この学園ではその限りではないですわ。そもそもこれより危険な魔術（まじゅつ）を皆が使えるわけですからね」

　不二子はリボルバーの弾倉を開けて、簡単に使い方を実演してみせた。

　そこで少し会話の間が空いた。阿九斗の脳裏にふと気になることが浮（う）かんでくる。

「そういえば、先輩は寮長（りょうちょう）ですよね？」

「そうですわ」

「すると、照屋栄子という子のことをご存じですか？」

「いえ、知りませんわ……もしかして、あの朝礼であなたと汚らわしいことをしていた、あの妙な子のことですわね？」

不二子の表情が強ばった。

「何か知っているんですか？　生徒会長も知らない、と言っていました。ですが何か知っているようなそぶりはありました。おまけに彼女に気をつけろ、という忠告まで……」

そう聞くと、不二子は考え込むような顔になった。

「わたくしも、どういうわけか彼女にちょっかいをかけられて気にはなっていましたの」

「襲われたんですか？」

「いいえ、ちょっかいをかけられただけ。あなたとわたくしに共通することといえば、多分、あの宝の地図でしょうかしらね……」

不二子は考えを口に出したが、すぐにしまった、と口をつぐむ。しかし、阿九斗はそれを見逃さなかった。

「それはどういうことですか？　先輩は地図について何かご存じなんですか？」

不二子の顔が曇った。

「い、いえ……。それをわたくしの死んだ兄が昔に描いたのではないかと疑っていただけですわ」

「じゃあ……」

「ち、違いますのよ。だって、兄は違うと言っていましたもの」
「え？　亡くなったんじゃあ」
「死霊術ですわ。お忘れ？　わたくし黒魔術師でしてよ」
　そう言った不二子の表情はどこか強がっているようにも見えた。それまでの不遜なオーラは影をひそめている。
「確か死霊術は嘘がつけないんでしたね……。失礼。お兄さんのこと、おつらかったんですか？　死霊術を使ってまでお話しするなんて」
　阿九斗は不二子の表情に気づいて詫びたが、彼女はやや取り乱して声を大きくした。
「そんな！　あれは最低の男でしたわ！　家の威信を汚したんですもの！　幼い頃はよく一緒にいた記憶はありますけれど、それもきっとあの男が最低のロリコンだったからですわ！　生きていればきっと性犯罪者になっていたはずですわ！」
　――家の威信というなら黒魔術師にならなくてもいいだろうに。
　そうは思ったが、阿九斗は口に出さずに話を変えた。
「ともかくあの照屋栄子というのは気になりますね。でも、僕は女の子には強く出られなくて……」
　すると、不二子は恨みのこもった三白眼で阿九斗を見据えた。
「その割りには、わたくしには強く出ていませんこと？」

「いや……だって、先輩、悪人でしょう？　それが今更、優しくして欲しいってことはないでしょうに」
阿九斗が反射的にそう答えると、不二子は詠唱銃を阿九斗に突きつけて声を震わせた。
「わたくしに逆らう男は嫌いだし、わたくしに従順でも弱い男は嫌いですのよ……」
「それは失礼しました……」
阿九斗は突きつけられた詠唱銃を両手でうやうやしく受け取った。

○

校舎裏の林で詠唱銃の試し撃ちをしたが、具合は良好だった。遠くに置いたスチール缶を爆発四散させることがすぐにできるようになった。自分の意志で弾丸の軌道と爆発のタイミングをコントロールできるのでかなり扱いやすい。威力も自分のマナを使うのと違い、一定の範囲内におさえられている。これまではじめて自分でコントロールできる武器が手に入った、と阿九斗は安心する。
そして、どうやら頼んでおいた荷造りも終わったらしい。ヒロシが大きなリュックを背負って校舎裏にやってきた。ころねも一緒である。
「兄貴！　念のため一週間野宿できる分の荷物を揃えました！」
「ありがとう……。でも、荷物を半分にわけた方がよかったんじゃあ……」
「兄貴に荷物を持たせるわけにいきませんや！　あっしに任せてくださいな！」

「いいけど、気合いが空回りしても困るからさ」
「大丈夫っす！　あっしはいつも空回りしてますから！」
「ああそう……。ならいいんだ。さて、すぐに出発だ」
　阿九斗が言うと、ころねが疑問を口にする。
「今は夕方ですが？　明日ではないのですか？」
「予定を早めよう。誰も見ていないうちに出て行きたい。それに見つかったらまずいじゃないか」
　阿九斗が言うと、それに応える声が上から降ってきた。
「誰に見つかったらまずいのさ、紗伊阿九斗！」
　さすがにぎょっとして上を見る。木の上に照屋栄子が立っていた。下着が見えるのも気にせず、というかむしろ見せつけるように足を開いて胸を張っている。
「君は……」
　誰なんだ、と言葉を続けようとしたが、頭上にぐんぐんと下着が接近してきて阿九斗は絶句した。栄子が飛び降りたのだ。彼女は空中で身体をひねると、阿九斗の首に見事に肩車の格好で飛び乗る。
「ねぇ、連れて行ってくれるって約束じゃないか！」
　興奮した目で栄子は言った。
「約束した覚えは……」
「約束してなくてもついていくさ。いいだろう？」

　栄子は腰（こし）を阿九斗の後ろ頭にこすりつけるようにする。
「こら……」
　阿九斗は口ごもるが、それより激しい抗議（こうぎ）はヒロシの口から発せられた。
「兄貴から離（はな）れろ！　この淫売（いんばい）が！」
「淫売とは汚（きたな）い言葉を使うじゃないさ！　それよりもあたいの勝手だろ、この人の肩（かた）に乗るのはさ！」
「勝手なわけがないだろう！　兄貴はあっしのもんだ！」
「あんたホモ？　でも、この人はホモじゃないよ。ほら、だってこうすると顔の温度が上がってるもん。ほら、ほら」
　栄子が阿九斗の後頭部にぐりぐりと腰を押（お）しつける。
　両耳をぷにぷにとした太ももで挟（はさ）まれ、阿九斗はさすがに頬（ほお）が紅潮するのを感じる。
「よ、よしてくれって……」
　それでも強く出られないのが、阿九斗の阿九斗たるところだ。同様にヒロシも咆（ほ）えるばかりで直接に栄子に触（ふ）れることはしない。
「連れて行っておくれよ。嫌（いや）だって言ってもついていくけどさ」
「駄目（だめ）でやんす！」
「勘弁（かんべん）してくれよ。ほら、危険になりそうだしさ……」

「嫌だよ！」
そんな風に数分ばかりぎゃんぎゃんやっていると、ころねがぽつりと言った。
「議論していてもどうにもなりません。それにもう完全に日は落ちました。まずはここで野営してはどうでしょう？」
そして、そういうことになった。
——待てよ。どうして僕は学校裏の林で野営しているんだ？
阿九斗がそれに気づいたのはテントで横になってからだった。いつのまにやら栄子は姿を消していたので、阿九斗はこっそりとテントから抜け出して、深夜に移動すれば栄子から逃げ出せるかと試してみたが、すぐに木の陰から栄子が姿を現したのを見てあきらめた。
——監視してるってことか。人造人間でもないようだから、寝ない訓練でもしてるんだろう……。何者なんだか、まったく……。
もはや観念して阿九斗は寝ることにした。

○

翌朝の早朝も早朝にヒロシをたたき起こして阿九斗は出発したのだが（裏の林で野営とは間抜けすぎて他の生徒に見られたくなかったからだ）、それと入れ替わりに学園に戻ってきたのは、父親からの呼び出

しを受けていた絢子だった。

父から聞いたのは、照屋栄子が公儀隠密(こうぎおんみつ)となって学園に潜入(せんにゅう)したという事実だった。父にもどのような任務か、そして誰が彼女を動かしているのかはわからないという。

服部(はっとり)と照屋の間には、浅からぬ因縁(いんねん)がある。同じスハラ信者でありながら、その教義の解釈(かいしゃく)に違(ちが)いがあり、長く争ってきた。服部は国防のために平時の政治に関与(かんよ)する道を選んだが、照屋はそれを惰弱(だじゃく)として武力を磨(みが)くことにその生涯(しょうがい)を捧(ささ)げることを美徳としていた。

——それが潜入(せんにゅう)したとなると、目的は……。

絢子の頭には、当然ながら阿九斗のことがある。一刻も早く、と、わざわざ飛行バスも動いていない早朝に自らの足で帰ってきて阿九斗の部屋の窓に到着(とうちゃく)したのだが、一瞥(いちべつ)しただけですぐに阿九斗が不在であることはわかった。カーテンは開け放たれていて、ベッドが綺麗(きれい)に整頓(せいとん)されていたからだ。

「出かけている？　こんな早朝に？」

絢子は女子寮(じょしりょう)にとって返して、けーなの部屋のドアを叩(たた)いた。返事はなかったが、けーなは部屋に鍵(かぎ)をかけておらず、ノブをひねると開いた。

ぬいぐるみと食べ物の空袋(からぶくろ)ばかりの部屋に入ると、けーなは物音にも目を覚まさずにぐっすりと寝ていた。

「ちょっと、早朝に悪いが……」

絢子が揺(ゆ)すると、けーなは寝言(ねごと)を漏(も)らす。

「もうコシヒカリは食べられないよ……」
「どうしてコシヒカリ?」
「でも、ミルキークイーンなら食べる……」
「わけのわからないことを言わないで起きてくれ!」
　絢子が激しく揺すると、けーなはようやく起きあがって目をこすった。
「朝?　夜?」
「早朝だ。悪いが、緊急の事態だ。紗伊阿九斗はどこへ行った?」
「んー?　あーちゃんなら出かけたよ」
「どこへ?」
「宝探し」
「なんだ、それは?　子供か?」
　絢子は思わず聞き返す。一連の騒動を絢子は見ていない。
「違うよ。本当だよ。海賊の秘宝がこの学園に眠ってるんだよ。本当の勇気ある冒険者だけがそれを手に……」
「馬鹿な妄想はいい!　本当のことを教えてくれ!」
「だから、本当だってば……。きっとキャプテンキッドの宝だよ。彼の偉大なる航海がこの学園で終わりを告げて五十年になるけど、それまで発見されなかった……」

「ここはずっと陸地だ！」

絢子は叫んだが、やはりけーなに聞いたのが間違いだと、より信用できる者を探して外に飛び出す。

が、結局、まともな情報を得られたのは、朝食の時間だった。


お百姓さんもビックリ!!
購買部特選
米だわら

「あの馬鹿なら責任とって宝探しに行ったわよ」
「変な女と一緒よ。けーなじゃなくて、なんか髪の長い女と。見たこと無い子だったよ。あんなの生徒にいたかなぁ。OG?」
「どうでもいいじゃん。すごい親密だったわよ」
「だって朝礼の時間にあんな……うっふっふ……！　ちょっと言いにくいなぁ……」
「言っちゃいなよ。アレしてたんだよ、アレをさ！」
「朝礼でだよ。信じられないよねぇ……やだぁ……！」
　女だけの遠慮のない会話だったが、その内容のあまりのことに絢子は一瞬、気を失いそうになった。
――な、なんだ……何を考えているんだ、紗伊阿九斗！　それにまさか、一緒にいるというのは栄子なのか？
　結局、絢子がそれから宝の地図を手に入れ、支度をした後に、風紀委員長による禁止を無視して密かに後を追うべく出発したのは、昼もかなり過ぎてからのこととなってしまったのだった。

3　みっつの鍵

宝探しに行った生徒が全員同じ場所に行ったのは、例の宝の地図においてすぐに場所が特定できるのが地下納骨堂だけだったからだ。

「じゃあ、残りの二箇所（かしょ）は印はついているけれど、範囲（はんい）が広すぎてわからないってことか」

「そうっす。こっちは森で、こっちは昔の街ですね」

阿九斗（あくと）は宝の地図と、生徒手帳に表示した学園敷地（しきち）の航空映像とを比較（ひかく）しながらヒロシに確認する。

「で、ここの地下納骨堂は大きいから、位置が特定できたってことか。他の二箇所を探さなければならないとしたら、ちょっと大変だな」

阿九斗は指で地下納骨堂の位置を示した。上はちょっとした公園になっている。そこに地下への入り口があり、大戦時の戦没者（せんぼつしゃ）を悼（いた）んでのセレモニーにおいては中に入れるのだという。

「そしてこの文章か」

《大和望一郎のために》

地図には印の下にそう小さく書かれている。他の二箇所の印の下には文字が書かれていないから、どうしてもここに最初に向かうしかない。

「この大和望一郎というのが戦没者の名前なんだろうね」

「地下には骨壺を納めた墓が並んでいるっす。そこにその名前があったら、まぁそこに何かヒントがあるってことでしょう」

ヒロシがうなずくと、けらけらと横合いから笑い声を挟んできた者がいる。栄子だ。

「馬鹿みたい。ちょっと考えればわかるってのにさ」

「確認しなきゃわかるもんもわかんないんだよ！」

ヒロシは怒鳴る。

歩いている間もずっとこの調子だった。阿九斗としても頭が痛い。

「でもさ、望一郎が死んでなかったらどうするのさ」

「そっちこそ馬鹿な言い方してんじゃねぇよ。骨がなかったらまた別の意味でのヒントと思って探すしかないだろ」

栄子とヒロシの言い争いが続きそうなので、阿九斗は「ほら」と行く先を指さした。

「見えたよ。公園だ」

昼前に最初の目的地に到達できたことになる。

門をくぐった。定期的に掃除されているわけではないらしい。煉瓦の道にはところどころ草がかぶさっている。木々の枝は伸び放題で、周囲を陰鬱な雰囲気にしていた。屋根の下にベンチが置いてある休憩所のようなところはあるが、そこも掃除されていないので入るのははばかられる。

「掃除はセレモニーのときだけやるみたいっすね」
「戦争が百年以上も前のことになれば、それも無理はないだろうね」
阿九斗が言うと、今度はヒロシが前方を指さした。同様に放置されているが、ここだけ少しは小綺麗な建物があった。『大戦記念館』と刻まれており、窓から窺えるその中には絵や当時の軍服などが展示されてある。年に一度くらいはここだけ掃除されているようだ。
「あの中に地下への入り口があるっす」
過去にセレモニーに参加したことがあるらしいヒロシが言い、彼が先頭に立って記念館のドアを開けた。展示室へは入り口から入ってすぐ右だが、直進すれば大きな扉に突き当たる。
「その扉の奥が階段になってるっす」
「じゃあ、いきなり襲われるかもしれないのか。気をつけて行こう」
阿九斗はヒロシに荷物を置くように言い、さらにそこで待っているように言おうと栄子を見たのだが、それより早く彼女は阿九斗の腕にしがみついていた。
「一緒に行くにきまってるじゃないさ」
そうされると阿九斗としても来るなとは言いにくい。
「……わかったから、ともかくくっつくのはやめてくれよ。危ないことになる可能性は高いわけだから」
――とはいえ、女の子に怪我をさせるわけにいかないしなぁ……。

阿九斗は内心で困りつつ、ポケットに手を突っ込んで詠唱銃のグリップを握ると、もう片方の手でドアを開けた。

地下へ続く階段は五、六人が並んで歩けるほどの幅があり、一定の距離ごとにライトが設置されていた。学園の地下迷宮よりも地下へ降りていく感覚は薄い。だが、その距離は長く、感覚的にはかなり地下まで降りているのではないかと思われた。

階段を降りきると、そこにはかなりの広さの空間が拡がっていた。サッカースタジアムほどもありそうだ。天井はかなり高い。五階建てのビルが入りそうな高さである。そこにもライトが設置されているが、下まではっきりと照らすとはいかない明るさだ。反対側の端は薄暗くて見えにくい。床は人工芝と思われる青。そこに規則的に小さな四角い箱がびっしりと並んでいる。ここにあるのはそれだけだ。格子状になっている人工芝の部分に足を踏み出してみると、箱が四角い樹脂製の墓であることがわかった。ひとつが三十センチ四方程度だから、ここにはかなりの人数の骨が眠っていることになる。ひとつひとつには名前が刻まれていた。どうやら五十音順で並んでいる。

「かなり多いけど、これなら目当ての名前はすぐ見つかるだろうね」

阿九斗は言い〝大和〟の名字を探そうとした。入り口近くは〝あ〟行だから、〝や〟行はどうも反対側の端になりそうだ。

「襲ってくるのがいたとしたら、奥に潜んでいるわけか」

阿九斗は後ろに栄子とヒロシを従えて歩きはじめた。奥に行くと、入り口からは見えなかった汚(よご)れや傷がいくつも床についているのがわかる。ここで戦闘(せんとう)が行われた証拠(しょうこ)だ。血のついた布などのゴミがいくつか落ちている。

「やれやれ。こんなに汚しちゃって。死者に対する礼儀(れいぎ)ってものがあるだろうに」

阿九斗がつぶやくと、栄子が心底から不思議そうに「えええええ」と声をあげた。

「どうしてさ？　魔王(まおう)だろうに、あんた！　礼儀だって？」

「僕は魔王じゃないし、将来もそうはならないよ」

阿九斗は即座(そくざ)に言い放ったが、栄子は首を横に振(ふ)った。

「それじゃ面白(おもしろ)くないじゃん！　面白がらないから駄目(だめ)なんだよ。なんであんたってば面白くない方向にばっかり持っていこうとするのさ」

「そういう刹那的(せつなてき)なのは嫌(きら)いなんだ」

阿九斗としても妙(みょう)な方向から責められたような気がして気分が悪い。

「駄目だよ、そんなの。そうじゃないとあたいがあんたのことを好きでいられないじゃないか。もっと面白くしてくれないと、あんたのこと裏切っちゃうんだからね！」

栄子はひょいと前に飛び出て、くるりと振り返ると、すねたように「いーっだ」と口を横に拡(ひろ)げた。その仕草が幼児がするようなあまりに本気のそれだったので、阿九斗は戸惑(とまど)いを感じる。

——裏切るって、最初から仲間じゃない……。いや、始終裏切ってる感じなんだけれども、いったいどうしたらいいのか……。

「どうして僕にかまうのさ」

阿九斗が聞くと、栄子は今度は急に怒(おこ)り出した。

「だから、あんたのこと好きになったからって言ってるじゃん！」

「ちょっと待って。僕ら、接点はないよね？」

さすがに阿九斗もぎょっとする。

「そうだよ！　あの朝礼のときが最初だよ！　それで何が悪いって言うのさ？　一回見ただけでいろいろわかるあの感覚ってあるじゃん！」

「そういう感覚が存在することはわかるけど、何か間違(まちが)ってると思わない？」

「間違ってるとか間違ってないとか細かいこと言ってるのが駄目なんだよ！　どうしてそうなのさ？」

「誰もが穏(おだ)やかに暮らせるように日頃(ひごろ)から努力するのが大事だからに決まってるじゃないか。他人に迷惑(めいわく)をかけることだから間違ってると言っているんだ」

阿九斗は大真面目(まじめ)に言った。栄子はさらにかんしゃくを起こした子供のように騒(さわ)ぐ。

「そうじゃない！　そうじゃないよ！　魔王だっていうから来たのにさ！　なんでそんなつまんない奴(やつ)なんだよ！」

栄子はわめくが、阿九斗はそこで言葉を止めた。栄子の背後に蠢(うごめ)く影(かげ)を見つけていた。

「後ろ！　後ろでやんすよ！」
ヒロシが栄子を指さして注意するが、栄子はまだ興奮した様子でわめいている。
「あたいを味方にしなくていいのかい？　あたいはホンモノの男に命を捧げることだけ考えて生きてきたんだ。そのあたいが気に入ってあげようって言うんだよ！」
「そういうことは後で言ってくれ」
阿九斗は詠唱銃を構えた。
栄子の背後には、人形の影が迫っていた。細身でゆらりとした動き。そこまでしかわからない。
「動けば撃つぞ」
短く警告して、その直後、影が加速したのを見て、阿九斗は詠唱銃を発砲した。
乾いた射出音。避けるように動く影を追うように弾丸を操り、接触した瞬間、相手を吹き飛ばす程度に調整された爆発を起こす。
バスケットボール大の光球が一瞬ふくれあがった。その圧力は人一人を吹き飛ばす程度のものとはいえ、直撃すれば立っていられないほどの衝撃を与えるはずだった。
しかし、影は光球を中心に拡散していた。光球が消えてみると、そこに確かに穴があいている。柔らかい物体にボールをぶつけて貫通させたようなものか。が、すぐにその穴はふさがれた。影はまるで小さな粒の集合体で、何をぶつけようと形を変えてしまうだけと阿九斗には感じられた。

——皆が言っていた通りか。爆発なら散らせるかと思ったけれど。

阿九斗は次の弾を装填しつつ策を練ろうとするが、影と阿九斗の間に割り込んできたのは栄子だった。

「うるさいよ、あんた！」

栄子は上着の内側から素早く短刀を抜いていた。逆手に構えたそれを回転しながら撫で斬りにする。

影は爆発を受けたときと同じように一度は見事に切断されたが、飛び退くように遠ざかった後すぐに再生している。

阿九斗は影の再生よりも、栄子の動きに驚嘆していた。

——結局、ただ者じゃないんじゃないか。

それでも栄子を前に出しておくわけにはいかない。下がるように指示するかどうか迷ってしまうが、どう言っても言うことをきくまい、と阿九斗は自らが前進する。

影の正体が見える。すらりとした体形の黒ずくめの姿。男か女かはわからない。顔を白い仮面で覆っていた。人間といえば人間には見える。さらに、そいつは阿九斗が接近すると声を発した。

「帰れ。そして忘れろ。さもなくば命の保証はしない」

「話ができるならありがたい。実はこちらとしても帰りたいところなんだ」

冗談ではなく本心から阿九斗が言うと、影は拍子抜けして肩をやや落としたように見えた。

「それならば帰れ。そして二度とここに来ないように……」

影が言いかけたが、その声を切り裂いて気合いが響いた。

「きぇええい！」

栄子が飛び上がってから影に向かって脳天から短刀を斬り下ろす。

影は仮面を割られるかと思いきや、その仮面すら霧となったのを阿九斗は見た。それすらも本体なのか、あるいは周囲のものをすべて霧とできるのか、それとも目の前のそれが映像に過ぎないのか。

――そんなこと考えても仕方ない。ともかく、ここは彼女を止めないと……。

「やめるんだ！　下がれ！」

「嫌だ！」

阿九斗の指示を無視して、栄子は連続で斬撃を叩き込んでいる。影には効果はないようだが、その霧となった身体にも疲労はあるのか、栄子の斬撃を嫌がるように影は後ろに下がっていく。

――すると映像でなく、自分と周囲のものを霧にして再構成している？　とするとマナを消費しているわけか。

阿九斗はそう推測した。

――だとすると疲れた相手は防御でなく攻撃に移る！

「危ない、下がれ！」

再びそう叫んだが、栄子は当然ながら指示には従わない。

「なんであたいに命令できるんだよ！　あたいのことを好きにならない奴(やつ)があたいに命令していいはずがないだろ！」

――なんだ、この子は……！

そして阿九斗が危惧(きぐ)したことが起こる。

影(かげ)から伸(の)びた腕(うで)が、一度霧状になり、次の瞬間に鋭(するど)い銀色の刃(やいば)を形作った。その変化の意外さに対応できなかったか、突(つ)き出された銀色の刃の一撃(いちげき)を栄子はかわし損(そこ)ねる。

「きゃああ！」

栄子は吹き飛ばされて床(ゆか)に転がる。それでも短刀を立てて一撃を受け止めていたようだが、その腕には一筋の赤い傷が浮(う)かんでいる。

「帰れと言っている」

影は低い声でそううなると、栄子に向けて滑(すべ)るように進んだ。その銀色の刃で栄子に次々に攻撃を加えていく。

栄子は転がり、短刀で受け止め、なんとかそれをしのぐ。

――攻撃をするときは実体化しているのなら！

阿九斗は影が栄子に攻撃する瞬間(しゅんかん)に銃弾(じゅうだん)を撃(う)ち込もうとするが、影はそれを身体の一部を霧にして無効化、あるいは銀の刃で素早くはじき飛ばす。

それなら、と阿九斗は弾丸を選び、素早く装填(そうてん)した。小さな竜巻(たつまき)を起こす魔術(まじゅつ)の込められた弾丸だ。

栄子にさらに攻撃を加えようとしている影に、その弾丸を撃ち込む。これまでと同じ効果のそれと思っていた影は、それを霧になって回避（かいひ）しようとしたが、弾（はじ）けた弾丸はそこを中心につむじ風のような渦（うず）を生み出し、霧となった影の身体を巻き込んでいく。さらに、そのつむじ風は阿九斗の力でその威力（いりょく）を増していた。瞬時に身長の二倍程度の小竜巻となり、影そのものをはじき飛ばす。

――威力そのものはずいぶん小さいけれど、制御（せいぎょ）できればなんとかなるものだな。

阿九斗は栄子に駆（か）け寄った。

「大丈夫（だいじょうぶ）かい？」

倒（たお）れている栄子に手を差し伸べたが、その次の瞬間に、阿九斗は後悔（こうかい）していた。栄子は阿九斗を上気した顔で見上げていた。阿九斗は中学の時分に女の子からこういう表情を何度か向けられたことがあったのを思い出した。そして、その度（たび）にろくな事がなかったことも思い出していた。

――どうしたものかな。どういうわけかわからないけれど、こういうタイプの女の子はいつも、僕が誤解を解こうとしてきちんと説明をすると、ものすごく怒（おこ）るか泣き出すんだよなぁ。

「助けてくれたんだね！　あたいを！　あたいをさ！」

栄子の声は弾（はず）んでいる。

「誰だって助けるんだ。そんなつもりじゃない」

阿九斗は差し伸べた手を戻（もど）そうとしたが、それよりも素早く栄子はその手を掴（つか）んでいる。

「照れるんじゃないさ。素直じゃないね！」

栄子は上機嫌になっている。
阿九斗は目をそらして、ずっと後ろで様子を見ていたころねを呼びつける。
「おーい、治療をしてもらえるかな?」
すると、ころねが無言で阿九斗の背後を指さした。
「?」
そちらを見ると、吹き飛ばされた影が再びその身体の形を取り戻していた。阿九斗には、その影が怒っているように感じられた。相手が人間的なのか、それとも自分が相手を人間的に扱っているだけなのかはわからなかった。
——どっちにしろ相手が積極的にこちらに攻撃してくるようだと困るんだよなぁ。
阿九斗は竜巻の弾丸を装填したが、その影はこちらに向かってくることも逃げることもなく、ただ離れた場所でゆっくりと手を広げた。
悪い予感がした。その予感が当たった。
上空から羽音が聞こえてきた。
見上げると、天井近くに黒い雲がたれ込めているように感じられた。
雲はうごめきながらうなっている。鳥とも虫ともつかない羽音が、いくつも重なり合って重低音になったものだ。
「冗談じゃない」

阿九斗はうめいた。昔、鳥の渡(わた)りを見たことがあった。その群れの数は何百にもなる。今、上空にいるそれが鳥か虫かは知らないが、渡りのときの群れと同じだけの数が、この地下に飛び交(か)っていると気づいた。

生徒達を退けた化け物とやらがどんなものか、阿九斗は改めて実感した。確実にあの群れは影にコントロールされている。

「逃げるぞ！」

阿九斗は栄子に怒鳴(どな)る。

しかし、栄子の反応は頑(かたく)なだった。

「駄目(だめ)だよ！　あたいの紗伊(さい)阿九斗は逃げないよ！」

栄子は逆手に短刀を構えた。あくまで影(かげ)と戦う心づもりのようだ。

――何にこだわっているんだ？

狂気(きょうき)というわけではない頑なものを栄子から感じる。何か阿九斗の知らない裏がこの件にはあるとは気づいていたが、それを栄子は知っているということだろう。だが、考えている暇(ひま)は阿九斗にはなかった。

上空から黒雲が降ってきた。それは蝙蝠(こうもり)の群れだった。視界を次々と黒い禍々(まがまが)しい姿が横切っていく。周囲が羽音で満たされる。

阿九斗は連続で詠唱銃(えいしょうじゅう)を発砲(はっぽう)したが、いかに弾道(だんどう)をコントロールしようと、爆発(ばくはつ)を制御しようと、撃ち落とすことが出来るのは一回に一、二匹(ひき)にすぎない。その間に目に入らない位置から攻撃(こうげき)がやってく

る。
「くそっ」
　攻撃自体は軽い。ただし、その回数が尋常ではない。服を切られ、そこにうっすらと血がにじんでくる。長時間このままでいれば肉がそがれて深刻な怪我となるのは間違いなかった。
　栄子もヒロシも同じ状況であった。栄子は的確に眼前の蝙蝠を斬り落としているが、数がまるで追いついていない。一方、ヒロシはうずくまっているばかりだ。
「ころね！」
　阿九斗は叫んだ。
「はい？　助けろと言われても困ります。明らかに状況が自業自得なので、あなたが魔王になるかどうかを監視し、無用な危害から遠ざけるという任務に合致しません」
　ころねは冷静に答えた。彼女はまったく蝙蝠の飛んでこない遠くの位置で、一人、棒立ちになっている。
「違う！　ヒロシを連れて逃げてくれ」
「そういう依頼ならお受けします」
　ころねはポシェットをごそごそやりはじめた。そこから小さなタイヤのついた靴を取り出すと、なぜか一度高く掲げてから自らの足にはめた。要はローラースケートなわけだが、動力のついていたらしいそれは、かがんだ格好のままのころねを凄まじい加速によりヒロシの許に到着させた。ころねは乱暴にヒロ

シの首根っこを掴んでぶらさげると、タイヤの焦(こ)げた臭(にお)いを残して華麗(かれい)にターンし、やはり一気にその場を離れていく。その所要時間、わずか数秒。



——見事な手際を褒めるべきなんだろうけど、一向に褒める気にならないのはいったいどうしてなんだろうか……。

阿九斗はころねが安全圏に逃げたのを確認してから、再び相手の方に顔を向けた。相手というのは例の影だ。もちろん奴がこの群れを操っているのは間違いない。蝙蝠の一匹一匹は人造生物だ。撃ち落とされた死骸を見ればわかる。単純な仕組みで動いているそれらだが、それだけに横からコントロールを奪うことは難しいようだった。つまり影は人造生物を手なずけている、という言い方が可能かもしれない。しかも、人造生物は大量生産が可能だ。影が人間であるとすれば、恐ろしい才能の持ち主だと言える。容易に勝つことができない相手だ。

しかし一方で、逃げれば何もしてこないであろうことは理解している。さらには致命傷になる攻撃も意図的に避けてくれている気がする。だが退く気がない栄子には当然ながら容赦のない攻撃が加えられている。状況は悪化するばかりだ。こうしている間にも彼女には小さな切り傷や擦り傷がみるみる増えている。やがては力尽きてしまう可能性もある。

「どうにもいけない。ホントに駄目だな、僕は」

阿九斗はぼやいた。こういうときに冷静に考えてしまうのが自分の悪い癖なのだった。

事態の解決策は思いついていた。困難なことだが、なぜか自分には出来そうな気がしていた。

結局、栄子のペースに乗せられたことになる。彼女は死にかけてまで何かを為そうとしているわけだ。それが自分への期待から来るものなのか、目的の大きさから来るものなのかわからないが、ここはまずはその

宝とやらを見てみないといけないような気がしてきた。
もちろん栄子の思い通りにしてしまうのは危険だ。彼女は明らかに何かを企んでいるのだから。ただ、自分も理由を知らぬまま利用されてしまうよりは、理由を知って自分で道を選んだ方がいい。
阿九斗は影に向かって叫んだ。
「すまない！　気が変わった！　僕はあんたが守っているものが何か確かめさせてもらうことにした！ひどい目に遭わすわけじゃないから、恨まないで欲しい！」
そう宣言すると、影は一瞬驚いたようだったが、すぐに阿九斗に対する蝙蝠による攻撃の密度を増してきた。が、阿九斗は冷静だった。
――こいつで……。
先ほども使ったあの風を発生させる弾丸の弾頭を指で折り取った。仕組まれた魔術信号が起動し、阿九斗の手の中で小さなつむじ風が巻き起こる。
――射出した風は制御できた。つまり、どうやら僕は身体のマナが強すぎて、身体に近い位置で行われた魔術を制御できないってことだ……。ならば……。
阿九斗は覚悟の上で、手の中のつむじ風を強化した。
ほとんど爆発音に近い風音が響いた。突如として室内に台風が出現したようなものだった。渦巻く暴風が阿九斗を中心に一気に拡がっていく。

風は蝙蝠達を軒並み巻き込んだ。床の人工芝がめくれて舞い上がる。樹脂の墓も巻き込まれて吹き飛び、中から骨壺が飛び出て粉となった骨をまき散らした。

「ひぃいい！」

人間らしい悲鳴を影はあげた。

阿九斗を中心にすり鉢状の形になった風は、当然ながら阿九斗も制御しきれていないらしく、すべてのものを巻き込んで地下を暴れ回る。轟音を立てて部屋の隅々まで撫で尽くした風は、霧になっていようといまいと無関係に影を巻き込んで空中に吹き飛ばした。

――そろそろ収めるか……。

阿九斗はそう決めてマナの力を抑えようとするが、次の瞬間にそれに失敗したことを覚った。うなる風音の中、いびつで大きなみしりという軋音が聞こえたのだ。天井を見上げると、天井にヒビが入っていた。ぎょっとする間もなく、天井が落ち始める。

轟音と地響きが大地を揺らした。岩と記念館の所蔵物が次々と落下し、風に巻き込まれ吹き飛ばされていく。

しばらくしてようやく阿九斗は風を収めることに成功した。だが、すでに大戦記念館は完全に破壊されていた。阿九斗と、その横に倒れている栄子は風の中心にいたために無傷だったが、その周囲には渦巻き状に瓦礫が転がっている。天井は完全に消え去り、昼の空が覗いている。

――出来るとはおもったけれど、こういうことじゃないんだけどなぁ。

阿九斗は後悔したが、今更どうにもならなかった。

と、すぐ横で嬉しそうな声があがる。栄子が起きあがったのだった。

「うわぁ！　すごいよ、やってくれたよ！」

「嬉しくないよ。物を壊して何が楽しいのさ」

阿九斗はさすがに不機嫌に応じる。

「楽しいよ。それに理由なんてあるわけないじゃないさ」

栄子は自らの傷など気にしていないかのように、血に染まった顔で微笑んだ。

「……それで、僕にここまでさせて、どういうつもりなのさ」

さすがに冗談では済まされないと阿九斗は真剣になって聞いた。栄子が微笑んだまま応じようとするが、阿九斗は表情を崩さなかった。すると、栄子も笑顔を消した。

「何がどういうつもり、なのさ」

すねたように言った。

「隠していることがあるだろう」

「そりゃあ、あるよ。でも、あんたのためになると思って……」

「そんなことはどうでもいい。君は僕に宝探しをどうしてもして欲しいわけだ。これまでは冗談じゃないかって思ってたけど、命をかけてまでそうしようってのはどういうことなんだよ。宝ってのは何なんだ？」

阿九斗が聞くと、栄子は黙り込んで顔をそらした。

　しかし、栄子はすぐにうずくまってしまう。身体の傷がさすがに多すぎた。
　阿九斗は無言で栄子の身体に手を当てた。先日、食堂で一年生がやっていたような魔術による応急処置を試みる。見よう見まねだったが、マナが暴走することはなかった。得意、不得意で言えば、治療はおそらく不得意の分野に入るのだろう。だが、不得意だった分だけ、治療はうまくいった。
　その治療に、栄子は驚いた顔をしていたが、不意に阿九斗に向かって弾んだ声をあげた。
「ねぇ？　じゃあ教えたら、あたいを好きになってくれるかい？」
　治療の具合を見ながら阿九斗は答える。
「君がまともになったらね」
　栄子は、ぱっと顔を明るくした。
「それなら大丈夫。あたいはまともだよ」
「まともじゃないよ」
　阿九斗が即答すると、栄子は顔を曇らせた。
「じゃあ、これからまともになるようにすればいいんだろ」
「そういうことだ」
　阿九斗はうなずいた。傷の具合を見てから、栄子から手を離す。栄子は少し残念そうな顔になったが、自らの身体の具合を確かめながら、淡々と、しかし恐ろしいことを語りはじめた。
「宝ってのは、先代の魔王の遺物だよ」

「本当なのか？　どこから聞いたんだい、そんな話」
　これには阿九斗も驚く。
「それは言えないよ。ただあたいはあんたにそれを手に入れてホンモノの男になって欲しいんだよ」
「魔王の遺物を手に入れたら本物の男だなんてことがあるもんかい。馬鹿(ばか)馬鹿しい考えだよ、それは。君は黒魔術師(まじゅつし)なのかい？」
「あんなのと一緒(いっしょ)にして欲しくないよ。あたいは、あんな風に四角四面に考える人間じゃないんだもの」
「じゃあ、どうして……」
「あんたはそれを手に入れる運命にあるんだ。ともかく、そういうことなんだって」
「運命だって？」
「そうだよ。あたいが忠誠を誓(ちか)っている人がそう言ってた。あの人とあんたと、どっちかが滅(ほろ)んで、どっちかが世界の命運を握(にぎ)るとかなんとか」
「それこそ冗談だろうに」
「冗談じゃないんだよ。あの人が間違(まちが)えるのを見たことがないもの。それにさ、あの人、あんたに似てるんだよ。だから好きになったんだもん」
「そうかい。ともかく事情はわかった。どこかの誰かが僕のことをどう考えているかも」
　阿九斗は面倒(めんどう)そうに言った。栄子は甘(あま)えるように鼻を鳴らす。
「そんな邪険(じゃけん)にしないでおくれよ。あたいは本気で言ってるんだからさ」

「本気だっていうのなら、どうして二人の男のそれぞれを天秤（てんびん）にかけるようなことを言ってるんだ？　そもそも僕がそれを手に入れるのが本当に運命なら、君は何もしなくてもいいはずだ」

　そう聞くと、栄子はいきなり表情を暗くした。

「それが女心ってもんじゃないか。それをわからない男は情けないよ」

「知ってるよ。どうも苦手なんだ」

　阿九斗はこの会話から逃（のが）れようと、積み重なっている瓦礫（がれき）をつま先でのけながら歩きはじめた。それでも栄子は後を付いてくる。

「ね、あたいが教えてあげようか？」

「遠慮（えんりょ）するよ。だって、事情がわかったからには、僕にとっては君は厄介（やっかい）事でしかない」

「よしておくれよ。そんな冷たい言い方」

　栄子がすねたような声をあげるのと、阿九斗が足下にそれを見つけたのが同時だった。

「大和望一郎……」

　その名が刻まれたプレートがそこにあった。その名を口にしてから「しまった」と思うが、もう遅（おそ）い。栄子が阿九斗の足下にかがみ込んでいた。

「これの中にあるんだね！」

　栄子はすでにそのプレートが貼（は）り付けられた墓を開けている。

中には骨壺(こつつぼ)はなかった。代わりにそこに入っていたのは、古ぼけた小さなキャラクター人形だ。掌(てのひら)に収まる程度のサイズ。

「人形……？」

栄子がそれを拾い上げた。どうやら人形というよりはキャラクターの形をしたキーホルダーと言う方が正しい。

「後ろにボタンがある」

栄子がそれを裏返し、ボタンを押(お)した。人形の背中に小さく開いていたのはスピーカーの穴だったらしい。音声が流れてくる。

《騎士(きし)用装備研究所の奥(おく)の棚(たな)……。みっつが揃(そろ)ったら音声を流せ……》

そこまでが理解できる言葉で、続いて甲高(かんだか)い雑音のような音が録音されていた。阿九斗は栄子からそれを手渡(てわた)される。

「子供が使う録音キーホルダーか。最後の音は……」

「人工知能をプログラムするときに使われる言語の一部ですね。知識がある魔術師ならば、口から音声として発音することもできます」

阿九斗の背後から不意に解説がやってきた。振(ふ)り返るところねがいた。

「びっくりした。いるなら言ってくれよ」

「いきなり天井(てんじょう)が崩(くず)れたので逃(に)げるのが大変でした。あれはあなたの仕業(しわざ)ですか？」

「う……いや……正当防衛の結果ああなった」
阿九斗は言った。そして誤魔化(ごまか)すようにキーホルダーを話題にする。
「誰かがこれを録音して、ここに収めたってことだ」
「見ればわかります。ともかく、正当防衛の結果だということは認めてもいいですが、皆(みな)からはあなたが大戦時の死者を冒涜(ぼうとく)したと思われることは確実ですが」
「そうだなぁ……そりゃあ……なぁ……」
――また妙(みょう)な噂(うわさ)を立てられるんだろうなぁ。
阿九斗は空を見上げて、これからどうしたものか考えていた。

○

例の秘密の部屋で一人水晶玉(すいしょうだま)を見つめていた不二子(ふじこ)は、映し出されたその光景を見て絶句していた。
――あのキーホルダー！
映像は阿九斗たちを上空から見下ろしている。不二子は阿九斗に渡(わた)した詠唱銃(えいしょうじゅう)に発信器を仕込んでいた。それを追って小形の飛行型映像中継(ちゅうけい)装置である『モニター』を飛ばしていたのだ。
「ああ、まさか……。だけど、今度ばかりは言い逃れはできませんわ！」
不二子は兄の首が入ったガラス瓶(びん)を抱(かか)え、水晶玉の映像を見せる。

「言い逃れと言われても、本当に記憶にないんだ。ただあのキーホルダーは確かに僕らのものだね。よくあれで伝言を残したね。僕が長期で家を空けるときは、どういうわけか、ビデオレターよりも君はあれを好んでいたと母さんから……」

「嘘を言われては困りますわ！　そこまでわかっていながら、どうしてあそこにあれを入れた記憶がございませんの？　兄さんの記憶も嘘なんでしょう？　わたくしが兄さんを慕っていたなんてことありませんもの！　段々わかってきましたわ！」

混乱した不二子が髪を振り乱してわめく。困ったように兄は眉を寄せたが、その口からは通り一遍の慰めの言葉しか出てこない。

「怒らないで、不二子。僕が悪かった」

「なんでそんな心のこもっていない言葉が言えますの！」

「それは僕が決まった応答しかできないからだよ」

兄は言った。死霊は正直なのだ。

「そうじゃないですわ！　不安になっていることがわかりませんの？　兄様の過去がわたくしの信じていたものと違っていたら、わたくしがずっと信じてきたものは……！」

必死に不二子は訴えるが、それでも兄は動じない。

「泣かないで、不二子」

「だって、兄様は情けなくて、弱くて仕事を投げ出した恥知らずなんじゃなかったんですの？　それが、あんな仕掛けをしていたってことは……」

「不二子。僕は、情けなくて、弱くて仕事を投げ出した恥知らずでロリコンだよ」

「もう十分ですわ！　一体何が本当の……」

「きゃあああ！」

　どんがらがっしゃん。

　不二子の背後でいきなりの悲鳴と何かが崩れる音。驚いて振り返ると、そこには棚から落ちてきた本に埋もれて転がったけーながいた。

「曽我けーな！」

　不二子が声をあげると、けーなは「えへへへ……」と笑いながら立ち上がった。

「えへへ、じゃありませんわ！　どうやってここに入り込んだんですの！　いつから！」

　不二子が大声をあげると、けーなは怯えたように身体をびくりとさせたが、すぐに目を潤ませて、懇願するように両手を組んで不二子の前にひざまずいた。

「すいません！　おにぎりが穴に落ちて、転がるのを追いかけていたらここに出てしまったんです！　お邪魔するつもりはなかったんですが……」

　不二子はあきれて頭を掻く。

「あなたねぇ……そんな見え透いた嘘が……」

しかし、次の瞬間、不二子は視界の端に汚れたおにぎりをとらえた。明らかにここに到る階段を転がってきたとおぼしき埃にまみれている。それを見たら、不二子は怒るのも馬鹿らしくなってしまった。

「……まぁよろしくてよ。そういえば、あなた、この場所を知っていましたものね。さぁ、わかれば出ていって。わたくしは、忙し……」

不二子がそう言って手を振るが、けーなは素早く水晶玉にかじりつく。

「あ、あーちゃんだ！　おーい！」

「あーちゃんだ、じゃないですわよ！　ほら、もう離れて……」

「ねぇ、お姉様！」

けーなはいきなりそう言って不二子を見上げた。

「な、なんですの……。それに、お姉様？」

「そうです。お姉様と呼ばせてください！　ああ、失礼かもしれないけれど、ずっとこの間のことを謝ろうと思っていたんです！」

妙に真剣な目でけーなは言った。そのペースにいきなり不二子は飲まれてしまう。

「ちょ、ちょっと……」

「いいえ、いいんです！　もし許してもらえなくても！　でも、あーちゃんのことだけは許してあげてください！　そうやってあーちゃんのことを見ていたってことは、恨みに思っていたんでしょう？」

「そ、りゃあ、まぁ……そうですわ。そうに決まってますわ」

「ええ、そうでしょう！　許してもらえないかもしれません。でも、あーちゃんも悪気はないんです。ねぇ、一緒に追いかけてくれませんか、あーちゃんたちを！」
「お、追いかける……？」
　不二子には思いつかなかった考えだった。
「そうです！　行きましょう、お姉様！」
　けーなは繰り返した。まったくもって理屈が通っていないが、不二子の気持ちは揺らいだ。自分でもきっと行きたかったには違いない。そして、それがけーなから懇願されたから、となれば動きやすい。
「え、ええ……そういうことなら……」
　小さく不二子が言うと、けーなは、パン、と手を叩いた。
「良かった！　じゃあ、すぐに支度しましょう！　お米と飯ごうを持ってきますね！　裏の林の告白の木で待っていてください！　ああ、良かった！　これでお姉様のお兄様のこともわかるかもしれませんね！」
　――え？　ちょっと……。
　不二子はその言葉の真意を問おうとするが、けーなはすでに走り出した後だった。

○

「行かないと言ったら、行かない。ここから学園に帰って生徒会に報告するんだ」

阿九斗は頑固(がんこ)だった。野外用コンロにかけたヤカンでお茶を飲みながら、栄子に強い口調で言った。すでにテントを張って休む態勢になっている。

栄子はあきらめたようにも見えないが、しまいには阿九斗は栄子を脅(おど)すようなことまで言ってのけると、完全にすねたのか黙(だま)り込んだ。

あたりが暗くなって、もう寝(ね)ようという頃(ころ)になって、阿九斗はころねを呼びつけて、一晩中、栄子を見張っていてくれと頼(たの)んでから自分のテントに潜(もぐ)り込んだ。テントは一人用のものをみっつ張っている。阿九斗、ヒロシ、そしてころねと栄子のものだ。

——どうにもああいう女の子は苦手なんだよなぁ……。

頭の中でぼやいているうちに眠(ねむ)りに落ちていた。

しかし、早朝に目覚めてみると、妙にあたりがしんとしていることに気づいた。テントから抜(ぬ)け出してみると、ヒロシのテントがなくなっていた。

——まさか……！

まだ張られていた栄子のテントの中に入ってみると、ころねが何者かと抱(だ)き合っているような格好をしていた。ただし、ころねは一人で、しかも完全にその動きを止めている。シュールな彫刻(ちょうこく)のようだ。

「やられた……」

ころねが機能停止させられたのは確実だった。栄子がうまいこと言ってころねに抱きつき、人造人間のスイッチになっている尻尾(しっぽ)を引っ張ったのだろう。

阿九斗はころねが起動したときに倒れないように、固まっているころねに抱きつき、彼女のスカートの中に手を入れて尻尾をまさぐった。

——これがどうにも恥ずかしくて嫌なんだよなぁ……。

柔らかい尻にはなるべく触れないようにして、腰のあたりにまで無理をして手を伸ばすと、丸い尻尾が指に触れた。引っ張ると、ブン、と音がして、ころねの瞳に光が戻る。

「さあ早く、その特製人形焼きを……あれ？　照屋栄子さんじゃないですね」

ころねが無表情のままで驚きを口にした。

「機能を止められてたんだよ」

「それは困りました。では、魔術を使って彼女と入れ替わることでこの身体を弄ぼうとしたわけではないんですね」

「……どこからそういう発想になるんだよ。そういう冗談はいいから」

阿九斗はころねの身体を引きはがす。

「ということは彼女は……」

ころねはテント内を見回す。小さめのリュックの上に手紙が置かれていた。阿九斗が拾い上げてみると、それはヒロシからのものだった。

《兄貴が周囲の者を試そうとして〝帰る〟と発言していたと気づきました。あっしらだけで必ずや宝を見つけてきます》

阿九斗は頭を抱えた。

「見事に栄子に騙されたな……」

「馬鹿ですね」

ころねが断言した。

こうなると人質をとられたのと同じ事だ。小さめのリュックを開けると、阿九斗の分の食料と水が入っている。阿九斗はそれを背負って外に出てテントをたたみはじめた。

「追うのですか？」

ころねが聞くと、阿九斗はうなずいた。

「まぁ仕方ないさ。騎士用装備研究所だったね。どこかわかるかい？」

「過去の資料にあります」

「それじゃあ行こう」

阿九斗は歩き出した。向こうは数時間先行しているだろうし、歩行速度にそれほど差があるとは思えないから、きっちりその時間分は到着が遅れることになるだろう。

「また宝を守っている奴がいるに決まってるよな」

「でしょうね」

「あの子は僕をどうしても魔王にしたいらしいね。運命だなんだって言ってるけどさ」

「周囲の期待があなたには寄せられているということです」

「冗談はやめてくれ」
　ころねがいつもの調子で言ったので、阿九斗はそれを冗談と思ったのだが、ころねはそれを否定した。
「いえ、冗談ではありません。そういうのも期待の一種です」
「僕は魔王とかになりたくないんだけど」
「あなたがなりたいかどうかと関係ないこともあります。それが自我の問題ということでしょう」
「話を難しくされても困る。僕は世界を平和にしようと思ってるし、現状でそれなりにうまくいってると思ってるんだよ」
「かなりの人間がそう考えていると思いますよ。でもそれでもうまくいかない。それが人間です。人造人間は皆（みな）それをうらやましがっていますよ」
「うまくいかないことを？」
「そうです。そんなものです」
「ふうん……」
　それから二人はかなりの時間を無言で歩いた。整備されていない山道を抜けると、やがて捨てられた街が見えてきた。戦火で焼け落ちたのをそのままにしてある。街全体が廃墟（はいきょ）というのは阿九斗も見たことがなかったため、その不気味さには入ることを躊躇（ちゅうちょ）させるものがあった。
「焼け落ちた街をどうしてそのままにしていたのかな？」

「予算がなかったというのが正解のようです。学園の敷地ですから学園の予算でなんとかすることになっていますので」
「それで放置されてたってわけか」
阿九斗は街の中央通りに足を踏み入れた。戦火そのものは凄まじかったようだが、人が死んだ痕跡のようなものは見られなかったので、少し気が楽になった。
「住民が避難した後でふたつの軍勢が激突したのです」
ころねが解説する。
「魔王の軍勢は騎士団の研究所があるこの街を狙っていたので、騎士団が住民を避難させ、これから目指す建物を拠点に戦ったとか」
「そうだったのか」
阿九斗がそう答えたとき、地震のような揺れと、ずんと身体に響く音が聞こえてきた。
「嫌な予感の通りかな」
阿九斗は荷物を降ろして走り出した。ころねがついてきて位置を説明する。
「もう気づいているとは思いますが、音の場所と騎士用装備研究所は一致しています」
「わかってる」
角を曲がって大通りに出る。そこから見える広場の中央にそれはあった。半分倒壊した五階建てのビルだ。古い建物らしく、今では貴重なものとなったコンクリートが使われている。屋根のあるエントランスが

崩（くず）れ落ちており、そこからホールであろう広い空間が見える。そこに怪物（かいぶつ）がいた。
――冗談（じょうだん）じゃないな……。
阿九斗は思わずそうつぶやきそうになってしまった。ちらちらとその姿が見えるのは、鉄の巨人（きょじん）だ。身長は三メートルほどもあるだろうか。巨大な全身鎧（よろい）をまとった人形（ひとがた）のそれが蠢（うごめ）いている。その体表に時折光がはしるのは攻撃（こうげき）を受けているからだと理解できたのは、栄子の気合いが聞こえてきたからだった。
「きえぇい！」
それと同時に金属音が響き、鎧の表面に火花が散る。その度（たび）に栄子の姿がよぎった。巨人の周囲を飛び回り、短刀による攻撃を加えているらしい。
――まったく効いていないじゃないか。
阿九斗はさすがにこの状況（じょうきょう）に呆然（ぼうぜん）としてしまう。正直解決策はまったく思いつかない。だが、助けないわけにはいかなかった。
「どうすりゃいいんだ、あんな化け物……」
誰につくとでもなく悪態をつくと、阿九斗は詠唱銃（えいしょうじゅう）を構えた。と、不意に巨人がその動きを止めた。
――え？
まさか声をあげたくらいで、と阿九斗は思ったが、どうやら巨人が阿九斗に気づいたのは確実だった。その巨人はくるりと振（ふ）り返ると、大きく崩れた入り口に向かって歩を進めた。入り口には大きな身体が余

る、とでも言いたげに、肩(かた)で入り口を押(お)し広げるようにして外に出てきた。身体に落ちてくるコンクリート片をものともせず、土煙(つちけむり)をまき散らしながら歩を進める。

一歩ごとに地響(じひび)きを立てて歩いてくる巨人の姿には、さすがに恐怖(きょうふ)を感じさせるものがあった。

身長三メートルの全身鎧。右手の籠手(こて)だけが異常に大きい。その右手には、人間の身長ほどもある斧(おの)が握(にぎ)られている。

——冗談じゃない、こんな化け物とやってられるか！　せめて動きを止めて、その隙(すき)に二人が逃(に)げられるようにできれば……！

阿九斗は詠唱銃を撃(う)った。当然ながら鎧の隙間を狙う。可動域を作るため膝(ひざ)の裏側には空間がある。巨人のフェイスガードの奥(おく)は暗くて見えないため中に何が入っているのかは確認できないが、中身が人間であれ機械であれ、膝の裏を攻撃されれば足にダメージが残ることは確実だ。

弾丸(だんがん)を操ってそこに命中するように変化させる。が、それが命中するかと見えた瞬間(しゅんかん)、巨人はその膝をずらして膝の前部のプレートで弾丸を受け止めている。

「！」

命中の直前に着弾位置をずらすという速くて繊細(せんさい)な動きに阿九斗は驚愕(きょうがく)する。

——この巨体でそれだけ感覚が鋭敏(えいびん)だってことなのか？

そういえば先ほどは小さなつぶやきも聞き取られた。となると相手の防御を崩すのは想像していたよりも難しいだろう。

「きぇええ！」

と、再び気合いが聞こえてきた。栄子が建物から飛び出してきて、隙有りとばかりに背後から巨人に斬りかかったのだ。だが、もちろんその攻撃を察しない巨人ではない。栄子も鎧の隙間を狙っているようだが、やはり絶妙にポイントをずらされている。

巨人はうっとうしそうに斧を振るった。栄子はそれを跳びすさって簡単にかわす。攻撃においては巨人はそれほどの繊細さを発揮できないようだった。次々と栄子へ斧を振るったが、彼女は跳ね回ってやはりこれをかわしている。

相手の攻撃が簡単にかわせるだけに、栄子も逃げるという考えが浮かばないらしい。こうなったら彼女を気絶させて運んで逃げるか、と阿九斗は考えたが、そのアイデアはすぐに意味のないものになってしまった。

建物の中から、もう一人駆けだしてきた者があった。

ヒロシだった。何をどう思いこんでいるのか、現代の騎士がよく町中で使っている電磁警棒を手に、巨人に討ちかかろうとしていたのだ。

「いやぁあああ！」

――ああ、まいったな……ヒロシも逃げないのか。

阿九斗は困惑しつつもとりあえず巨人の気を逸らそうと連続して銃弾を撃ち込む。

巨人は銃弾をうっとうしがったのか、ヒロシを脅威でないと判断したのか、策通りに阿九斗の方に顔を向けた。

しかし、巨人は大股で歩き出し、一気にその前進のスピードを上げた。阿九斗は逃げようとするが、相手の大きな歩幅が生み出す速度には走ったところで対抗できそうもない。今度は阿九斗が進退窮まった。

——ああ、もう本当に冗談じゃないよ。

巨人が眼前に迫ってくる。阿九斗は焦りながらも脳内で対策を練った。巨人の攻撃手段は斧だ。栄子は軽々とかわしているが、いくら巨人の斧の動きが遅いとはいえ、それは狙いを定めるまでのことだ。動き出してからは轟音とともに刃が討ち下ろされているし、身体を少しずらした程度でかわせる大きさでもない。結局、阿九斗にはそれをかわすだけの素早さはない。

——それなら……。

阿九斗は一番威力のある爆発を生み出す弾を詠唱銃に込めた。マナをコントロールして最大の爆発を引き出せば、巨人を吹き飛ばすことはできるだろう。

詠唱銃を構える。狙いはつけなかった。どうせ相手は装甲で受け止めるつもりだろう。

巨人は前進してくる勢いのまま斧を振り上げた。空気を切り裂く激しい音が響く。

——！

阿九斗は引き金を引いた。

この学園においては喧嘩程度にしか使えない弾頭だ。だが、阿九斗は、その弾丸が着弾する瞬間に大気中のマナを注ぎ込んだ。爆発は一気に通常の数十倍に拡大する。

巨人の胸で爆発音とともに光球がふくれあがった。

その光は巨体を呑み込んで拡がる。

衝撃波が周囲に拡散、振動の波が一瞬、廃墟の街を震わせた。

以前に教室を吹き飛ばしたとき、阿九斗はその反省から自分の起こした爆発の圧力を調べたことがある。その結果、一センチ当たり五キロ〜七キロ。何も防備がなければ爆圧だけで瀕死となりかねない。空中での爆発だから拡散するとはいえ、それを胸元に受ければ、いかな巨人とて大地に倒れる…… はずだった。

——なっ!

阿九斗は絶句した。

光球が消えた。巨人は無傷でそこにいた。熱せられた金属から発する煙をその鎧からたなびかせているだけだ。

「しまっ……」

阿九斗はうろたえた。

巨人はすでに再度、斧を振り上げている。

完全に逃げ遅れていた。

斧が唸(うな)りを上げて振り下ろされた。その軌道(きどう)は完全に阿九斗をとらえている。

唸りを上げた斧が阿九斗を襲(おそ)う。

そして、肉が鋼鉄にぶつかったときの湿(しめ)った炸裂音(さくれつおん)が響いた。

「兄貴！」

巨人の背中に向かって走っていたヒロシが悲鳴をあげた。

「きゃああ！」

巨人の背中を見上げていた栄子までもが声を漏(も)らしている。

しかし——

——ああ、そうか、こういうことか。得意不得意ってのはあるものだな。先輩(せんぱい)の言うことは聞いておくべきってことか。

阿九斗は改めてそう感じていた。

足下に詠唱銃(えいしょうじゅう)を投げ出していた。自由になった手で、人間一人分はある斧を受け止めていた。額の上で掌(てのひら)を合わせ、それで刃を挟(はさ)み込んでいる。

——畜生(ちくしょう)。僕は冷静なタイプだから、こんな力業(ちからわざ)が得意だなんて考えやしないさ。

服の上からでもわかるくらい腕(うで)に筋肉が盛り上がっている。筋肉にマナを注ぎ込んでいるのだ。そのおかげで力が何倍にもなっている。

――しかも、他の魔術（まじゅつ）と違（ちが）って、力を完全にコントロールできている自覚がある！

阿九斗は目を上げた。

巨人は明らかに狼狽（ろうばい）していた。斧を引こうとも押（お）そうとも動かないため、激しく身体を揺（ゆ）すっていた。いくら阿九斗が力が強くとも、体重が変化しているわけではない。つまり巨人は阿九斗の体重分を持ち上げるだけの力があればいいはずなのだが、なんと阿九斗は足を地面に食い込ませ、その脚力（きゃくりょく）で大地を挟み込んでいた。

「抵抗（ていこう）しないでくれよ……」

阿九斗はそう言いながら、斧をひねった。巨人はそれを戻（もど）そうと力を込めてくる。阿九斗と巨人との力比べの様相だ。

しかし、勝負はすぐについた。巨人は斧を放そうとしなかったため、斧がひねられるのにつれて腕をねじられ、ついには身体ごと横合いに倒れてしまう。

ズン、という地響（じひび）きが拡（ひろ）がった。ヒロシなどは一瞬、跳（と）び上がっている。

阿九斗はその斧を巨人の手から取り上げた。空中に投げ上げて一回転させ、柄（え）の部分を受け止めると、軽々と振り回す。

巨人は言葉を発しなかったが、鈍（にぶ）い動きで阿九斗から遠ざかるように地面を這（は）い、そこで起きあがると、阿九斗たちに背を向けて歩き出した。逃げた、というよりは、潔く負けを認めたとしか思えない動きだった。

――宝を守ってる奴らにそれぞれ性格があるっていうのはどういうことだろう？

阿九斗はそこが気になった。が、考えを妨害するかのようにヒロシが阿九斗に駆け寄ってきて声をあげる。

「すげぇ！　さすが兄貴だ！」

阿九斗は斧を投げ出すと、さすがに今度ばかりはヒロシに文句を言う。

「あのな、さすが、じゃないよ。どうしてわざわざ危険なところに行こうとするんだよ」

言われたヒロシは、どうして文句を言われているのかわかっていない様子だった。

「え？　だって、あっしは兄貴の一番弟子として、強くならなくちゃいけないと思って」

「強くなるってなんだよ。喧嘩したって大して意味なんかないじゃないか。今だって、ろくな事はないしさ」

「そりゃ、兄貴が強いから言えるんすよ！　やっぱり少しは弱い者の気持ちも考えて欲しいっすよ！」

――逆に僕が怒られるのか。

阿九斗は理不尽なものを感じるが、ヒロシもそれほど深刻に怒っているわけでもなさそうなので、何も言わないことにした。

「わかったよ。だけど、僕だって、強いとか弱いとかよくわからないんだ」

阿九斗は肩をすくめて言い、栄子の姿を探した。彼女はヒロシ以上に興奮した顔で阿九斗を見ていた。

「やっぱり来てくれたんだね！」

駆け寄ってきた栄子を無視して、阿九斗は彼女とすれ違い、研究所へと歩を進める。

「どちらにしろ僕を巻き込もうってんだろ？　だったら行けるところまでは行ってやるさ。でも、それは僕の良心を人質にとってるんだってことを忘れないで欲しいな」

「何だよ、善人ぶってさ！　あんた、絶対、そんな善人であるはずがないじゃないさ！」

怒った栄子が憎まれ口を利いてきた。

――だから、こういうタイプの女の子は……。

なかば崩れた研究所に足を踏み入れる。そこで何が研究されていたのかにわずかな興味はあったが、完全に引き払われた後だった。ホールから各部屋を回ってみるが、どこも完全に空で、唯一、調度品らしきものが見つかったのが一番奥の部屋だった。

――そういえば、奥の棚としか言ってなかったな。

スチールの書類棚だけががらんとした部屋に残されていた。引き出しを片端から開けてみるが、見つかったのはメモ帳サイズのプレートだった。拾い上げてみると、それは古い電子遊具で、撮影した写真をプレートに表示し、そこに付属のペンで落書きができるというものだった。

――またおもちゃか……。

不思議な感慨を抱きながら、阿九斗はプレートを起動させてみた。そこに表示されたのは、木々に覆われた洞窟の入り口だった。

洞窟の写真の脇に書き込まれた文字がある。

《奥の祠の裏。みっつが揃ったなら、このプレートにより掌を撮影し認証させること》

阿九斗はプレートをポケットに入れた。
――どうしてなんだろうな。ひどく悲しいものを感じる。ただの宝探しゲームとも思えないんだよなあ……。

○

「〝地下水見つけちゃいました〟！」
と、ころねがポシェットから出した二本の折れ曲がった金属棒を高く掲げた。
「これで地下水の流れを測定できます」
ころねはそれを両手に握って先頭に立って歩き出す。金属棒はふらふらと左右に揺れていたが、一定の距離を前進するとある方向をぴたりと指す。ころねはマナを感知するのだ、と主張していたが、どうにもうさんくさい。
「結構長いこと森の中を彷徨ってるんだけど、大丈夫かい？」
阿九斗が心配になって聞くが、ころねはうなずいた。
「問題ありません。地下水の流れに沿っていけばいいのです」
あの写真の場所に見覚えはないが、森の奥にあると噂の鍾乳洞ではないか、とヒロシが言っていたのだ。

「鍾乳洞は地下水がないとできませんから、地図の印がある地区で地下水の流れが表に出ているところを探せば、そこが鍾乳洞なんす」
　ヒロシもそう請(う)け合った。
「その鍾乳洞はどうして噂になってるんだい？」
「温泉がわいているって話です。入りに行った連中も、見つけられたり見つけられなかったりするんで、幻(まぼろし)の温泉として噂になってます」
「行った人間が場所を特定していてもいいのに。何度も入りたくなるようなところじゃないってこと？」
「そうなんでしょうね。でも化け物が出るとかいう噂はないですよ。もしかしたら森の中の方が危ないくらいっす」
「化け物が出ないと言っても、番人はいるだろうね」
「兄貴、どうしてでやんす？」
「そりゃ考えてもみてよ。地下納骨堂に番人がいるのがおかしいんだ」
「そうか……。それじゃ、地図が見つかってから、番人が……」
　ヒロシが不安げな表情になる。
「どっちにしろ僕と無関係なところで勝手に事は動いてるんだよ。また恨(うら)まれるんだろうなぁ、僕の行動も」
　阿九斗がぼやくと、「あ」と、ころねが声をあげた。

「どうしたの？」

「見つかりました」

ころねが指し示す先に、あの写真と同じ光景があった。木々に埋もれかかった洞窟の入り口だ。

「まさか見つかるとはね」

阿九斗が思わずそう言うと、ころねは阿九斗の眼前に金属棒を突き出して見せた。

「この〝地下水見つけちゃいました〟は配管工事にも使われている信頼の高い魔術道具なんです」

「ああそうなんだ……」

適当に答えておいて、阿九斗は荷物を降ろす。ヒロシを呼んでその手にマナの明かりを灯してもらう。それから栄子の方を見た。もちろんついてくる気満々の様子だ。阿九斗はすでにあきらめている。

「入ろう」

そう指示して、自分が先頭になって鍾乳洞に足を踏み入れる。入り口は屈まないと入れないほどの大きさだが、すぐに天井は高くなった。足下の岩に湿り気があってぬめる。やはり湿度が高く、水が流れているらしい。

「こりゃ、なかなかすごい光景っすね……」

ヒロシが感慨の声をあげた。彼が照らす先はバス一台分がちょうど通れるくらいの横穴だ。その壁全体が妖しく光っている。天井から染みた水が壁面を伝っているのだ。下には溶けた岩が路上に落としたアイスクリームのように溜まっている。

「道は一本しかないのか」
さらに前進する。どうやら少し道は下っているらしい。その先に暗くなって光が届かない穴があるかと見えたが、そのとば口まで行ってみると、そこが広いホールになっていることがわかった。
ヒロシが明かりを強くしたことで、その全貌が見えた。体育館ほどの大きさがある。天井からはつららのような鍾乳石がいくつも垂れ下がり、床にも蟻塚のような岩の突起が大小取り混ぜてそびえている。奥には皿をいくつも投げ出したような岩のくぼみが並んでいて、そこに水が溜まっている。小さなプールをいくつも並べたかのようだ。
壁沿いにそのホールを回ってみる。壁に窪みはあるものの、どこにも横穴はない。すると、この鍾乳洞はホールで行き止まりということになるのだが。
――行き止まりなのかな？　それにしては祠がないし……。って、ことは、プールが意外と深くて、そこから奥があるのかもしれない。
一番奥のプールのほとりまで行き、阿九斗はかがみ込んでみる。すると、思った通り、行き止まりと見えた壁はえぐれていて、水面から数十センチ上に空間があった。プールをくぐっていけば、さらに奥に行けるということだ。
「泳いでいく羽目になるな」
プールに手を入れてみる。温かかった。噂に違わず温泉ということらしい。
阿九斗が言うと、ヒロシは怖じ気づいた。

「いやあ、ちょっと怖いっすよ。ここに入るのは」

「そうだよなぁ……確かに危険だし。じゃあ、そこでころねと待っててくれるかい」

阿九斗は服を脱いで下着だけになると、ヒロシから光球を受け取った。ここで余計なことを言うと、またヒロシが「強くなるために」などと意地になりかねないので、何も言わずにそれを手にプールに入る。水は意外に浅い。屈んで頭だけ上に出しながら前進した。奥はそれほど深くはなかった。数メートルも前進するとすぐにまた天井がひらけて、もう一つのホールが出現した。

ホールは先ほどの場所よりもかなり広い。しかも天井からは別の明かりが射し込んできている。どうやら天井部分が完全に溶解し、そこから森の一部が見えているらしい。

阿九斗が浸かっている温泉も一部は鍾乳石だが、一部は岩がごつごつとしたものに変わっており、ここから先は森の温泉場といった風情だ。いくつか温泉が岩を隔てて連なっているのだろう。動物も傷を癒しに入ってきそうな場所だ。

——なんか落ち着くな……。ゆっくりしている場合じゃないが……。

阿九斗がそう考え、宝の隠し場所である祠を探そうと腰をあげようとしたところ、いきなり後ろから何者かに抱きつかれた。

「うわっ!」

さすがに阿九斗もそこまで油断していたわけではない。襲ってきたのは栄子だった。栄子の忍び足が上手かったせいもあるが、阿九斗としては彼女の行動をあまり意識したくなかったということが大きい。

阿九斗の背中に柔(やわ)らかいものが押(お)し当てられる。阿九斗も裸(はだか)なので、肌(はだ)と肌がしっかりと吸い付く感覚が背中にある。

「ちょ……」

阿九斗は逃(に)げようとするが、背後から抱きすくめられてしまう。

「ねぇ、ようやく二人きりだよ。もっと落ち着いてくれてもいいじゃないさ」

栄子は腕(うで)をしっかりと阿九斗の身体に回している。まるで幽霊(ゆうれい)が犠牲者(ぎせいしゃ)を引きずり込むかのように阿九斗をずるずると水中へ誘(さそ)う。

「わかった。落ち着くから離(はな)れようよ」

「嫌(いや)だよ。離れたら逃げるじゃないさ」

「そりゃそうだろう。だって君、服を脱いでいるじゃないか」

「服を着て温泉に入る人があるわけないでしょうに」

「じゃあ、あの場で服を脱いで追ってきたってわけ？」

「あたいは素早いからね。あの子も気づいてなかったよ。あたいはずっとこのチャンスを狙(ねら)ってたんだ」

妖しい声を栄子は出した。

「チャンス？　僕を殺そうって……」



「違うよ！　あんた、心底からわかっていないんだね」
「何をさ」
「あたいがあんたのことを好きだって言ってるんだよ？　こういうことくらいしてあげても当然じゃないか」
栄子は阿九斗に身体をすり寄せ、阿九斗の手を背後から握（にぎ）ると自分の身体の方に誘導（ゆうどう）しようと引き寄せる。
「こ、こういうこと……？」
阿九斗の声がうわずる。
「そりゃあ、女に言わせないでおくれよ」
栄子がそう言ったとき、阿九斗の手に乳房（ちぶさ）が押しつけられた。
阿九斗が指を突（つ）っ張らせていると、栄子はその手を段々と下にずらしていく。阿九斗の手は腹を滑（すべ）り、そのさらに下へ……。

○

――修行というのはしておくべきだな。

絢子は今更のようにその必要性をひしひしと感じていた。まだ地下納骨堂から廃墟の街へと移動したまではその痕跡を追えた。だが、森に入ってからは阿九斗一行の追跡に失敗している。

一流の隠密なら易々と出来ねばならぬことだが、邪念が過ぎて焦っていたのか……。

絢子の言う〝邪念〟とは、道中で阿九斗がその同行した謎の女子生徒とやらといかがわしいことをしていないかという妄想のことである。追跡に集中しているうちはいいのだが、ふと気がゆるむと、邪念が表に出てきて「うわぁああ」とか一人で声をあげてしまっている。さらにはその声を誰かに聞かれなかったかと周囲を確認してしまう始末だ。

——ええい、落ち着け、服部絢子。何よりその女子生徒とやらが照屋栄子ならば、彼が危険かもしれないのだ。

「とはいえ、見失ってしまってはなぁ……」

絢子は森を彷徨う。一度、森から出て道を再確認しようかと思ったが、そのとき、森の中に泉がわいているのを見つけた。飲めるかを確認するために指をつけてみると、適度に温かい。

——そういえば、これで都合三日ほど入浴していないな。少し落ち着かせてもらうとするか。

荷物を降ろすと、周囲を確認してから服を脱ぐ。脱いだ服を順番に畳み、頭の上に置き、そこに鞘に収めた刀を乗せて蓋をすると、下緒と呼ばれる紐で頭にくくりつけた。入浴中に襲われたときの対策として癖になっている所作だった。

誰も見ていないのをいいことに、裸身で大きく伸びをしてから湯に足から浸かる。

「ふう……」
上気した顔で息を吐き出し、身体を手でこする。
——体術の修行のおかげでかなりごつごつした身体になっているな。けーなみたいにもう少しぷよぷよした身体の方が好かれるだろうか……。
そう考えて、慌てて首を横に振る。
——いやいや、いかんいかん。常時鍛えていることが戦よりも政治を選んだ我が一族が惰弱と後ろ指をさされないための務め！
「しかしなぁ……」
顎から口までを湯につけてぶくぶくとやっていた絢子だったが、いきなり人の気配を感じた。そのまま音を立てずに口を上に出すと、腰をかがめたままで気配を探る。
すると「うわっ」という悲鳴に続いてばしゃばしゃと水音が響く。
——二人か。
絢子は音のした方に密かに移動する。岩の向こうだ。声が聞こえてくる。
「ねぇ、ようやく二人きりだよ。もっと落ち着いてくれてもいいじゃないさ」
——なっ！
その甘い声から男女の睦言であるとは絢子にも予測できた。
——となると、ここは引き下がったほうがいいのか……。

湯あたりしたわけでもないのに顔を真っ赤にして絢子はその場を離（はな）れようとしたが、どうしてもその先の事が気になって聞き耳を立ててしまう。

「わかった。落ち着くから離れようよ」

「嫌（いや）だよ。離れたら逃（に）げるじゃないさ」

「そりゃそうだろう。だって君、服を脱いでいるじゃないか」

——この真面目（まじめ）なくせにぶっきらぼうな口調……そしてこの声は……！

絢子は、その声をはっきりと聞いて、さすがに驚愕（きょうがく）した。刀を抜（ぬ）いてその刀身を岩の向こうに僅（わず）かに突き出し、それを鏡にして向こうの様子をうかがう。

——！

裸（はだか）の阿九斗が背後から女に抱（だ）きすくめられていた。阿九斗は身をよじっているが、それ以上に激しく女は身体を阿九斗にこすりつけている。

恥（は）ずかしさと混乱と怒（いか）りとでわけがわからなくなった絢子は、抜いた刀を握（にぎ）った手首を返して刃（やいば）を立てると、瞬時（しゅんじ）に空中に躍（おど）り上がっていた。

「いやぁあああああ！」

○

抵抗すればできないことはなかったが、阿九斗にはその加減というものがわからない。下手をすれば栄子を吹き飛ばしてしまいかねなかった。だが、それよりも栄子の機嫌を損ねて厄介なことになるのも面倒だ、とやや落ち着いてみれば、そう思える。

――それに、このまま調子を合わせていればもしかしたら何か情報を引き出せるかもしれない……。とはいえ、そこまで経験豊かでもないし、落ち着いて行動できないし、それこそ最後までしてしまうわけには……。

阿九斗はさすがに栄子が促すようには手を動かさず、彼女の腹に手を押し当てた位置で我慢している。なんとか会話でその場をつないでいくしかない。

「ちょっと待って。君は仕えている主人と僕のどちらかを選ぶみたいなことを言っていたじゃないか」

「別にどっちともそうなったっていいじゃないさ」

「それは僕にとっては嫌なことじゃないか」

「そんな度量の小さいことを言うじゃないよ」

「違うよ。相手に興味があるのさ。どの程度の男なのかってね」

阿九斗にしてみれば、栄子のペースに合わせてかなり格好をつけての発言だったが、彼女もこれには乗ってきた。

「なんだよ、そういう感情ならわからないでもないさ。あの人は……」

栄子がそう言いかけたとき、上空から声が降ってきた。

「いやぁあああああ！」
阿九斗はそちらを見上げる。
全裸(ぜんら)で頭の上に服を載(の)せただけの姿の絢子が落ちてきた。足を開き、刀を頭上に構えていた。
「うわ！　それは駄目(だめ)だって……！」
阿九斗は思わずそう声をあげていた。
すると絢子もようやく自分の姿に気づいたらしい。
「ひ、ひぃいやぁああ！」
空中で器用に手足を折りたたんで丸くなると、阿九斗と栄子のすぐ脇(わき)に落下した。ドボン、と水柱が上がる。阿九斗と栄子はその身体を離して距離(きょり)をとった。
「は、服部さん……どうして……」
阿九斗が聞くと、波の中心から顔と刀だけ出した絢子が、顔を凄(すさ)まじく真っ赤にしながら、それでも鋭(するど)い声をあげる。
「どうしても何もあるか！　そいつは照屋栄子！　公儀隠密(こうぎおんみつ)だ！」
「公儀？」
阿九斗が栄子を見る。栄子はその身体を隠(かく)そうともせず仁王(におう)立ちになっていた。阿九斗が目をそらすと、彼女はくすくすと笑った。
「そうだよ。あんただって薄々(うすうす)とは気づいていただろうにさ」

「ああ。公儀ってことまではわからなかったけどね。つまりは、政府に仕えているってことか。政府の偉いさんがこの件にからんでいると？」
「その通り！　彼はあんたが運命に立ち向かえる男かどうか知りたがっていたよ。そのように促すためにあたいを遣わしたんだけどさ。でも、あんた、今、危ない分岐点にいるんだよ。あたいが何とかしてあげないと、例の宝を手に入れた時点で死んじゃうかも」
「死ぬ？」
「そうだよ。資格がいるんだ。でも、今のあんたじゃ足りない。あたいの見たところね」
「そんな資格審査みたいなことを僕が受けることはない。だからどうでもいい」
「いつまでもそんなことを言ってるんじゃないよ！　じゃあ事を単純にしてあげようか。あたいを選びなよ。あたいを好いてくれれば、あたいはあんたを男にしてあげる」
　栄子がそう言い切った。
　と、そこに絢子が口を挟む。
「待て！　栄子の言っていることはわからんが、栄子が仕えているのは帝国公安委員会なのは確実だ！　騎士団の統括組織だが、黒魔術師討伐の急進派だぞ！」
　すると栄子が顔に怒りを露わにした。
「急進派とはあきれるよ！　誰もが自由に魔術を使おうなんて考えを許したら帝国が崩壊するよ！　なんでわからないのさ！」

絢子も怒鳴(どな)り返す。

「それを急進派というんじゃないか！　照屋の家は急ぎすぎる！　殺人技にばかりうつつを抜(ぬ)かして！」

「帝国内閣に仕えて戦を忘れた惰弱(だじゃく)な一族だろうに、服部家はさ！」

「黙(だま)れ！　ともかく政府の法に従えば、紗伊阿九斗は観察する、となっているだけだ。介入(かいにゅう)して魔王(まおう)の遺物に触(ふ)れさせようとするとは何事だ！」

「公安委員会だって法には従ってるさ！　それにここまで来たのは紗伊阿九斗の自由意志だってのは間(ま)違(ちが)いないんだ！」

「ならば、この場を去れ！　彼に近寄るな！」

絢子がそう怒鳴ると、栄子はいきなり余裕(よゆう)の表情になる。

「はーん、そうか。そういうことなら……」

栄子は再び阿九斗にその身体を寄せた。

「ねぇ、この子を選ぶ？　あたいを選ぶ？」

「な？」

さすがに阿九斗も戸惑(とまど)った。

「あたいら隠密(おんみつ)はさ、主人のためだけに働くんだよ。今、絢子はあんたのために働こうとしているわけだけど、あんたがあたいのことを受け入れて、絢子のことを拒否(きょひ)すれば、絢子はあたいのすることにケチを付け

る権利を失うってわけさ」
栄子は阿九斗の耳元に唇（くちびる）を寄せ、絢子にも聞こえるような声でそう言った。理屈（りくつ）は通っていないような気もするが、どうやら隠密というのはそういうものらしいし、ともかく絢子にはそれで通じたらしいことは絢子の様子を見ればわかった。悔（くや）しそうに唇を噛（か）んで阿九斗を見据（みす）えている。
――なんだかわからないが困ったぞ……。選ぶったって、服部さんは僕のことをいろいろと怒（おこ）ってるだろうしな……。僕が主人とかあり得ないだろうに。
阿九斗は困惑（こんわく）するが、絢子は返事を待たなかった。吹（ふ）っ切るように叫（さけ）んで栄子に斬（き）りかかる。
「問答無用だ！　私たちの問題だろう！」
絢子は水面に躍（おど）り上がるが、栄子が阿九斗の顔を絢子に向けさせる。
「いやぁ！」
絢子ははっとして再び水中に身体を沈（しず）めた。
視線を気にして水上に出られないのだ、と気づいた阿九斗はおずおずと声をかける。
「だ、大丈夫（だいじょうぶ）、見てないから、思い切りやってくれ」
「嘘（うそ）だ！　思いっきり見てた！　それに思い切りやってくれという言葉が何かを期待しているようにしか聞こえん！」
「意地を張ってる場合じゃないだろうに！」

「だったらその場を離れてくれ！」
「そりゃそうだ、悪かった……いや、ちょっと待て！　動けない事情ができた！」
阿九斗はあることに気づいて声をあげた。だが、そんな言葉、絢子も栄子も聞いてはいなかった。
「良い機会だ！　ここで積年の恨み晴らさせてもらうよ！」
栄子が絢子に躍りかかった。今度は絢子も応戦するが、やはり身体を隠しながらでは素早い動きにはならない。あっという間に栄子に手首を打たれて刀をはじき飛ばされている。
「しまった！」
「あはは！　おぼこい娘は大変だねぇ！」
そう叫んだ栄子の身体が揺らぐ。と、栄子の分身が彼女の左右に出現した。絢子が得意としている技だ。
「恥じらいを無くしたら女は終わりだ！」
絢子も対抗して分身。何体もの栄子と絢子がそれぞれ叫びながら殴り合う。
「元は小さい頃にあたいが教えた技じゃないさ！」
「教えられた覚えはない！　村の基本技だ！」
「師匠に怒られていたのをかばってやっただろうに！」
「貴様が師匠の食事に毒を混ぜたのを私のせいにしたのが原因だ！」

「黙れ処女！」
「黙れ淫乱！」
情けない言い争いだが、それが何体にもなってしかも温泉中を跳び回るので阿九斗としては動くことが出来ない。おまけに裸体の女の子が戦いながら目の前を横切るわけで、絢子は大事な部分は見事に手足で隠しているが、やはり目のやり場には困る。
しかし、阿九斗が先ほど声をあげた〝動けない事情〟は別のものだ。
先ほどからこちらを睨んでいるふたつの瞳があった。人間のものではなかった。木の上から見下ろしている。犬科のものか猫科のものかはわからないが、野性の鋭い目だ。
四本足の獣だ。かなり大きい。以前に出会ったようなマナ異常を起こした獣というわけではないらしい。阿九斗が体内のマナを操作しようとすると、それに抵抗する力があったからだ。
——あれがここを守ってる奴か……。その割りには人間のような意志がないようだけれども……。
これまでの守護者は性格のようなものがあった。が、今回のそれは野性そのものだ。おかげでまったく向こうの出方はわからない。
絢子と栄子は気づいていないようで、まだ互角の戦いを続けている。もっともやや絢子が押され気味ではあるが……。
——どうするべきか……。

獣に注意しながらも周囲に目を配ると、その獣の下方に小さな祠があるのを見つけた。葉に埋もれていて気づかなかったが、どうやらこれまでそのせいで見逃していたらしい。

――あそこに近づく者を襲うとか、そういうことか……。

そう阿九斗は見当をつけた。そのとき、絢子と栄子のうち一対のコンビが祠に近づくように戦いの場所を変えていた。

「いけない！」

阿九斗は駆け出していた。視界の端に獣が動き出したのが見えていた。絢子と栄子の間に割り込む。

「何をする！」

「邪魔だてするな！」

絢子と栄子は叫んだが、その言葉は長く続かなかった。割り込んだ阿九斗の頭上に人間の二倍程度の体長がある獣が降ってきたからだ。

阿九斗は獣を受け止めて、後ろに投げ飛ばす。獣の膂力もかなりのものがあったが、阿九斗には及ばなかった。が、投げ飛ばされた獣は一回転して岩の上に着地する。何のダメージもないらしい。



「狼（おおかみ）？」
絢子が声をあげた。
「危ないから下が……」
阿九斗がそう言葉を発する隙（すき）も獣は与（あた）えてくれなかった。着地してからほとんど間をおかずに跳躍（ちょうやく）し、阿九斗の顔面をその爪（つめ）で狙（ねら）ってくる。
「とっ」
阿九斗はなんとかそれをかわしたが、反対側の岩に着地した獣は、軽（かろ）やかに、そして寸分の間も開けずに阿九斗に向かって跳（は）ね戻ってくる。
その一撃（げき）を阿九斗はかわしきれなかった。肩（かた）の辺りの皮膚（ひふ）の一部を持って行かれる。
「うっ！」
阿九斗は肩を押さえてうずくまる。が、獣はその攻撃（こうげき）の効果を確かめる余裕（よゆう）を見せることもなく、再度の攻撃を同じテンポで繰（く）り出してくる。阿九斗にその爪を立てようと三度目の跳躍を行う。
その時、獣に周囲から絢子と栄子の分身が一斉（いっせい）に襲いかかった。
「いやぁああ！」
「きぇええい！」

何体もの分身が同時に獣の左右に降り注ぐ。だが、その分身たちは揃いも揃ってその目標を見失ってたたらを踏んだ。
「？」
いくつもの顔が疑問を浮かべる。と、彼女たちが一斉に吹き飛ばされた。獣は阿九斗のすぐ目の前にいる。
獣が彼女らの分身すべての攻撃をすり抜け、さらに一瞬にして分身のほとんどを吹き飛ばしたのだと気づいたときには、もう絢子と栄子はその気力のほとんどを使い果たして阿九斗の脇にへたりこんでいた。分身が受けた攻撃は気力へのダメージとなって身体に撥ね返ってくる。二人とも一撃で疲労困憊していた。
——さすがに今度ばかりは駄目か。
阿九斗は冗談でなく死を覚悟した。これまでの相手は追い払うことが目当てだったのか、致命傷になるような攻撃を行ってはこなかったが、今回の相手はまるっきり野性だ。手加減ということはないらしい。最初の一撃さえなければ、相打ち覚悟で最大限の力を使ったパンチでも打ち込めていただろうが、傷を負った今となってはそれもかなわない。
獣が再度の跳躍を見せた。
おびえた絢子と栄子が阿九斗に身体を寄せてくる。
阿九斗は顔を伏せた。反射的に二人を覆い隠すようにその身体を投げ出していた。

獣の爪が身体を切り裂く痛みに耐えようと阿九斗は歯を食いしばった。

が――

何も起こらなかった。

水音だけが目の前で響く。

おそるおそる目を開けると、水面に獣が浮いていた。眠っているようだった。

――ともかく助かったらしい。

まだ信じられずに、ゆっくりと阿九斗は身体を起こす。すると、腕の中に絢子がいたことに気づいた。震えて必死に阿九斗にしがみついている。

「おい」

阿九斗が声をかけると、絢子は目を開いた。そして阿九斗と浮いている獣を見比べてから、一気に緊張をといた。

「よ、よかった……」

力を抜いて阿九斗の身体にもたれかかる。

「お、おい、ちょっと……」

阿九斗が慌てると、絢子はようやく自分の置かれている状況に気づいたらしく、わけのわからない悲鳴をあげると、飛び退いて温泉にその身体を沈めた。

「そういうこと……」

と、そこに苛立った声が聞こえてきた。栄子だった。彼女は阿九斗の背中側、少し離れたところでうずくまっていた姿勢から立ち上がったところだった。

「反射的にとった行動ってのは、嘘をつかないものね！　絢子！　あんたを選んだってことらしいよ、紗伊阿九斗はさ！」

栄子はそう断じた。そして邪悪な笑みを浮かべ、怒気をはらんだ声でこう続ける。

「だったらもう死んじゃえばいいさ！　あんたは遺産を受け取ることになる！　そして、その影響で死んじゃえばいいんだ！」

栄子はざばざばと温泉内を歩いて祠に向かい、そこに手を突っ込むと、中から取りだした何かを阿九斗に向かって投げた。

阿九斗は反射的にそれを受け取る。それは掌に納まるほどの大きさの鍵だった。

——鍵？

戸惑っていると、栄子は無言で温泉に身を投げた。水中を泳ぎ、元いた場所に戻っていくのが阿九斗のいる場所からも見えた。

——畜生、なんだってんだよ……。

阿九斗は内心でぼやく。と、ここにきて肩の痛みが強く感じられるようになった。

「痛たたた」

肩を押さえてうずくまると、絢子が駆け寄ってきた。

「大丈夫か？」

「死にゃしないだろ」

阿九斗はそう答えて、絢子から顔をそらした。

「ごめん。なんか妙なことになって」

そう謝ると、絢子は顔を赤くして首を横に振った。

「わ、私は気にしていない。こっちこそあいつが来るのにもっと早く気づいていれば……。いや、それに気づかなかったのは、私が引きこもっていたからで、それは貴様が私を授業中に裸にひんむいたからだろうが！」

絢子は言葉の途中から阿九斗を詰問するような調子になっている。

「悪かった。そりゃそうだ」

阿九斗は素直に認め、そしてふと疑問に思ったことがあったので質問を返す。

「あの子とは長いの？」

「ずっとライバルだ。聞いていた通りだ。その場の感情しかない奴なんだよ」

「それはずっと感じてた。そういう子だったよ」

阿九斗が納得すると、絢子がぎょっとしたように言う。

「何かあったのか⁉　いや、その変な意味じゃなく……」

「大丈夫だったよ。迷惑はかけられたけど」

「それなら良かった。大体、あいつは男によって生き方まで変えてしまうような奴なんだ。それに誰かに仕えるってことを根本から間違ってる。だから、あれだ、お前が私の主人になるとか、そういうのは完全に妄言なんだから注意しろよ。それにあいつがお前は私のことを選んだとかなんとか言ってたけど、そういうことでもないんだろう？」

　しどろもどろになりながら絢子が言う。

　阿九斗は少し考えた後に口を開いた。

「いや、どっちかってことなら君だろう。だけど……」

だけど、以降の言葉を絢子は聞いていなかった。混乱したように手をばたばたさせてお湯を周囲にはねとばしている。

　さらに、阿九斗もその続きの言葉を口にすることはできなかった。上空から間の抜けた声が響いてきたからだ。

「あーちゃーん、絢子ちゃーん」

　けーなの声だった。

　阿九斗が見上げると、けーなが空から降りてくるところだった。うつぶせになって、手足をだらりと下げた格好だ。驚いたのは、その背中に不二子が横座りの格好で乗っていることだった。

「あの獣が眠ったことを不思議にも思わずだらだらと何を話しているんですの！　それにわたくしが来なかったらどうするつもりでしたの？　しかも銃を途中で手放してしまいましたわね。追ってくるのが大

変でしたわ！」
　不二子はその手の中に薬品の瓶を弄んでいた。どうやら彼女が上空から動物を眠らせる薬物を撒いていたらしい。
「あーちゃん、ひどい怪我だよ！」
　けーなが上空からふらふらと阿九斗に向かって降下してきた。
「大丈夫だよ。とりあえずころねに傷の手当てをしてもらって僕は着替えないと……。ええと、服部さんも」
「よ、余計な気遣いはいらん！」
　絢子が怒鳴り返してきた。

4　生徒会長の逆上

阿九斗の治療を終え、とにかくも森の中の一角に集まった皆は困り果てていた。ともかく誰も事情を把握していないわけである。栄子はころねとヒロシの話によると、一度戻ってきたが、服を着るや怒ったようにどこかに行ってしまったということだった。そうなると裏を知っていそうな者は誰もいない。おかげで話し合いも難航した。阿九斗は学園に帰ることを主張し、不二子はここで鍵を作動させることを主張していた。残りの者はどちらの主張が正しいかわかりかねていた。ただ一人、けーなだけはピクニック気分だったが。

　とはいえ、不二子の様子は阿九斗から見てもおかしかった。

「……と、こういう具合だったわけで」

　阿九斗が状況を説明する間中、不二子は明らかに落ちつきなく身体を揺すったり、爪を噛んだりという行動を繰り返していた。説明が終わると、不二子が声をあげる。

「それを見せてくださらない？　鍵とやらを」

　彼女が勝手に動作させてしまったら困るな、とは思うが、阿九斗はふとあることを思い出す。

――そういえば、あのお兄さんとかと関係があるって……。

理屈よりも、不二子が可哀想になってしまったというのが大きい。阿九斗はみっつの鍵を不二子の前に並べた。

録音ができる人形型のキーホルダー。

写真を撮影して落書きできる手帳サイズのプレート。

そしてそのものズバリのドアの鍵の形をした物体。

不二子はそのみっつをかき集めるように自分の手元に置くと、ひとつひとつを顔の前に持ってきて吟味しはじめた。

完璧なお嬢様としての不二子の顔も、邪悪な女王としての不二子の顔も、どちらも消え去っていた。ただ自分の記憶を探そうと必死になっている少女の顔だけがそこにあった。

「これは、やっぱり先輩のものなんですか？」

阿九斗が聞くが、不二子は答えない。ただ、キーホルダーとプレートを持っている慣れた手つきが無言の肯定を示していた。

「お兄さんは最低の人だっておっしゃってましたけれど、何をされていたんですか？」

質問を変えると、不二子は首を横に振った。

「わかりませんわ。ただ、わたくしもそれを知らなくてはいけないような気が……」

そう言って不二子が自分のものではないらしきみっつめの鍵を弄ぶ。と、その鍵の首をひねったとき、かちり、と音がした。

鍵がうなりをあげ、光を発しはじめた。
「これは……！」
全員が鍵に見入る。
鍵は自らを中心に、空間に直径五メートルほどの魔法円を描き出していた。
「これは空間転移の魔法円です」
ころねが言った。けーなが不思議そうな顔になる。
「つまり、どういうことなの？」
「円に入った者が望むなら、あらかじめセットされた位置にその者を転送します。空間をねじまげて穴を開け、そこに対象者を落とすわけです。対象を分解して電送するわけではありませんので、瞬間移動としては安全な部類に入ります」
ころねが解説する。
「望むなら？　ってことは……」
阿九斗は危惧を口にした。その危惧通りのことが次の瞬間に起こった。
不二子が姿を消したのだ。鍵はすべて彼女が持っている。
「ちょ、ちょっと！　鍵が消えたらどうなるんだ？」
阿九斗は慌てて聞く。

「大丈夫です。魔法円は安全のためにすぐに消失することはありません。一分ほどすれば消えますが、その間は移動することも可能です」
「じゃあ、一分間のうちに先輩の後を追うかどうか決めなくちゃならないってことか？」
「そうですね。ですが魔法円が消える際に中にいても別に問題はありません。ただ、ここに置いていかれるだけです」
――わかったよ。
阿九斗は腹を決めた。皆の顔を見ると、どうやら最後まで付き合うことを決めた顔をしていた。転送の意志を念じると、身体がフッと軽くなり、次の瞬間には落下感があった。事実、身体は落下していたらしい。ごく僅かに高い位置から石畳の上に落ちたような感覚がある。足を踏ん張ると、見知らぬ場所に立っていた。
周囲を見回す。地下納骨堂よりも広い地下空間だった。地下というのは推測に過ぎないが、天井が遥か高い位置にあるので、それが間違っているとは思えない。中にすっぽりとビルが入るほどの高さがある。広さも尋常ではない。小さな街一つが入ってしまうのではないかと思われる。
そして阿九斗たちが出現した場所は、門の前だった。
――宮殿……？
阿九斗は絶句する。他の皆も驚きに言葉を失っていた。眼前には金で装飾された壮麗な門がそびえている。どうやら壁際に阿九斗たちは立っているらしい。その壁が巨大な門になっているようだ。門の向こう

側には、百メートルほどの石畳の道があり、その先に祭壇(さいだん)があった。
「あっちに祭壇が……」
と阿九斗が言いかけたとき、いきなり門の前に人影(ひとかげ)が現れた。
阿九斗たちが門をくぐるのを阻(はば)むように仁王(におう)立ちになったその影は、それほど大きくはないが、妙(みょう)な威圧(いあつ)感があった。
「いやいや、どーもどーも」
人影はかぶった帽子(ぼうし)のつばをちょいと持ち上げながら言った。
「生徒会長……」
皆が驚きの声をあげた。
「ここがゴールだよ。楽しいゲームだったろ?」
生徒会長がそう言って笑うと、会長の背後にぞろぞろと三人の役員が現れた。細身の黒づくめ、三メートルの鎧(よろい)を脱(ぬ)いで中から現れた長身、腕(うで)と足が獣(けもの)のまま眠(ねむ)そうな顔でいる筋肉質、の三人。
――この三人……まさかとは思っていたけど。
阿九斗は三役の姿を吟味(ぎんみ)した。
間違いなかった。宝を守っていた三体の怪物(かいぶつ)は、確実に彼女たちだった。
「ゲームですか?」
絢子(じゅんこ)が不機嫌(ふきげん)そうな声をあげる。

　生徒会長は、あははは、と笑った。

「そう。生徒会の余興だよ。宝探しゲーム。楽しんで頂けましたか？　賞品は……えーと、ボクがほっぺたにキスしてあげよう」

　生徒会長はそう言って笑った。が、笑っているのは彼女と「わーい、キス、キス！」と喜んでいるけーなだけだ。三役は恨(うら)みがましく阿九斗の方を見ている。と、それに気づいた生徒会長が三役を振(ふ)り返った。

「ほら、ボクがこうして無理してるんだ！　笑え！　笑え！　盛り上げろ、こら！」

「あ、あはははは！」

「どんどんぱふぱふー！」

「たのしいぎゃ！　さすが会長！　天才的なゲーム主催(しゅさい)のセンスだぎゃ！」

　三役は無理矢理に笑い声をあげる。が、それで盛り上がっているのは、やはりけーなだけだった。

「そんなわけないでしょう。どういうことか説明していただけるんでしょうね？」

　絢子が聞いた。

「だから、ゲームだよ。宝の地図を見つけさせて、三役を妨害(ぼうがい)役に配置して、一番最初にここに来た奴(やつ)を表彰(ひょうしょう)する」

　生徒会長からも笑顔(えがお)が消えていた。

「そんなわけがない……」

　絢子はそれでも食い下がろうとしたが、阿九斗がそれを制した。

「いいじゃないか。楽しいゲームでしたよ。ねぇ」
阿九斗は生徒会長に同意した。生徒会長の顔に作り笑顔が戻る。
「そうそう。ねぇ？　楽しかったろ、あはははは」
「あははは」
阿九斗も棒読みで笑う。
が、その笑いは次の瞬間、さらに乾いたものになった。鍵を抱え込んだまま無言でいた不二子がいきなり走り出したのだ。
「通してもらいますわよ！」
不二子は叫んで、懐から取り出した薬瓶を、生徒会長が立っている地面に叩きつけた。そこに瞬時に煙が立ち上る。あっというまに周囲の者の視界は奪われてしまう。
「しまっ……！」
生徒会長が狼狽した声をあげた。煙の中に不二子が飛び込む。三役は不二子を阻止しようとしたが、不二子はそれより早く身体を門の中に滑り込ませている。
気づくと不二子は門の向こうの石畳を祭壇に向かって走っていた。
「先輩……！」
阿九斗はそれを追いかけようとするが、そこに生徒会長の鋭い声が飛ぶ。
「やめろ！　危険だ！」

阿九斗はその声の尋常（じんじょう）でない気配に足を止めた。生徒会長の顔を見つめる。

「やっぱり、ゲームではないんでしょう？」

「そりゃみんなわかってたろうに。とはいえ、キミだけが空気を読んでくれたことには感謝したいな。そうだよ、もちろんゲームじゃあない」

生徒会長はあきらめたように首を振った。

「この先にあるのが、魔王（まおう）の遺物？」

「そうだ。ここは学園の地下迷宮の最下層だ。最後の決戦は地下で行われた。ここが魔王側の拠点（きょてん）だよ」

「どうしてそのままになっていたんですか？」

「すぐにわかるさ。だけど、ひとつだけ言っておく。この門をくぐるな」

生徒会長はそう言って阿九斗を見据（みす）えた。異様な迫力（はくりょく）に満ちた目つきだ。

とはいえ阿九斗も容易には引き下がらない。

「どうして？」

そう質問をして生徒会長の目を見据えている。ヒロシはもちろんのこと、絢子も思わず二人から遠ざかっていた。

「どうしても、さ。これから何が起ころうと、キミはそこを動くな。誰にとってもいいことにはならないからね」

生徒会長は静かに、だが重々しくそう口にした。

○

不二子は鍵の発する微かな光が祭壇を指し示していたことに一人気づいていた。そしてその光が自分の過去を照らす明かりだと確信もしていた。これまで感じてきたあらゆる矛盾が解決するのだと思えた。

石畳を走る。誰も追ってきていない。祭壇に近づいたところで歩をゆるめ、キーホルダーとプレートを確認した。

――プレートで掌を確認……そして、キーホルダーで音声を再生……。これはつまり、祭壇に何らかの魔術システムが存在し、それを開けるための手続きですわね。

祭壇を探る。生け贄台のようにも見えるダブルベッドほどの金属製のそれには、文字がレリーフとして刻まれていた。

《すべての人民の救いを資格ある者が現れるまで封印する。資格無き者に死を》

その文字の横に鍵穴があり、おそらくはこの鍵と一致する気がしていた。

「これで……」

鍵を差し込む。低いうなりが起こった。祭壇そのものが起動したことがすぐにわかった。

手に持っていたプレートが光る。おもちゃだがマナ通信を感知する機能が備えられている。通信を受信してみると《掌を認証せよ》とある。自分の掌の写真を撮影して転送。すぐさま返信があった。《暗号化されたパスワードを音声入力》。キーホルダーのボタンを押した。兄の声に続いて音声化されたパスワードが流れ出す。

懐かしい兄の声を聞いていると涙が出てきた。その涙が祭壇に落ちるのと、祭壇が持ち上がりはじめたのが同時だった。

《パスワード認証。システム再起動》

不二子はそう音声が流れはじめたのを聞いて、祭壇から距離を取った。

持ち上がった祭壇は、まるで木で組み上げた箱のようにばらけて開き、地下へと続く穴を開いた。その穴は祭壇の台座全体にまで拡がっていく。

やがて穴から銀色の筒が持ち上がってきた。

筒の直径は十メートルはあるだろう。それは高さが五メートルほどの位置までせり上がって静止した。

続いて筒の側面に亀裂が入る。筒はゆっくりと左右に分かれはじめた。

○

「何が起ころうと?」

阿九斗は雑ぜっ返した。生徒会長の背後、つまり石畳の向こうには銀色の筒がせり上がっていた。
「そうだよ。キミは報いを受けなければならない罪を犯したといえるからね」
　生徒会長は残念そうに首を振った。
「罪？」
「こいつを掘り返したことそのものだ。ボクたちは止めようとした。それはわかるね？」
「それは認識してます。これを誰にも見つからないようにしようとしていた。今になればわかる」
「ボクが望んだのも現状維持だった。いや、現場保存と言ってもいいかな。少なくとも政府はこれを無かったことにしたがっていた」
「魔王の遺産だからですか？」
「そうだ。ボクらは当然ながら政府側の人間でね。いずれ官僚になるために勉強している。そして生徒会長ともなればすでに政府のために働いている。だが、政府は一枚岩ではない。ボクら主流派は、魔王の遺産をそのままにしておきたかった。破壊したら何が起こるかわからないし、使用方法がわかってしまえば再び大変な破壊が起こりかねないからね。黒魔術師だって魔王の遺産には手を触れたがらない。多くの場合、それを使うには資格がいるらしい。そいつが何かわからないんだ。不用意にそれに近づけば、死ぬことになる」
　生徒会長は淡々と説明したが、その言葉の内容に阿九斗は、はっ、とする。
「死ぬ……って！」

「そうだ。江藤不二子くんはもう駄目かもしれない。しかし、それを見過ごさなくてはならないのがキミの受ける報いだ。どれほど彼女と親しかったか知らないが、キミのせいで犠牲になった、と記憶したまえ」
「僕は、照屋栄子に導かれて……」
　そう言ってから、あまりに見苦しい、と阿九斗は口をつぐんだ。が、生徒会長はそれを聞き逃さなかった。
「情けないぞ。あれは政府でも急進派の手の者だろう。彼らは黒魔術師を一掃しようとしている。そのためにもう一度戦争を起こしてもかまわないと思っている。今回もそのための布石か、もしくはキミに資格とやらがないことを知っていて殺すためにおびき出したのか。ともかく彼らの企みはわからん。不気味な奴らさ。あいつらは政府主流派の必ず先を行くんだ」
「わかりました。じゃあ、僕はここで見ていろ、というんですね」
「そういうことだ。助けに行こうなんて考えるんじゃない。魔王の遺産ってのは、どうやら資格がないものだけを殺す。そしてそのテリトリーからは出てこない」
　生徒会長はそう説明した。
　しかし、阿九斗には腑に落ちないことがあった。
「どうしてそんなことがわかったんです？」
「魔王が戦争に負けた際、黒魔術師たちが自ら各地に遺物を封印したのが百年前だ。その後、遺物がいくつか発見され、黒魔術師も政府側も、それを起動しようとした者がいた。何人かの優秀な者は起動方

法を見つけた。そいつらが命を代償にそんなことを証明してくれたのさ。そして、ここが最後に発見された遺物だ」

「じゃあ、先輩のお兄さんというのは……」

「そういうことらしいな。ボクらは詳しく知らないけどね。ただボクらはこいつを静かに眠らせておきたかっただけさ。地図がキミから届けられるや、ボクらはここを突き止めた。キミたちよりはるかに早く宝探しには成功していたわけさ。ところが政府に破棄するかどうかを問い合わせたところ、現状を維持しろ、そう言われた。今思えば、主流派と急進派で取引やら綱引きやらがあったかもしれん。ともあれ、ボクは命令を守る」

　生徒会長は指を一本立てて、門の前に架空の線を引いてみせた。

「この線を越えたら容赦しない」

○

　不二子の眼前で銀色の筒が開きはじめた。筒の中から白い煙が流れ出てくる。冷却されていたらしい。

　筒が開ききって中が見えたとき、不二子は思わず声をあげていた。

「これは……！」

　筒の中には黒い巨大な獣が丸くなっていた。

――ドラゴン！

黒い身体は黒鉄の鱗。角は鋼鉄の巨大な螺子。背には銀に輝く鞍を備えている。魔王が戦に騎乗したとされる伝説の竜。

尻尾を頭部に押しつけるようにして丸くなっていたそれが、身動ぎとともに活動を再開した。その巨体に似合わぬ素早さで筒を滑り出てくる。全長は十五メートルほど。畳んだ翼を左右に伸びをするように開いた。その大きさ以上に空間を支配しているように感じられる。

「眠ってから……百年か」

彼は声をあげた。その恐竜かトカゲとしか思えぬ顔にしては知性的な声だ。そして金色の目を見開いて不二子を見る。

「だが記憶はある。一度だけ目覚めかけたことはあったが、起動には到らなかった。そのときから数えれば十年になるのか。だが、無目的な起動であれば目覚めも喜びとはならないな」

独り言に過ぎなかったが、不二子を恐怖させるには十分だった。

「あ、あなたは……伝説の……」

「伝説などと呼ばれているのか。年を取ったと感じさせないでもらいたい。私は人民に奉仕し、公平に接するために作られてはいるが、人格を与えられてしまっている。そして、その人格のままに振る舞うことを任務よりも優先されている」

竜の声は低く響いた。

「し、失礼いたしました。そ、それはどういう意味ですの？」
　不二子は震（ふる）える声で聞いた。
「私はわがままだということさ」
　脅（おど）かすように竜は不二子に向かって顔を突き出した。不二子は悲鳴をあげて後ろに転がる。竜は少しだけ声をあげて笑った。



「怖（こわ）がられると心が痛む。だが、もう怖がる必要もない。起動したのがお前ならば、お前には資格がない。資格のない者が私を使いこなすことはできない。そして、私が無軌道（むきどう）に力を使うことは人民への害悪となる」

　竜は言った。

「そ、それは今度はどういう意味ですの？」

　不二子は震える声で言った。

「資格無き者の起動には、私はこの者の速（すみ）やかな殺害をもって応（こた）えなければならない」

　竜は静かにそう言った。

　そして竜は不二子に向けて大きく口を開いた。

○

「会長！」

　阿九斗は咆（ほ）えた。竜の言葉はその場の全員に聞こえている。

　生徒会長は苦々しい声を出した。

「同じ言葉を繰（く）り返したくないな」

その場の空気が鉛（なまり）を含（ふく）んだように重々しくなった。誰も言葉を発しなかったが、けーなだけが声をあげる。

「あーちゃん！　助けてあげてよ、先輩（せんぱい）を！」

「わかってるさ……だけど……」

阿九斗自身も自分が走り出せないことに苛立（いらだ）っていた。恐怖や怠惰（たいだ）や悪意から走り出せないのではない。見捨てるのが政治的に正しい決断であることが理解できてしまったからだった。

――魔王（まおう）が健在だって天下に示していいことなんてあるはずがない！

そういう思いがある。さらには政府に協力するためにこの学園に来ているのだ。そうなると、生徒会長の判断は正しいとしか言いようがない。

「正しい決断をしなきゃいけないに決まってるじゃないか！」

阿九斗は怒鳴（どな）った。

と、けーながその言葉を遮（さえぎ）ってさらに大きな声をあげた。

「あーちゃんの馬鹿（ばか）ーっ！　先輩がどんな思いをしてるかも知らないで！」

けーながそう叫（さけ）んだ瞬間（しゅんかん）、阿九斗はいきなり身体がしびれたようになった。それが何なのかわからなかったが、辺りを見回すと、けーな以外の誰もが不思議そうな顔をしていた。どうやら皆（みな）も同じ感覚に襲（おそ）われていたらしい。

——え？

不意に脳裏に何かが流れ込んでくるような感覚があった。居ながらにして夢を見ているような、あるいは他人の記憶（きおく）に入り込んでしまったかのような感覚だ。

走っている。

追われて走っている。

ひどい焦燥（しょうそう）感と恐怖。

これは誰かの悪夢……いや、実体験だった。

あの温泉の祠（ほこら）に鍵（かぎ）を隠（かく）す。同時におもちゃのプレートにメモをし、洞窟（どうくつ）の入り口を撮影（さつえい）する。このプレートに写真をとって妹に見せる約束をしていたのだ。まさかこんな形で使うことになるとは思ってもみなかった。

追っ手を撒（ま）くために森の地形を変える。国土の神であるムリート神に授けられた上級魔術（まじゅつ）だ。ムリート神の加護は誰よりも強く受けている。完全に逃（に）げ切るのは無理だろうが時間は稼（かせ）げる。

今は廃墟（はいきょ）となった騎士団（きしだん）装備研究所へ入る。奥（おく）の棚（たな）へプレートを隠した。理由は簡単だ。自分を追っているのが騎士団だからだ。これが告発になるといいが。

さらに走る。告発。そうだ、告発だ。最後の隠し場所を思いつく。走った。

あいつのことだけは誰かに知ってもらわないといけない。自分を騙（だま）したあの男。

魔王の最後の砦となった場所の封印が破られ、その調査隊として自分は学生ながらに派遣されたのだ。そこで声をかけてきたのがあの男だった。

「竜の封印を破る方法を調べられないだろうか？　調べるだけでいい。ここだけの話だが、次の魔王が目覚めたらしいんだ。政府の方針は調査の後、再封印だが、俺はそれを完全に破壊しておきたい」

まさかその言葉が嘘だったとは！

最難関とされる魔王の遺物のパスワード破りが出来るのは自分だけという自負もあった。ましてパスワードを破るだけで封印を破る気はないとなれば、やらない手はない。あいつの裏も調べた。黒魔術師ではなかった。公安委員会の幹部。信用しないはずがなかった。

だがあるとき知ってしまった。彼が本当は恐ろしい計画に着手していることを。

まさかあんな……。

地下納骨堂に入る。計画を知った後、彼のことを再調査した。あり得ないことがわかった。彼は大戦の戦没者とされていた。九十年前だ。奴は何者なんだ？

箱を開けて骨を探す。当然だが、そこに骨はない。

大和望一郎。

その墓にパスワードを録音したおもちゃのキーホルダーを隠す。

不二子が録音していた声を上書きしなければならないのが悲しかった。死ぬ間際に彼女の声が聞けないなんて……。

だが今は次に来る者のために竜の封印を解く方法を残しておくのが最良のことだった。
最後に不二子の声を聞き、それを脳裏に刻んでからパスワードを上書きし、箱に納める。
それから地図を作成した。

《この地図を見ている勇気ある者に告げる……》

出来ることならこれを黒魔術師に発見して欲しかった。今や黒魔術師しか信用できる者はいない。おかしな話だ。これまであんなに毛嫌(けぎら)いしていたのに、今や政府の方が信用できない。
学内で黒魔術師がいそうな場所といえば、精神修養房(ぼう)だ。彼らがそこを連絡(れんらく)場所にしているのは黒魔術師以外では彼らを毛嫌いし追いつめるために調査していた自分だけが知っている。
そこに地図を貼(は)り付ける。
さらに、これが何らかの告発であるヒントを残しておく。印された憲法条文のうち、帝国(ていこく)公安委員会の設置を認める条文の位置に地図を隠す。
自分以外に竜の封印を破れる才能を持つ者はあと数十年は出てこないだろう。自分が残したヒントをたどっていく以外に封印を破れる者は政府にもいない。そして、上手くいけばパスワードは秘密裏に黒魔術師の手に渡(わた)るだろう。そうでなくとも地図が騒動(そうどう)になれば、彼らより早く政府の主流派や一般人(いっぱんじん)の目に触(ふ)れることになる。そうなれば竜を彼らが独占(どくせん)することは不可能になる。
ここまでは終わった。最後の一仕事だ。

パスワードそのもの、そして地図を隠したという記憶そのものを消去しなくてはならない。自分はすぐに彼らに捕まるだろうし、そうなれば殺されて死霊術にかけられてしまう。生きているうちにムリート神より記憶＝記録を消さなければならない。

準司祭の資格を使って神を呼び出す。該当の記憶＝記録を消す。学園生活のほぼすべてを消さなければならない。死後、家族にもつらい思いをさせるだろう。

仕事が終わった。

目の前にあいつが立っている。嫌らしいくらいの美形。朗らかでさわやかな印象を与えるが、中身は違う……いや、違わないのかもしれない。あまりに朗らかでさわやかで、そのために目標に邁進できるのかもしれない。

「まいったな。記憶を消してしまったのか！　これじゃ俺たちが竜を手に入れることはかなわないってことか！　見事だ！　これで仕事がずいぶん遅れることになった。ともあれ、こうなったら別の方法を考えるさ」

あいつが肩をすくめる。いい気味だ。

だが、自分ではあいつにはかなわない。

もうすぐ殺される。

あいつの手が伸びてくる。

痛み。

すぐに暗くなる。

「何だ、これは！」

阿九斗は声をあげていた。他の皆(みな)も同じ顔をしていた。

と、ころねが冷静に告げる。

「これは竜に記録されていた記憶です。正規のものではないですが、あの竜は帝国市民すべての記憶をログとして保存しています」

「あいつがつまり黒魔術師(まじゅつし)の神ってことか……！」

阿九斗は驚(おどろ)きの声をあげる。

「眠(ねむ)っている間も、その機能だけは保(も)ち続けていたようです。誰もそれを利用することはできなかったわけですが。百年を経て、再び利用されたことになります」

ころねがそう説明したが、それでも解(げ)せないことはある。

「どうしてそれが全員の脳に届けられた？」

「誰かが媒介(ばいかい)となったのだと思われます。それが誰かはわかりません」

阿九斗はけーなを見た。けーなはきょとんとしている。結局のところ、よくはわからないということらしい。

——だけど、誰だっていいさ。見てしまったんだ。見ちまったんだもんな。

阿九斗はけーなに笑いかけた。
けーなはそれに気づいて笑い返してきた。
「うん！」
生徒会長はその気配を敏感に察した。
「知らんぞ。こっちは本気を出す」
生徒会長はそう言って、ヒロシとけーなにあっち行け、と手を振った。
「ころね」
阿九斗は指示した。ころねがどうもお気に入りになっているらしいローラースケートをはいてダッシュし、ひろしとけーなを両脇に抱きかかえて距離をとる。
「服部さん」
阿九斗は絢子にも呼びかけた。絢子は首を横に振った。
「スハラ信者が退くことはない……」
「駄目だよ。君が無理をすることはない。首を突っ込んだ僕の責任だ」
「いいや。私も照屋栄子には借りがある。第一、君の決断を正しいと私も思っている。それに……それに……」
絢子はそう言ってから口ごもった。顔を赤くして、小声で言う。
「それに、貴様が私を選んだのなら、私も……」

「え？　何て言ったの？」
　阿九斗は声が聞こえなかったので聞き返した。
「馬鹿（ばか）っ！　だから……」
　絢子は怒鳴（どな）ろうとした。
　またも阿九斗はその言葉を聞くことはできなかった。絢子の言葉が終わらぬうちに、阿九斗は全身に衝撃（しょうげき）を受けて吹（ふ）き飛ばされていた。



——な!

わけもわからぬうちに地面に叩きつけられている。

絢子も同様だった。しかも彼女は阿九斗よりもダメージがあるらしく、起きあがれずにうめいている。

「何を……」

何をしたのか、と言葉にしようと顔をあげたところで横合いから衝撃。

しかし、阿九斗は、今度は吹き飛ばされながらもその正体を確認していた。

生徒会長の腕が伸びていた。腕の組織を瞬時に生成しているのか、あるいは絢子の分身のようにマナのみで打撃を与えているのかわからないが、少なくとも生徒会長はその場に立ったままで、十メートルは距離をとっている阿九斗を横合いから殴り飛ばしたのだ。

「喧嘩はやると決意したときがゴングだよ、キミ」

生徒会長は言い放った。そして、つまらなそうにこう付け加える。

「こちらとしてもキミと同じように誰かの記憶を見たんだ。気持ちはわかるさ。だけど、ボクは自分の信じることのためにキミを通すわけにはいかない」

「それなら……」

阿九斗は立ち上がった。

「……不意打ちじゃなく、気持ちよく喧嘩させてくれてもいいじゃないですか」

「見かけ以上に喧嘩好きだね、キミ。じゃあ、気持ちよく喧嘩させてあげよう。会ってからしばらくになるのに名乗っていなかったね。ボクはリリィ白石。性格はちょっと短気」
リリィは再度右手を伸ばしてきた。阿九斗はそれをかわそうと身体をひねる。と、打撃は反対側からやってきた。阿九斗は顎を弾き飛ばされる。リリィは左手を下側から伸ばしていた。
「フェイントくらい入れるさ。威勢の割りには喧嘩慣れしてないね」
阿九斗はぼんやりする頭をはっきりさせようと首を振った。
「会長の見立てが間違ってるんです。僕は喧嘩が大嫌いで」
「そういえばこいつらから聞いたよ。馬鹿力の割りにはいろいろ迷ってたって」
リリィは三人を顎で示した。
「そうですか。お三方も優しかったですよ。致命傷にならないようにしてくれていた。最後の一人だけ本気でしたが」
「ありゃ変身すると野性に返っちゃうんだよ。さて、無駄話はともかく、ボクも意外と優しいと評判なんだ。そろそろキミを気絶させてあげたいんだよ」
リリィは言って背後を指し示した。

○

竜(りゅう)は開いたその口から何かを射出した。伝説では竜は炎(ほのお)の息を吐(は)いたとされている。だが、その竜は口から螺子(ねじ)の刻まれた鉄棒をはき出したのだった。

唸(うな)りを上げて長さ一メートルほどの鉄棒は地面に突(つ)き刺(さ)さる。倒(たお)れた不二子の両足の間の石畳(いしだたみ)を砕(くだ)き、さらに地中へと回転して潜(もぐ)っていく。

「体内で生成したそれは私の身体の一部だ。飛び道具を卑怯(ひきょう)と思えばこそ、身を削(けず)る。先代はそのように考える人だった。さぁ、少女よ、立ち上がり、私に向かってこい。資格が無い者に私はせめて戦うチャンスを与える。任務よりも感情を優先させる。先代がそう言っていたからには私はそうする」

竜は言った。

震(ふる)える足で不二子は立ち上がった。

しかし、その脳裏には先ほど見せられた記憶(きおく)がまだわだかまっていた。

――お兄様……。

真実を知ってしまった。自分の十年抱(いだ)いてきた気持ちはすべて偽(いつわ)りの上に立脚(りっきゃく)したものだった。そのことが自分の身体を無意味なものに思わせていた。

「立ったか。だが、そのようなおぼつかない足取りではどうにもならんぞ」

竜は冷たく言い放った。

○

「ってことだってさ」
　リリィは竜の言葉に肩をすくめた。
「だから、キミも気絶した方がいいよ。女の子の身体にドリルが食い込むとこなんて見たくないだろ？　江藤くんを殺したら、竜は再び眠る。そうしたらパスワードを録音したあれを破壊しよう。そうすれば、すべておしまい。キミが寝てるうちに終わる」
「それじゃよくないから僕は立ってるんですよ」
　阿九斗は正面からリリィを見据えた。
「じゃあ、どうする？　ボクを乗り越えて竜と戦うって？」
　リリィはからかうように言った。
「それじゃあキミは自ら魔王になろうとしてるってことじゃないか」
　さすがにその指摘は正しく、阿九斗は言葉に詰まった。
「う……うまくやりますよ、魔王にならないように」
　するとリリィは大笑した。
「ははは！　いいねぇ！　そういう覚悟もない奴をますます通すわけにはいかないね！」
　再度リリィはパンチを打ち込んでくる。阿九斗はまたも吹き飛ばされた。

――た、確かに、僕には覚悟はないかもしれない……。

阿九斗は自分の気持ちが揺(ゆ)らいでいることに気づいていた。どうも格好をつけてしまう癖(くせ)がある。今回のことも勢いだけで言ってしまったにすぎないような気がする。

が――

「覚悟はある！　覚悟はあるぞ、紗伊(さい)阿九斗！」

声が聞こえてきた。

絢子が立ち上がっていた。

阿九斗は顔をあげる。

絢子はリリィと阿九斗に向かって声を張り上げていた。

「貴様になくとも私にはある！　貴様が魔王になるようなら、私が貴様を殺す！」

その言葉で意識がはっきりした。阿九斗は立ち上がる。

「まいったな……そういうことなら、僕も立たないわけにはいかない」

阿九斗は絢子を見た。

「自分でも困った性格だと思ってるんだ」

見つめられて、絢子は顔を赤くする。

「な、何がだ？」

「目の前のことも、今後のことも、全部うまくいくようなことがしたいんだよ。優柔不断で覚悟がない。だけど、君が殺してくれるってのなら、それも覚悟になる……のかな」

阿九斗は微笑んだ。

絢子は顔をそらして言う。

「な、情けない奴だ」

「そういうことです、会長」

阿九斗はリリィに向き直った。彼女は感心したような顔になる。

「女殺しだね。支配者向きだな、キミは」

「え？　そんな風に考えたこともありませんでしたが」

「そうかい、自覚無しか」

リリィはそう言うと、再び腕を伸ばした。が、今度は阿九斗にではなく、絢子に。

「くっ！」

絢子は繰り出されてくるパンチをなんとか刀で受け止めるが、パンチの数は次々と増える。やがて耐えきれなくなり、吹き飛ばされた。

「服部さん！」

阿九斗は声をあげる。絢子は再び地面に叩きつけられてうめいた。

「う……。こっちはいいから、お前は……」

「わかった」

絢子の覚悟は痛いほどわかる。阿九斗はリリィに向かって身構えた。

「こっちも行きます」

阿九斗は地下納骨堂で使った竜巻の増幅を思い出していた。あの風の術式さえ思い出せば、弾丸がなくとも同じ事が再現できるはずだ。あの弾丸が起こしていた術式のパルスを思い出す。それと同じ脳内信号が出せるように指先を動かし、言語でその信号をフォローする。

「心に起こすざわめきを風に！」

阿九斗の手の中で生まれたつむじ風が瞬時に拡大し、竜巻と化してリリィに迫る。唸りを上げてうねる高さ数十メートルの竜巻を、しかしリリィは平然とした顔で待ち受ける。

「所詮はマナの風。マナの流れはマナで止められる。覚えておくといい」

リリィも同様に手の中で風を起こした。やはりその風も瞬時に成長して竜巻になるが、阿九斗のそれとぶつかったとたん、嘘のように風はかき消えた。

「マナによる遠距離攻撃はマナの操作で簡単に消えてしまう。以前、キミがやったようにマナによる圧力で相手の手足をへし折るようなことも、本来はかなりの力量差がないと不可能なんだ。距離が離れると力は一気に弱まるからね」

リリィはそう解説した。

「勉強になりました。それじゃ、結局、直接に殴り合うのが一番いいってことですね。そうなると、純粋に体内のマナ量が問題になる。会長みたいに身体の小さい人は不利になるはずだ」

阿九斗は言った。何気ない言葉だったが、それを合図に、何故かそれまで傍観していた三役が全員揃って弾かれたように身体を緊張させるのが見えた。

――？

リリィの様子がおかしかった。顔を伏せて身体を震わせ、手をゆっくりと小粋な帽子の鍔に這わせた。

三役が全員声に出して慌てはじめる。

「いかんぎゃ！」

「うがぁああ！」

「会長が帽子に手を触れると大変なことに！」

リリィは身体を震わせていた。

「身体が小さい……？」

再び顔をあげたリリィの顔は怒りに満ちていた。そして帽子の鍔を指で挟むと、一気に横に引いて帽子の前後を変える。

「ああ！　ついに会長が帽子を逆に！」

「ああなると止まらないぎゃ！」

三役は抱き合って身を震わせた。

「死ねやぁあああ！」
リリィは咆えた。両腕がその身体の左右から消える。
――うぉ！
阿九斗は驚愕した。いや、驚愕する暇もなかった。身体の周囲全方向から複数の拳が降ってきたのだ。
「うわぁああ！」
全身を殴打されながら阿九斗は見た。周囲数十メートル四方がすべて拳で埋め尽くされていたのを。
さらに殴打は阿九斗の身体を空中に跳ね上げ、落下を許さない。空中に拳が乱舞する半径数十メートルの球体が出現したようなものだ。その中央に風に舞う羽のように揺れているのが阿九斗だ。
阿九斗が動かなくなったのを確認してから、リリィはようやく拳を止めた。その目の光がようやく正気に戻っている。
「気絶してくれたか」
地面に落下した阿九斗を見て、リリィは帽子を戻してから背後の様子を確認する。
不二子はなんとか竜の攻撃をかわしているようだが、元々が薬物制作が専門の彼女が近接戦闘でどうこうできるはずもない。ゆっくりと壁の隅に追いつめられていく。
「可哀想だが、敵は討ってやるぞ」
リリィは不二子に聞こえないように小さくつぶやいた。
が――

「まだ終わってません」
　阿九斗の声が響いた。
　リリィはさすがにぎょっとして振り返る。
　痣だらけにはなっているが、阿九斗は立ち上がっていた。おぼつかない足取りで前進してくる。
「まだ殴られ足りないか！」
　リリィは両腕のパンチを激しく繰り出す。正気こそ失っていないが、キレている時と同じ威力の打撃を的確に阿九斗の急所に打ち込んでいる。
　しかし、阿九斗は歩を進めるのを止めなかった。
「はは……会長も親切ですね。喧嘩の仕方を教えてくれているんだもんな。わかりました。喰らうとわかっていれば痛くない！　それがコツなんだ。なるほど」
　阿九斗はぶつぶつとつぶやく。
「あはは……よくコツがわかったね！」
　半ば恐怖しながらも、空元気でリリィは笑う。当たり前だが学内で最強を誇る生徒会長である。その拳は自分のことをチビと言った騎士団をひとつ壊滅させたこともある。その拳を浴びながら、阿九斗は前進してくる。
「おまえたち！」
　リリィは三役を呼ばわった。

「はい！」
　三役は背筋を伸ばし、即座に戦闘準備に入った。まとった服を銀色に硬化させ、鎧を着込み、獣化する。
「加減するな、やれ！」
　その指示で三役は息のあったフォーメーションを見せた。三方から同時に阿九斗に襲いかかる。銀の刃が頭上から、獣の牙が右方から、身長ほどもある斧が左方から。ひとつひとつが阿九斗を苦しめた攻撃であり、さらにはかわしきれるはずもない。
　しかし――
　阿九斗は前進を止めなかった。
　その口で銀の刃を受け止めている。右手だけで獣の爪を握っている。左手で刃が指に食い込むのもものともせず斧を握っている。そして、そのまま三役全員を引きずりながら前進しているのだ。
　リリィはさらに殴打を加えた。だが、阿九斗は歩を止めない。
　やがて阿九斗はリリィのすぐ前にまでやってくると、身体を揺すって三役を放り投げた。驚くべき膂力だった。三役は全員が十メートルほども宙に飛んだ。
「うわぁああ！」「ぎにゃああ！」「おおお！」
　三者三様の悲鳴をあげてから、三役は床に叩きつけられた。がしゃがしゃと激しい音を立てて三役は床に伸びる。

リリィは拳を止めた。その額から汗を流しつつ、長身の阿九斗を見上げて毒づく。

「冗談じゃない。何でそこまでやらなきゃならんのだ」

「なんとなくです。全部うまくいく方法を考えたら、こうしようかな、と思っただけで。それほど後先は考えていません。だから、なんとなくです」

阿九斗は傷だらけの顔でリリィを見下ろした。

リリィは肩をすくめた。

「馬鹿か。そんな理由でそこまで頑張られたら、どうでもよくなっちまった。最後の必殺技をくれてやってもいいんだが、やめた。竜に殺されるか、服部に殺されるか知らんが、勝手に死ね」

その言葉の意味に気づいて、阿九斗は、はっ、とした。

「じゃあ……」

「うるさい。ボクは負けたわけじゃない。面倒になっただけだ」

リリィは後ろを指さした。

「ありがとうございます」

阿九斗は頭を下げた。

「礼は服部に言え。ボクも彼女の言葉を信じてのことだ。キミの行動が間違っているとは今でも確信してるよ、ボクは」

リリィは絢子に向かって顎（あご）を振った。阿九斗もそちらを振り返った。倒（たお）れていた絢子は、ようやく立ち上がったところだった。痣になった頬（ほお）を恥（は）ずかしそうにおさえ、早く行け、と阿九斗に向かって手を振った。

「全部うまくやってみせますよ。僕は間違ってるんでしょうか？」

阿九斗はリリィに向かって言った。

リリィもそれに応（こた）えて口角を上げる。

「間違ってるから魔王（まおう）というんだ」

阿九斗はリリィの横を通り過ぎようとしたが、彼女はふと思い出したように阿九斗を呼び止めた。

「ちょっとまった」

「？」

歩を止めた阿九斗に、リリィは「かがめ」と指で示した。

不思議に思いつつも阿九斗が腰（こし）をかがめると、リリィはひょいと背伸（せの）びをした。

「約束のご褒美（ほうび）を忘れていた」

リリィは阿九斗の頬にキスをした。

○

顔の横に打ち込まれた杭（くい）のような金属棒に不二子は恐怖（きょうふ）した。

もはや抵抗の術はなかった。手持ちの薬物は使い果たしている。もっとも竜相手に薬物が効いたかどうかはわからないが。

壁際に追いつめられ、不二子はそれでも兄のことを思い出していた。

ずいぶん長い間、兄には不誠実だったことになる。わかってみれば、兄は誠実で、強かった。子供時代のイメージの方が正しかったわけだ。だが悔やんでももう遅い。妙に突っ張って生きてきた自分が悔しくて仕方がない。本当は兄に甘えたかったし、その気持ちを抑え込んできたのも悔やまれる。表の顔を作り出すのに費やしてきた苦労はまったくの無駄だったし、裏の顔を作り出すために使った卑怯な手段も兄ほどの才能がない自分がどうにかして虚勢を張るための無駄な努力だった。

――とはいえ、死ねばそれからも自由になれますものね……。俗流の信仰で言えば、お兄様のもとへ行けるってところかしら……。

不二子はそう思うとおかしくなって頬に笑みを浮かべてしまう。

その顔のすぐ近くで竜の顎が大きく開かれた。喉の奥から金属臭が流れてくる。不二子は胃のむかつきを感じた。

その時――

「もう大丈夫です先輩。ここは僕がなんとかします」

阿九斗の声がした。

不二子はそちらに顔を向ける。

背の高い彼が門の奥にまで入り込んでいた。竜のすぐ背後に立っている。どう見ても立っているのがやっとのぼろぼろの格好のくせに胸を張っている。

竜もそちらに首をめぐらせた。

「威勢(いせい)の良いことを言う人間は大抵(たいてい)が薄(うす)っぺらい。資格無きものが資格有るように振(ふ)る舞(ま)うことは苛立(いらだ)たさせられる」

そう冷たく言い放った竜は、阿九斗に向かって口を開き、螺旋(らせん)の刻まれた金属棒を凄(すさ)まじい速度で吐(は)き出した。

長さ一メートルほどのそれは轟音(ごうおん)をあげて回転して突き進む。

しかし、阿九斗はそれを避(よ)けなかった。

「っりゃあぁ！」

最後の気力を振り絞(しぼ)るように叫(さけ)ぶと、右の拳(こぶし)を回転する金属棒に向けて打ち込んでいく。

回転し飛翔(ひしょう)する金属棒と拳とが激突(げきとつ)する。

金属同士をこすりつけた際の耳をつんざく音が周囲に響(ひび)き渡(わた)る。

「なんと！」

竜が驚愕(きょうがく)の声をあげていた。

金属棒は阿九斗の拳によって空中でその勢いを止められていた。回転こそ止まらないが、その先端は阿九斗の拳に穴をうがつことはなかった。拳と回転する金属棒の先端とが火花を散らし、やがて金属棒の回転数が音を上げた。乾いた音とともに金属棒が地面に転がる。

「喧嘩が得意じゃない以上はこれしかやり方を知らないんだ」

　阿九斗は痛そうに右手を振る。

　竜は面白そうに声を弾ませた。

「お前に資格があるかどうかはわからないが、百年ぶりだ、そのような男は！」

「百年寝てただけじゃないか。買いかぶりすぎだ」



阿九斗の憎まれ口が終わるのを待たず、竜が今度はその尻尾を横なぎに振ってくる。丸太のような太さの尻尾である。だが、今度も阿九斗は拳で受け止めた。

竜の鱗と拳との間で火花が散る。竜の尻尾は阿九斗を地面に這わせようと押し込まれる。

それでも阿九斗は踏みとどまった。竜の尻尾を押し返す。そして、汗まみれになり、肩で息をしながらも、もう一度、と手を振る。

「どういうつもりだ?」

竜は不思議そうな声をあげた。

「僕が君を殺さないで、君が僕や先輩を殺さずに済むためにはどうしたらいいかと思って。多分、殴り合うのがいいんじゃないかな?　僕らサイズは違うけれど」

阿九斗はどうやら真剣に言っているようだった。竜は声をあげて笑った。

「ははは!　これまで私はそんなことを言われたことはない!　いいだろう、見事に殴り合ってみせろ!」

それから竜と阿九斗は向かい合って足を止め、金属棒と拳、尻尾と拳で殴り合った。互いに二十発までは数えたが、どちらも疲労のためにそこから先は数えるのを止めた。

そして——

最後の一発と決めたのか、竜は頭を阿九斗に向けて振ってきた。唸（うな）りを上げて迫（せま）ってくるそれに、阿九斗はやはり拳を突（つ）き出す。

金属同士がぶつかって割れたような音だった。

その音の響きが消えた時、一人の人間と一体の竜がゆっくりと同時に倒（たお）れた。

その光景を目の前で見ていた不二子は、まだ何が起きたのかを理解できていなかった。それでも、自分が何をすべきかはよくわかっていた。

不二子は阿九斗に駆（か）け寄った。

○

「名前はなんと言う？」

横に転がっている竜が聞いた。

地面にうつぶせになっていた阿九斗は何もかも面倒（めんどう）くさくなっていたが、問われて答えないわけにはいかなかった。

「紗伊阿九斗」

「ひどい名前だ」

「所詮（しょせん）が孤児（こじ）の名だ。ほっといてくれ。君は？」

「ピーターハウゼン」
「ひどい名前だ」
「死んだ主がつけた名だ。彼はセンスが悪かった。だが気に入っている」
「主とは良い関係だったらしいね」
「良い男だったからな。これからもそうありたい」
「死んだんだろ？」
「新しい主とだ」
「そりゃ良かった。おめでとう」
「馬鹿かね、紗伊阿九斗。君のことだ」
——はぁ？
　阿九斗は思わず身体を起こしていた。
「どういうことだ？」
「目覚めた私は主を必要とする。でなければ好きこのんで起きるたびに人など殺すか」
「資格がいるんだろ？」
「だから私に勝つのも資格のうちだ」
「いや、ちょっと待った！　遠慮する！　辞退する！」
「そうはいくか。そうなったら私はまた周囲の人間を殺さなければならなくなる」

「いや、待った！　そもそも主になったところで、何か僕に義務が発生したりするわけ？」

「何もない。だが、通常、私の主は魔王（まおう）と呼ばれる」

――しまった……また後先考えなかったよ……。

阿九斗は頭を抱（かか）えた。

と、いきなり不二子が走ってきて抱（だ）きついてきた。

「うわっ！　何ですか、先輩」

「いいえ、先輩なんてやめてくださいませ！」

不二子は潤（うる）んだ目で阿九斗を見ていた。

――これはやばいぞ……。あんなもの見せられたショックで性格変わってないか？

「いえ、先輩、落ち着いて……」

「だから、そんな言葉やめてくださいませ！　わたくしの魔王様！　黒魔術師として一生お仕えいたします！」

「ちょ……待って！」

阿九斗は不二子に押し倒された。

――これはさらに立場が悪くなったんじゃないかなぁ……。僕の夢は国家一級の……なんだっけ？

5　陽気な陰謀家

「つまりこれはどうかと思うわけだよ……」
阿九斗はぼやいていた。ピーターハウゼンが自分の主はここに住むべきだと主張したからだ。
あてがわれたのは地下宮殿の一室である。絵本にある王様の謁見室そのものの造りで、赤絨毯の敷かれている上にやたらと背の高い椅子が置かれている。そして、その椅子に阿九斗は座っているのだが、どうにも尻がむずがゆく感じられる。
「それに、あれだよ、これは傍から見たらさ……」
「傍から見たらなんだと？」
　ピーターハウゼンが不思議そうに聞く。
「傍から見たら完全な悪役だと思うんだよね」
　阿九斗は言った。背の高い椅子にはドクロの装飾が施されている。そこで阿九斗は足を組んで座っている。椅子の肘掛けに外側から腰をひっかけ阿九斗の肩にしなだれかかっているのが、いまや黒魔術師としての本分に目覚めて阿九斗に勝手に忠誠を誓っている不二子。さらにはけーなが面白がって阿九斗の膝の上に乗っかっている。おまけに横には不機嫌そうな顔で刀を手に絢子まで突っ立っている。極めつけが椅

子の後ろで丸くなっている全長十五メートルの竜であるピーターハウゼン。最後にヒロシところねが階段下に控えている。

「世界を征服しそうにしか見えないな。写真でもとって学級新聞に載せるか」

それを少し遠くから見ていたリリィが半ば呆れ、半ばからかうように言った。三役もうなずいている。

「勘弁してください！　僕は寮に戻りますからね！　普通の学園生活を送るんだ！」

阿九斗はわめく。

「往生際が悪いね、しかし……」

リリィは肩をすくめた。

○

帝都某所。ビルの執務室に彼はいた。はっとするような美形だが、不思議と嫌味がなく、誰とでも気さくに話しそうなさわやかな印象がある。

彼——大和望一郎は窓の外の日本庭園を眺めていた。何か考え事をしているようにも見えるし、何時間でも飽きず眺めることができるほど庭園に対して深い理解があるようにも見える。

　と、その庭園に不躾(ぶしつけ)に足を踏(ふ)み入れた人影(ひとかげ)があった。望一郎の表情が曇(くも)る。が、庭園を踏み荒(あ)らしたその少女は、望一郎の表情の変化に気づいた様子もなく、窓を開けて部屋に飛び込んでくると、ただ自分の感情を望一郎にぶつける。

「ねぇ！　あの紗伊(さい)阿九斗と服部(はつとり)絢子を責(せ)め苛(さいな)んでおくれよ！」

　栄子(えいこ)はそう叫(さけ)んで椅子に座っている望一郎に身体を預ける。

「責め苛むとはおだやかじゃないな」

「だってさ、あいつら頭おかしいんだよ！　死んじゃえばいいのさ！」

「そうだね。でも、結局、紗伊阿九斗は死ななかったなぁ……」

　思い出したように望一郎は言った。

「そうだよ。それも変だよ。どうしてなのさ？」

「うん。未来予測はあくまで予測だからね。あまり複雑なことになると外れることもあるんだよ。でも、今回はちょっとおかしいな。何しろ、紗伊阿九斗は封印(ふういん)を解いて、確実に死ぬはずだった」

　望一郎が考え込むように顎(あご)に手を当てる。栄子が激しく同調した。

「そうだよ！　そう言ってたよね？」

「ところが、どうやら封印を解いたのは別人で、それを紗伊阿九斗が救ったらしい。そこに予定が変わった秘密があるのかもしれない」

「どういうことさ？」

栄子が望一郎の身体をよじ登って膝の上に座り、その首に腕を巻き付けて甘えるような仕草をする。

望一郎は彼女の頭を撫でながら応じた。

「短期間で彼が成長してしまったんだよ。それとマナの制御にはその時の精神状態が大きく関係している。何か彼を本気にさせるような要因があったんだろうね」

「すごいね！　さすがなんでもわかっちゃうんだね！」

栄子は子供のようにはしゃいだ。

望一郎は照れたように笑った。

「伊達に長生きしてないさ。ほら、それより実家に仕事の報告に行かないといけないんだろう？」

望一郎はそう言って栄子の尻を軽く叩いた。栄子はふざけて身をよじると、執務室を走って出て行く。

栄子が居なくなってから、望一郎は長いため息をはき出した。ふと首もとからペンダントを取り出し、それを手で弄ぶ。ペンダントはロケットになっており、蓋を開けると中から立体写真が浮かび上がった。金髪の美女の姿だ。

まるで栄子に座られて汚れたとでもいうように膝上を払って椅子に座り直し、望一郎は写真に見入った。

「ねぇ、時は長いね……。いい加減疲れてきたよ。そろそろ完全に決着をつけてもいい頃なんじゃないかな、あの魔王とさ」

望一郎は誰に言うともなくつぶやいた。

あとがき

とりあえず水城正太郎です。元気？　俺は、まぁ、そこそこ。

そんなわけで二巻目です。あとがきも二回目。前回のあとがきを踏まえた話をするべきかと思いきや、全国の不味いもの情報が山のように押し寄せるということもなく（そりゃそうだ）、日本国民の良識、というか味覚の正常さには感心するばかりで、前回の続きは出来そうにありません。そうだよね、普通は不味い店ってつぶれるんだよね。

とはいえ、自分自身のひねくれた性格は直りそうもないので、やはり似たような話になるのですが、最近になって関心がある『善行』の話をしたいと思います。関東にある地名の『ぜんぎょう』でなく『ぜんこう』。良いことをする、という意味のアレ。唐突といえば唐突な話ですが、昔から「俺はこんな悪いコトしたぜ」という自慢はあるものですが、「俺はこんな良いコトしたぜ」という自慢は無いなぁ、と最近気づいたのです。そういう自慢が街をうろつく乱暴者たちの間でも流行るようになれば、日本はもっと良くなるはずだぜ、ってんで、そうなったらどんな会話が繰り広げられるのかシミュレーションしてみましょう。

「俺もよぉ、今はこんなだけど、昔はメチャクチャ善人でよぉ」

「マジっすか？　先輩(せんぱい)、そういう風には見えませんよ」
「だろ？　けどよぉ、昔は地元じゃ名の知れたボランティアよ」
「ホントっすか？　マジ半端(はんぱ)ねぇっすね」
「もっと小さい頃は募金(ぼきん)で満足(まんぞく)してたんだけど、ホントは金が困ってる人んとこ届(とど)いてねぇって話聞いて、むかついてよぉ」
「そうっすよね、金を動かすだけの募金団体あるっすもんね。あんなんヤカラっすよ」
「募金詳(くわ)しいってことは、お前もやってたんじゃねぇの？」
「いや、先輩みたいなんじゃねぇっすよ。半端っすよ、マジ。外国の孤児(こじ)の里親制度(さとおやせいど)ってあるじゃねぇっすか。先輩なら知ってると思うっすけど。あれやってるんすよ。数万円だけしか出してないんで半端なんすけど……」
「なんだよ、お前もおとなしい顔(かお)してやるじゃねぇか」
「いや、先輩にはかなわないっすよ」

　断言(だんげん)してもいいが、これは流行らない。善行自慢がないわけです。善行とは難(むずか)しいというか、退屈(たいくつ)ですね。世の中、善行ほど自慢しにくいものはないというところかと。あなたのした善行を編集部(へんしゅうぶ)宛(あて)まで送っていただいても、紹介(しょうかい)はしませんのでよろしくお願いいたします。

で、作品の話です。

今回も説明というか解説の必要もない作品に仕上がっております。気楽に読んでくださいませ。ただ書く方としては気合いが入っているので、読んでる皆様も無闇に気合いを入れてくれれば嬉しいです。深夜以外に人のいない場所で叫ぶとか。ともあれ、幸いにしてこれからガンガン行かせていただけるってことですので、皆様もガンガンよろしくです。こちらもまだまだ頑張ります。

皆様に謝辞を。

イラストの伊藤宗一さん。伊藤さんは世界を狙える人だと思います。今回はラフを見たときから驚きっぱなしです。個人的に生徒会長はストライクです。友達にも恋人にも知人にすら持ちたくないけれどもイイ！　というキャラクターははじめてです。性格設定した本人にもこいつは予測不能でした。

担当のO橋さん。今回もお疲れ様でした。今度は少々楽が出来る時期に仕上げたいです。何度も同じ言葉を繰り返すつもりかと問われれば、そのつもりはないと答えますが、それでも作業に時間がかかるのが不思議です。いつか早くなると祈りながら仕事をしています。

そして関係者の方々にも感謝を。

さて、まだまだ一緒に楽しめそうですぜ！

◆ご意見、ご感想をお寄せください……ファンレターのあて先◆

〒151―0053

東京都渋谷区代々木2―15―8

(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部

水城正太郎先生／伊藤宗一先生

PROFILE

水城正太郎 みずきしょうたろう

『東京タブロイド』シリーズ（富士見ミステリー文庫）、『せんすいかん』シリーズ（ＨＪ文庫）。『ホビー・データ』を経て、現在ライター集団『A-ＴＥＡM』主催。この間、ボードゲームやってたんですが、ルールが把握出来ずに、何故だろう何故だろうと思っていたら、どうやらルールそのものが妙だったようです。というかゲームの目的が「スペイン全土に影響力を持つこと」になってる。壮大すぎてわからん。

伊藤宗一 いとうそういち

兵庫県在住のイラストレーター兼漫画家。
一般向けから成年向けまで幅広く活動中。
好物は、熱血・筋肉・萌え・エロ・爺。
〈一言〉
前回よりもさらに全力ではっちゃけた挿絵になりました、喜んで頂けると嬉しいです。
派手なのは楽しいです。もっと描かせてください（笑）

HJ文庫

いちばんうしろの大魔王 ACT2

2008年5月1日　初版発行

著者―― 水城正太郎

カバーイラスト―― 伊藤宗一　　装丁―― 西村 大

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン　〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8